

戦姫絶唱シンフォギアBLACK

土紋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗黒結社ゴルゴムの壊滅から二年。仮面ライダーBLACKこと黒山陽介は穏やかな日常の中にいた。

しかし少女達の歌が響いた時、彼の新たな戦いが始まる。

目次

| | | |
|-------|-------------|-----|
| 第一話 | 走り続ける者 | 1 |
| 第二話 | 目覚めのうた | 6 |
| 第三話 | 切り払う者 | 10 |
| 第四話 | あなたはあなた | 16 |
| 第五話 | 乱剣？ | 24 |
| 第六話 | 怪人 | 31 |
| 第七話 | 夜に舞う | 41 |
| 第八話 | 剣と仮面 | 50 |
| 第九話 | 一夜明けて | 62 |
| 第十話 | いつか私も輝ける太陽に | 69 |
| 第十一話 | 剣聖 | 79 |
| 第十二話 | 私の娘はかわいいのだよ | 95 |
| 第十三話 | 揺れる弾丸 | 105 |
| 第十四話 | 迫る者 | 113 |
| 第十五話 | 私の我儘 | 122 |
| 第十六話 | ヒーローごっこ | 136 |
| 第十七話 | 嘆きの先 | 148 |
| 第十八話 | 蝙蝠をうて！ | 156 |
| 第十九話 | じゃあ行こうか | 175 |
| 第二十話 | 合流のちに決戦 | 184 |
| 第二十一話 | V S ビルゲニア | 197 |
| 第二十二話 | そのころの二課地下 | 210 |
| 第二十三話 | 嵐の拳 | 220 |
| 第二十四話 | さらば剣聖 | 231 |

| | | |
|-------|---------|-----|
| 第二十五話 | 飛蝗は跳ぶ | 242 |
| 第二十六話 | 立ち上がる者達 | 253 |
| 第二十七話 | 不朽不滅 | 266 |
| 第二十八話 | 決着、そして | 277 |
| 第二十九話 | 1つのおわり | 288 |
| 番外1 | | 300 |

第一話 走り続ける者

「忘れるな」

夢を見た。

「貴様が殺したのだ」

同じ夢だ。これで何度目だろう。

「貴様は一生、この俺を殺した事実苦しんでいくのだ！」

あの日の出来事をずっと繰り返し見せられる。わかっている。俺は結局救えなかった。だから、止まることは許されない。走り続けなければ、例えゴールが見えなくても。

俺は、俺は。

・・・俺は。

☆

軽快な電子音が聴こえ男の、黒山陽介の意識が覚醒する。体を起こし音の発生源、目覚まし時計を止める。

「また見ちまったか・・・」

乱雑に自身の頭を掻きながら布団から起き上がる。

「よう」

朝食を適当な総菜パンで済ませ腹を少し満たし、身支度を整え彼は自身が住むアパートから出発した。

この2年で走り慣れた道路をバイクで走る。向かう先は自身の職場。

「ん？」

その途中、何やら妙な光景が視界に写る。

歩道に設置されている木に登り何かに向けて手を伸ばしている少女。近づくとその少女は見覚えのある髪型をしていた。バイクを木の隣に停車させ、少女に声をかける。

「何やってんだ、響ちゃん？」

「え？、あー！、ヨウさん！」

声をかけられた少女、立花響は腕に何かを抱えながら陽介に笑顔を向けた。今日も元気そうだなあ。と、思いながら陽介は響が抱えているモノを確かめる。そこにいたのは白猫だった。

「なるほど、猫助けか」

「そうなんですよ。鳴き声が聞こえるな。って思ったら木の上にいてビックリしました！」

たははくと、笑いながら響は答える。しかし彼女はどうやって木から降りるのだろうか？。地上から約3メートル離れ、猫を抱えている。端的に考えても今の彼女の状況は危険なのだが……。

「ヨウさ〜ん。いきますよ〜」

「ん？ーっておい!？」

待てと言う前に響は陽介に向かって飛び降りた。バイクから降りしつかりと受け止める。

「まったく危ないじゃないか」

「えへへ〜。ヨウさんなら大丈夫ですよ」

「いやいや、だからっていきなり飛び降りるのはダメでしょ」

「わかりました！。次は言ってから飛び降ります！」

「飛び降りるのは確定なのか・・・」

何がそんなに嬉しいのか腕の中でニコニコと笑う響を地面に下ろす。この2年で随分懐かれたなと思う。彼女の腕の中にいた猫はするつと脱け出し路地裏に向かって走り去って行った。

バイバイと、響は猫に向けて手を振った。

「ところで響ちゃん」

「はい？」

「君、学校はいいのかい？」

「・・・」

笑顔から一転、彼女の顔が絶望に染まった。

「うわ〜ん!?!どうしよう!?!私ってばやっぱり呪われてる〜!?!」

やれやれと思いつつ彼女にあるものを投げ渡す。響は慌てながら受け取ったものを確認する。それはヘルメットだった。

「乗りな。途中まで送るよ」

「いいんですか!?!」

「オツケーオツケー」

「ありがとうございます!」

ヘルメットを装着し自身の後ろに乗り込む響を確認し陽介はバイクを走らせた。

☆

夕方。あれから、響を彼女が通う私立リディアン音楽院の近くまで送り、バイト先の喫茶店ストーンで労働に励んだ。帰路につこうとしたらとある組織から支給されている通信機からアラームがなった。

緊急用のアラームだ。

『はい』

『お仕事の時間ですよ』

『ノイズだな？』

『いや、そうなんですけど、もう少し世間話でも』

『場所は？』

『せっかちですね。今送りますよ』

通信機の画面に表示される場所を確認し、すぐさまバイクを走らせた。

☆

通信機に表示された場所、商店街に到着するもその光景に思わず眉を潜める。日が沈みかけた道には人の気配がまるでなく変わりに幾つもの黒い砂、炭素の塊が点々としていた。その中蠢いている集団が見える。灰色の人の形をしたナニか。あるいは人並みの大きさのナニか。

認定特異災害ノイズ。有史以来から確認される人にとって天敵とも言える存在である。

陽介は周囲を見渡す。炭素の塊、ノイズの犠牲にあってしまった人達の成れの果て。その近くには買い物袋やぬいぐるみなどが散乱していた。

心に火が灯る。

体の丸めるようにし全身に力を込める。骨が、筋肉が軋む。

「変・・・身！」

腕の大きく振るうと腰部に埋め込まれた王の石、キングストーンを

中心に細胞が閃光しベルトの形を創る。ベルトから全身に強大なエネルギーが流れ身体が変わっていく。彼の姿がバツタのような姿に変わるがそれだけではない。その姿を覆い包むように鎧のような新たな外骨格状皮膚を形成する。全身は黒くなり、真つ赤な目が光輝く。肘や膝の装甲いや皮膚の隙間から余剰エネルギーが蒸気として噴出されると、彼の身体は完全に変わった。

「仮面ライダー・・・ブラックッ!!」

名乗りを挙げる。その声に反応しノイズ達がギュピギュピと気の抜けそうになる音をたてながら近づいてくる。

「往くぞー！ トオアー！」

色がついたノイズ達を迎撃する。

暗黒結社ゴルゴムの壊滅から2年。仮面ライダーBLACK、黒山陽介の戦いはまだ終わったはいなかった。

第二話 目覚めのうた

人類がノイズを災害としか対応出来ないのはその特性にある。

位相差障壁。その存在を人間の世界とは異なる世界にまたがらせることで、通常物理法則下のエネルギーによる干渉をコントロールするということである。

簡単に言えば、こちらからは干渉できずノイズはこちらに一方的に干渉できるのである。

しかし、ノイズは発生から一定時間経過すると自壊するという特性がある。これによりノイズと出くわしても自壊するまで逃げれば生き残れるがそう簡単にはいかない。

ノイズは人間を襲撃するのだ。建物をすり抜け、放たれる弾丸をすり抜け、人間を襲い諸とも炭化する。何処までも、何処までも。

それは、改造人間である仮面ライダーも例外ではない。幾ら常人を超えた力を持っていてもノイズにとっては改造人間も人間であると判定しているようだ。

現在、ノイズに対抗できる有効な手段はある特殊なシステムを用いるだけだか仮面ライダーBLACKにそんなものはない。

・・・だが・・・

向かってくるノイズに拳を振るう。通常ならば触れた拳の先から炭化するがそうは成らなかった。BLACKの五体は無事で向かってきたノイズだけが砕かれ炭化した。

BLACKは周囲に群がるノイズ達を迎え討つ。

殴る。蹴る。次々とノイズ達を打ち砕いていく。

ノイズを10体ほど屠ると別のノイズの一団が向かってくるのが見えた。色は灰色だった。

その場から跳躍。街灯の上に立ちノイズ達を射程圏内に収める。

「キングストーンフラッシュュー！」

BLACKのベルトの中心にあるキングストーンが強烈な閃光を放つ。光を浴びたノイズ達に色がついた。

街灯から跳び降りノイズ達を再び打ち砕いていく。

すると、残っていたノイズ達が一カ所に集まり出した。自身の体を分解し他のノイズと混ざり合いBLACKを丸呑みできそうなほどの巨大な蛙のようなノイズに変貌した。

その巨体でBLACKに襲いかかる。BLACKはその場から跳躍しノイズの巨体から回避。着地し右拳を握り締めキングストーンから送られるエネルギーを集中させノイズに飛びかかる。

「ライダーパンチッ!!」

空中で身体の屈伸の反動を加えたその拳は空気との摩擦で赤熱化しノイズを殴り飛ばした。

ノイズは地面に墜ちることなく空中で炭化し崩れ去った。

ふうと静かに息を吐き、周囲の様子を確認にする。ノイズはいない。生存者もいない。炭化したモノの塊が増えただけだった。

こんなことがいつまで続くのだろう。

そんな思いに駆られていると通信機からアラームがなった。

『はい』

『無事か？ 陽介？』

『ゲンさん・・・？ えっと、こっちは大丈夫ですよ』

『そうか。それはなによりだ』

通信機から聴こえる声の主は自分が保護と協力体制にある組織の司令、風鳴弦十郎。2年前からの付き合いで頼りになる大人である。『ゲンさんが直接通信してくるってことは・・・』

『ああ。工業地帯の方にノイズが進行している。どうやら生存者を追跡しているようだ』

『生存者が!? わかりました！ 俺もすぐに向かいます！』

『翼も向かわせる。すまんが頼んだぞ』

『了解です！』

通信を切り、工業地帯に向かう為の戦友である愛機を喚ぶ。

「ロードセクターッ！」

B L A C Kの呼び声から数秒後、地平の彼方から1台のバイクが無
人で走ってきた。オンロード型のバイク、ロードセクターは暗黒結社
ゴルゴムとの戦いで生き残ったB L A C Kの戦友であり愛機ある。

自分の側に停車した愛機に乗り込み工業地帯に向かって走り出
した。

☆

一刻も早く生存者を救出する為に最高時速960kmを誇るロ
ドセクター疾走する。工業地帯はもう目と鼻の先だ。
その時だった。

「B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o
n.....」

歌が聴こえた。

まさか!?!と思うや否や、空に光が昇る。

細かいことはあとで考えることにして今は光の柱が昇った場所に
向かった。

☆

歌が聴こえる。

歌が聴こえる場所に近づいていくと改造人間として強化されている視力でノイズ達の姿も確認できた。

ノイズ達には既に色がついていた。

迷うよりも先に行動に移す。ロードセクターを一定の速度、時速800キロ以上に加速させる。すると、マシン上部を覆うアタックシールドが自動的に展開し、同時に前方ウィンドシールドが通常の透明フードからコンピュータ制御のスクリーンに変化し目視走行からモニター走行へと切り替わる。

「スパークリングアタックッ！」

群がるノイズを背後から蹴散らす。

ノイズの壁を抜けると2人の人間がいた。1人は小学校低学年程度の少女。そしてその少女を守るように抱えていたのは

「うえ!? な、なにになに!？」

「そんな・・・」

「・・・? あ!? 仮面ライダー!？」

幼い少女がこちらを見て嬉しそうに言うがその声に耳を傾けていられなかった。

「何故・・・君が・・・」

信じられない光景だった。今朝会った少女、日常の中にいた少女、立花響がシンフォギアを纏っていた。

第三話 切り払う者

「Imyuteus amenohabakiritron…」
唾然としていると別の歌が聴こえた。そして歌が聴こえた方向からノイズ達を切り裂きながら剣を纏ったようなバイクを駆けながら蒼い少女が現れた。

「つば」

「何を呆けているのですか」

こちらが声をかける前に彼女に叱咤される。いつもより雰囲気鋭い。頭を振り意識を集中させる。先ずはノイズを片付けてからだ。

「小物は私が。あなたは大物を」

「わかった」

「え？ あ、あの・・・」

「あなたはそこを動かないで」

「あ、はい」

蒼い少女、風鳴翼はバイクを降り剣を取り出しノイズ達に切り込んでいった。

こちらもロードセクターから降り近づいてくる巨大ノイズを睨み付ける。立花響はあわわと慌てていた。

構え、右足の先にキングストーンエネルギーを集中させる。

跳躍。身体を屈伸させ反動を加え巨大ノイズの胸部に右足を突き出す。

「ライダーキックッ!!」

ノイズを貫き着地する。工業地帯に炭素の山が出来上がった。

☆

ノイズが殲滅され、工業地帯は自衛隊と特異災害対策機動部第二課による後始末が行われていた。

そんななか、黒山陽介は立花響、風鳴翼に挟まれる形でいた。翼はすでにシンフォギアを解いているが鋭い目付きで響を睨む。響はそんな視線に困惑しつつまだ勝手がわからないのでシンフォギアを纏ったままだ。陽介もいつまでもこの状況ままではいけないと思い変身を解除しようとした。

背後。正確には右裏のふくらはぎの部分をつつかれた。何かと思い振り向くと、響が助けた少女がこちらを見つめていた。

「君は……」

しゃがみこみ視線を合わせる。

「あの……あなたが仮面ライダー？」

「……ああ、そうだぞ。大丈夫かい？ 怪我とかはしてないかい？」

「うん！ お姉ちゃんと仮面ライダーが助けてくれたから！ だから、ありがとう！」

「……そうか。……君もすごいぞ。よく頑張ったな」

満面の笑みを浮かべる少女の頭を優しく撫でる。怖い思いをしただろうに、お礼を言える良い子だ。

やがて、少女の母親が現れ無事再開。親子は二課のスタッフに連れられこの場を離れていった。

一息ついて変身を解除する。

「え？……」

「あく、響ちゃん。大丈夫」

「ええええええっ!! ヨウさん!?!」

「こんばんは。黒山陽介だよ」

「え!?! あの!?! ヨウさんが仮面ライダーで!?! 仮面ライダーがヨウさん!?!」

あわあわと全身で感情表す響に取り敢えずいつもの元気な彼女であることに安心する。そうしていると、彼女が纏っていたシンフォギアが解けた。

「わっ!?!」

体勢を崩す彼女を支える。

「あ、ありがとうございます」

「うん。ところで響ちゃん」

「黒山さん」

響の状況を聞こうとしたらそれを遮る用に翼が声をあげ周囲を黒服のお兄さん方に囲まれた。

「ん?」

「彼女との話なら後に。彼女は特異災害対策機動部第二課まで同行していただきます」

「とくい・・・なんです?」

響が疑問に答える間もなく彼女の手に拘束具が架けられた。

「うええ!?! なんて!?! あの、ヨウさん!?!」

「ごめん響ちゃん。説明は後ですから一緒に来てくれないかな?」

「ううう・・・わかりました・・・」

渋々納得してくれた彼女は黒い車に乗せられ悲しげにこちらを見ながら二課本部に連行されていき、自分もその後をついていった。

☆

「あの、ここって先生達がいる中央棟ですよね?」

今、彼等は響が言うように私立リディアン音楽院の中央棟を歩いていた。彼女の疑問はもつともだろう。先ほど翼が発言した組織。自分も所属している特異災害対策機動部第二課。通称二課は普通に考

えれば警察署のような建物を拠点していると考えられるだろう。それが何故響が通う学院を歩いているのか、彼女の頭の中は混乱しているだろう。

しばらく歩くと扉が開いた。中はエレベーターになっているがそんなことは響が知るよしもなかった。響を手すりに掴ませエレベーターが高速で降下する。甲高い絶叫が響いた。

「あはは」

「愛想は無用よ。これから向かう所に微笑みなど必要ないから」

翼は冷たく言い放つ。雰囲気は今だに抜き身の刀のように鋭い。そんな彼女に気をされたのか響は思わず陽介の服の裾をつまむ。

陽介は翼の雰囲気更に鋭くなった気がした。同行している黒服の爽やかな青年、緒川慎次は翼を見て少し微笑んだ。

☆

「ようこそ！人類守護の砦！特異災害対策機動部第二課へ！」

出迎えてくれたのは服の上からでも分かるほどの鍛えられた肉体を持った漢、二課の司令でもある風鳴弦十郎と二課の面々だった。

「いつの間に・・・」

部屋を見渡すとを完全にパーティー会場と化していた。

そして、陽介の影に隠れている響に白衣を着たメガネの女性、桜井了子が近づいてきた。

「さあさあ、隠れてないで出てらっしゃい。お近づきの記念にツーショット写真でも」

「いい嫌ですよ!?! 手錠をしたままの写真だなんて、きつと悲しい思

い出として残っちゃいますよ!? それに、今日初めて会うみなさんが私の名前を知ってるんですか!? ヨウさくん!? 説明してくださいよ!?!」

「え? あゝ二課はあれだ。秘密警察みたいなものだよ」

「雑!?!」

「あははゝ。二課の前身は大戦時に設立された特務機関なんです。なので調査は得意なんですよ」

いつの間にか現れた細目で黒服の男が説明しながら響の手錠を解除した。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえゝ。それにしても、ふゝむゝゝ」

「あの? 何ですか?」

「ゝゝゝいえいえ、何でもありませんよ。只、ちよつと観ただけですから」

「はあゝゝゝ」

そう言つて細目の男はその場から離れた。

「では、改めて自己紹介だ。俺は風鳴弦十郎。ここの責任者をしていゝる」

「そして私は『できる女』と評判の桜井了子。よろしくね」

「こゝ、こちらこそ、よろしくお願ひいたします」

「君をここに呼んだのは他でもない。協力を要請したいことがあるのだ」

「協力?ゝゝゝあ! ヨウさん!」

「んあ?」

「何呑気に自分だけフライドチキン食べてるんですか!」

「ああ、はい。これ響ちゃんの」

「わゝい! いただきまゝす! ゝゝゝじゃなくて! 説明てくださいよ! ヨウさんが仮面ライダーだったことについてとか!」

「まあまあ落ち着いて。あなたの質問に答えるためにも2つばかりお願ひがあるの。1つは、今日のごとは誰にも内緒。そしてもう1つは」

「・・・もう1つは？」

「取り敢えず服脱ごうか？」
「!？」

第四話 あなたはあなた

「それでは。先日のメデイカルチェックの結果発表」

翌日。響に事情を説明する為に陽介達は再び集まった。

先ず、響に行ったメデイカルチェックは彼女の身体に異常はほぼないと発表された。

次に、響が疑問に思った自身に発現した力について。

聖遺物、シンフォギア、適合者。と様々な専用用語を用いて響に説明されるが

「全然分かりません」

「だろうね」

無理もない。

「でも、私はその聖遺物？ というものを持ってません。それなのに何故？」

響の疑問にモニターに一枚のレントゲン写真が写し出された。

「ゲンさん、これは？」

「響くんの心臓だ」

「・・・何か、心臓の周りに破片みたいのがありますけど」

「これ、2年前の怪我です。ツヴァイウイングのライヴの時の」

「2年前か・・・」

「心臓付近に複雑に食い込んでいる為、手術でも摘出不可能な無数の破片。・・・調査の結果、この影はかつて奏ちゃんが身に纏っていた第3号聖遺物ガングニールの砕けた破片であることが判明しました」

「っ!？」

「翼ちゃん!？」

「だい、じょうぶです」

「いや、しかし」

「少し、外に出ています」

ふらついた翼を慌てて支えるが、翼は陽介を無理矢理振りほどき部屋から出ていった。

天羽奏。かつてのガングニールの適合者。陽介にとってはノイズとの戦闘で時折共闘したぐらいの認識だが、翼にとってはとても大切な相棒であった。

共に歩み、そして失った大切な人が持っていた聖遺物。それを見ず知らずの人間が持っているのだ。彼女の心中はきつと穏やかではないだろう。

「あの、質問何ですが」

「ん？ 何かな？」

「ヨウさん。仮面ライダーも適合者何ですか？」

「ん。それについては何と言ったらいいのかしら。似た部分は有るけど、私の桜井理論とは全然違うし」

「それについては俺が直接話すよ」

「・・・いいのか？」

「遅かれ早かれやってやつですよ。・・・さて、響ちゃん。君は仮面ライダーについてどれくらい知ってる？」

「えっと、3年くらい前から現れた謎の人物で、ゴルゴムから人々を守ってくれたヒーローってことぐらいしか・・・」

「まあ、世間に公表されている情報はそんなもんだよな。・・・えっとね、まず俺は改造人間なんだ」

「改造？ 義手とか何ですか？」

「そのままの意味だよ。見た目は人間だけど中身は人間じゃないんだ」

「・・・え？」

突然のカミングアウトに響は混乱している様子だが話を続ける。

「19歳の誕生日に俺た・・・俺はゴルゴムに拉致された。奴等のある目的の為に俺は改造人間に、いや、怪人にされるところだった」

「・・・」

「まあ、いろいろあつてゴルゴムから逃げ出して、奴等と戦つてどうにか壊滅させたつてかんじかな?」

「展開はや!?! いろいろ気になるんですけど!?!」

「もう終わったことだしな。長々と語ることにじゃないよ」

「ええ〜」

一瞬、重苦しい空気になったのを感じ話題を打ち切る。今はそこま
で語るべきではないと思つた。

「んで。結論から言うとな俺は適合者じゃない。仮面ライダーでもノイズには対抗できない」

「え? でも、昨日おっきいノイズをズガン! ってやつつけた
じゃないですか!?!」

「詳しいことは俺も解らんが、どうやらキングストーンのお陰らしい」
「キングストーン?」

「ゴルゴムが俺の体に埋め込んだ特別な石さ。この石の光を浴びせると
どういいうわけか1分くらいノイズに触れるようになるらしい」

「それだけじゃないわよ。装者の歌を増幅させるスピーカー的な役割
もしてるみたいなのよ」

待つてましたと言わんばかりに桜井了子が口を開いた。

「えつと、つまり?」

「仮面ライダーと装者が組めばノイズ対してかなりのアドバンテージ
をとれるという訳だ」

「おお〜!」

キングストーンから放たれる光を浴びたノイズには干渉でき、さらに
近くに装者がいればその歌を増幅し広範囲のノイズの位相差障壁
を無効化できるというのだ。

「と言っても、彼の持つキングストーンができるのはノイズの位相差
障壁を一時的に無効化するだけでノイズの他の特性はそのまま。シ
ンフォギアのようにノイズの炭化変換攻撃に対してのバリア機能は
ないのよね。」

「まあ、やられるまえにやれば問題ないので」

「・・・研究者としてはいろいろ納得できないんだけどね。光に含まれる成分とか振幅の波動は特にならないのに、光を浴びせるだけでノイズの位相差障壁を一時的に無効化って、過程をすっ飛ばして結果だけが残るのよ!? エネルギー総量は完全聖遺物に匹敵いやもしくはそれ以上? 人類の伝承にないだけでゴルゴムが秘匿していた異端技術の結晶であることは間違いない・・・やっぱり一度解剖して詳しく調べてみましょう! そうしましょう!」

「落ち着いて下さいよ了子さん!? キングストーン取り出したら俺死んじゃいますから!」

メガネを怪しく光らせとんでもないことを言い出す研究者を落착させる。

「で、今は二課に所属しているという訳だ」

「そう、なんですか」

大体の説明が終わり一息つくが、響は俯く。微かに震えているように見えた。

なるべく明るく説明してみたが、結局のところ自分は既に人間では失くなっていて。その事実は変わらない。今まで彼女とは仲良くさせてもらっていたが、彼女自身はどう思っているだろうか?

親しくなっていた友人が人でないなら人はどうするのだろうか?

排他か、共存か。

ほとんどは前者だろう。身近に自身で対応できない未知のナニかがあれば大多数の人間はソレに対して逃げるか、排除しようとするだろう。

「すごいです」

「え?」

だが、立花響はそうはしなかった。

「ヨウさんはすごいです。大変な目にあつたのに戦ってくれて、いろんな人達を助けて、すごく頑張ってくれたんですね」

「俺が怖くないのかい?」

「何言ってるんですか！ 私、知ってます！ 初めて合ったあの日からヨウさんがいろんな人達を助けてきたこと！ 車に轢かれそうになった子供を助けたり、道端で倒れていたおじいさんを助けたり、昨日だって私とあの子を助けてくれたじゃないですか!!」

彼女は誇らしげに言う。まるで自分のことのように。

「ヨウさんはヨウさんです！ だから、ありがとうございます!!」

輝く笑顔に胸が暖かくなった気がした。

肩に手を置かれる。力強い手だ。

「今さらそんなことを気にしてたのか？」

「ゲンさん・・・」

「お前はお前だろ？」

そうだ。答えは最初から出ている。

黒山陽介は改造人間である。

黒山陽介は仮面ライダーBLACKである。

だか、黒山陽介は黒山陽介である。

その身が人でないとしても彼は己の意思で進んできた。それでいいのだと安堵した。

「さて、立花響くん」

「はい？」

「いろいろ説明したがまだ困惑する部分はあるだろう。その上で、1つ約束してほしいことがある」

「約束ですか？」

「ああ。君に発現した力のことは他言無用でお願いしたい」

現在、ノイズに唯一対抗できるのはシンフォギアだけでありその力を狙う輩は数多くいる。響に宿った力を狙い彼女の周囲の人間に危害が及ぶ可能性があることを弦十郎は説明する。

響も納得しきれない様子だか、力の秘匿を約束した。

そして、彼女は決心したように言い出した。

「あの・・・私のこの力で皆さんのお手伝いができませんか？」

「・・・何？」

「奏さんが遺してくれたこの力でノイズに対抗できるなら、私もみんな

な為にこの力を役立てたいです！」

ソファから立ち上がり力強く言う響。だが、

「本気かい？」

「は、はい！」

立ち上がった彼女の肩を掴み瞳を見つめる。

「今までやってきた人助けとは違うんだよ？」

「わかっています」

「戦いつてのは命懸けだ。傷つけたくもないものを傷つけてしまった
り、守りたかったものを守れないかもしれない。辛くて痛くて苦しい
ものだ。君はそれでも戦うのか？」

「それでもです！ 何かできるかもしれないのに見て見ぬふりなんて
私にはできません。だから、私にできることを全力でやらせてくださ
い！」

力が目覚めただけで戦い方など知らない彼女だが、その芯に揺るぎ
はなかった。だか、戦士として覚悟ではない。困っている人に手を差
しのべることができる彼女の優しさは美点だ。そんな彼女を戦場に
出したいくはない。

「やれやれ」

弦十郎がやや呆れた様子で声をあげた。

「お前の懸念も最もだ。翼の様に幼少のころから訓練していた訳でも
なく、お前の様に積み重ねた経験がある訳でもない子供を戦場に出す
訳にはいかない」

「なら」

「ノイズと戦えるのはシンフォギアと仮面ライダーだけだが、何もお
前達だけで戦っているわけじゃないだろ？ 俺達、二課もいる。 1
人出来ることなどが知れてる。だから、協力してノイズに立ち向
かっていけるんだ」

「そうですね。・・・うん、そうでした」

「それに、いざとなったらお前が守ってやれ」

「はい！・・・よし！ 響ちゃん！」

「ひゃい!？」

「何かあれば俺が、俺達が君を守るよ！ だから改めて、君にお願いする。俺達に協力してほしい！」

「も、もちろんです！ そ、そうと決まれば私、翼さんにも伝えてきます！」

響はそそくさと逃げ出すように部屋から出ていった。少し顔が赤かったような気がしたが大丈夫だろうか？ 何故か部屋に残った面々からはため息をつかれた。

そして、ノイズ警報が鳴り響いた。

☆

ロードセクターを駆けノイズが発生した地点へ向かう。翼は既に先行しており、それを追いかける形で走る。陽介は仮面ライダーに変身しており、響もシンフォギアを纏いBLACKとなった陽介の後ろに乗り込んでいた。

「そっいや響ちゃん。翼ちゃんとは話せたのかい？」

「あゝそれがくそくそ」

ばつの悪い返事に結果の予想がつく。翼の方の心の整理がつかないのだろう。彼女は真面目なのであまり深く考えすぎなければいいが……。

「む……、見えたぞ」

前方に見えるはノイズの集団。

「突っ込むぞ！ しっかり掴まって！」

「は、はい！」

ロードセクターを加速。規定の速度に到達。

「アタックシールド！」

ロードセクターが高速衝突形態に変形する。響はその変形機構に感嘆の声をあげているが、それに反応している場合ではない。

ノイズ共には既に色がついている。

遠くから聞こえる翼の歌にキングストーンが共鳴し、増幅したのだ。ノイズ共を薙ぎ倒す。ノイズ共の壁を抜け停車し降りる。

「よし、響ちゃんはここで待機ね」

「え!?! でも!?!」

「慌てない。まずは俺……というより向こうで戦っている翼ちゃんの戦いを見て勉強するんだ。無理はダメだよ」

返事を待たずに向かってくるノイズに突撃する。

響を中心に片側を自分が、もう片側で翼が戦闘している。残っているノイズを駆逐していく。殴り、蹴る度にぶによつと妙な柔らかい感触が一瞬するが気にせずノイズを屠る。

時間にして1分も経たず自身の周囲に炭の塊が散らばった。

響達の方を見ればあちらも片付いたようで響が翼に語りかけているのが見えた。彼女達に近付こうと歩を進めた時。

翼が響を蹴り飛ばした。

こちらに飛ばされてくる響を受け止める。

「響ちゃん!?!」

「ゲホッ!ゲホッ!」

「翼ちゃん!?! 何を!?! —— ツ!?!」

地上には誰もいない。空から大剣が落ちてきた。

第五話 乱剣？

「おんや、そこにいるのは翼さんじゃないですか」

「・・・蛇川さん」

「確か今日は、例の子に事情を説明する予定ではなかったですか？」

二課本部の廊下で翼は黒服の細目の男。蛇川悟へびかわさとしるに出くわす。

この男は二課所属のエージェントで翼を公私に共にサポートする緒川慎次の同僚である。

翼の彼に対する情報はそんなところである。

「ふむふむ」

何やら値踏みされているような視線に翼は思わず嫌悪感を抱く。同じ組織に属する者だがこの男からは妙な警戒心を抱かせていた。

「いや、随分と錆びれていますね」

「・・・何ですって？」

「おっと、これは失礼。仕事柄つい本音が」

「私が、防人の剣が錆びてると、あなたは仰るか」

「まあまあ、そうカツカぜずに。まあそんな調子では」

「ッ！」

「錆びてると思われても仕方がないですよ？」

目の前にいたはずの男にいつの間にか背後をとられる。聞き捨てならない言動に怒りが籠ったのは事実だが、それでも、目を離す隙はなかったはずだ。なのに、背後をとられた。たまらず距離をとる。蛇川はニタニタと笑っていた。

「いや、それにしても浮かない顔ですね。彼女が我々に協力してくれれば、ノイズに対する戦力が増えるのに何かご不満でも？」

「彼女は巻き込まれただけです。戦士でもない彼女が戦場に出る必要など」

「お優しいことです。ですが、それが本音ではないでしょうか？」

「何をツ!？」

「素直になつたらいかげんです? ……そんな調子では、また、失くしてしまいかもしれませんよ?」

「ツ! あなたは!」

いやに気分を逆撫でしてくる男に反論しようとしたが男の姿はすでになかった。優秀なエージェントだということは話には聞いていたが、あの性格はたちがわるいと翼は感じた。

☆

夜の道路に灰が舞う。ノイズを殲滅し終え、本部に帰還しようとするれば、先程本部で戦うと宣った少女、立花響がこちらに笑顔で手を伸ばしてくる。

そして、その後ろから彼が、仮面ライダーBLACKこと黒山陽介がゆっくり歩いてくる。

『また、失くしてしまうかもしれませんよ?』

なにを失くすというのか。既にこの身は防人として捧げている。これ以上なにを・・・

「翼さん! 私、頑張ります! 奏さんの代わりになれるように! だから」

・・・代わりに？ 誰が？ なんの？

この子が奏の代わり？

「・・・るな」

「え？」

私の中で黒いナニかが膨れ上がった

☆

眼前に迫る巨大な剣を目にし、陽介はすぐさま行動に移した。

抱き止めた響を自身の背後に回し迫る剣の下に潜り込む。右腕に力を込めを無理矢理打ち上げる。軌道が上方にずれた剣は陽介達の背後の道路を破壊。轟音と共にコンクリートと砂塵をばらまきその衝撃は2人をふきとばした。

「ぐっ!？」

「キヤアアア!？」

直感に任せた行動だったが、幸い響や自身に怪我はない。響は何が起きたか理解出来ず呆然としていた。

砂塵が晴れると翼が立っていた。

「何だ？ あの黒いもやみたいなのは？」

黒いもやを纏いながら、ゆらゆらとふらつきながらこちらに、正確

には響に向かって歩を進める翼。手にしたアームドギアが変形。先程の剣ほどではないにしても、華奢な彼女か持つには充分大きい剣だった。それを振ると、斬撃が地を走った。

「響ちゃんー!」

響を突き飛ばし斬撃から逃す。陽介と響の間を斬撃が通りすぎた。視線を翼に向ければ、彼女はまた飛び上がり空中で複数の剣を精製していた。そして、陽介は彼女の瞳を見た。光のない無機質な瞳だった。

声をかける暇もなく翼は精製した剣達を射出する。広範囲を攻撃する技だ。回避は不可。

「ならばー!」

未だ立ち上がれない響の前に立ち、両手にキングストーンエネルギーを集中させる。

「うおおおお!!」

降り注ぐ剣を片っ端から弾き飛ばす。手刀で剣を弾いているが、対処切れない剣はBLACKの体を切り裂いていく。

「ヨウさん!! 翼さん! 止めてください!」

響の声が届いている様子はなく翼は次の行動に移った。両手を地面に置き両足を開き、両足の刃が展開する。カポエイラのように回転しですが、シンフォギアにより向上された運動能力による高速回転は電動ノコギリを彷彿させるような光景だった。

「ヨウさん! 危ない!」

あんなのに当たったら只ではすまない。響はそう感じとりBLACKに呼び掛ける。

BLACKは突撃した。

響は思わず息を呑む。最悪の未来が響の脳内を埋め尽くすが

「ツアッ!」

BLACKはガシツと翼の足を掴み、回転を止めた。

「よし。キングストーンフラツ」

一瞬の膠着から翼は、掴まれた足を支点にし掴まれてない足でBLACKの頭部を側面から蹴り抜く。

拘束が緩み、BLACKの肩を踏み台に飛び上がる。再びアームドギアを手にし、再度空中から響を狙う。今度は日本刀ほどの大きさのアームドギアを構え両足からブースターを展開。蒼い流星が響を貫いた

「あ、ああ」

かに見えた。

剣は響の目前で止まっていた。剣先から赤い雫が溢れる。

「ヨウ、さん」

「翼、ちゃん。君の、剣は、誰かを傷つける為のものじゃないだろ!!」

腹部を貫かれながらも翼の手を掴む。もう、離さない。

「キングストーンフラッシュユ!!」

BLACKのベルトから放たれる閃光が翼を包み込んだ。

☆

ここはどこ？

暗い暗い闇の中。右も左も上も下もわからない。

だけど、私は今この空間にいるのが心地よく感じる。

何処か深いところに堕ちていくような感覚だ。もしかしたらもう戻れないかもしれない。

ああ・・・でも・・・

「このまま、何も考えずに、堕ちるのも、いいかもしれない。」
「……!!」

何だ？

声が聞こえる。光が差し込んでくる……。
行かないや。あの光の方へ……。

☆

「……ん」

「翼ちゃん？」

「くろ、やま、さん？」

「ああ、よかった。目が覚めたんだね」

「え？ ……私は、なに……を……」

何故こんな近くにこの人の顔があるのだろうか？ と翼は思う。
思考しようとしたら手に感触が走る。少し温かい濡れた感触。そ
う、これはまるで

「え？」

そこで翼は視界に入る光景に混乱する。

何故、私がこの人を天羽々斬で貫いている。慌てギアを解除。

「あ、ああ、……ち、ちが」

「一か八か、だった、けど、成功した、みたい、だな」

何故この人はそんな安心した顔をしているのだ。早く傷を塞がなければ、血が、血が溢れて・・・
ふらり、と、陽介は倒れた。

第六話 怪人

自分が倒れた後、すぐ現場に二課指令、風鳴弦十郎が到着し二課の医療施設に搬送された。医療スタッフが直ぐに処置を施そうとしたそうだが、既に傷は塞がっていたそうだ。

まあ、俺、改造人間だし。と、陽介は思う。

この体は大抵の怪我や傷を一週間ほどで完治する。だからこそ、ゴルゴムとの戦いを乗り切れたのだ。

目が覚めたのは1日たった後だった。そして、その日の夕方に風鳴弦十郎と立花響がやってきた。

「ヨウさんッ！」

「やあ」

「だ、大丈夫ですか!？」

「ああ、この通り」

勢いよく病室にのりこんできた彼女に腕をぐるぐる回し、元気な姿を見せる。

「ほんとですか？ あんなに血が出たのに・・・」

「大丈夫だよ、あれくらい。・・・それより響ちゃんは？ 怪我とかは

してない?」

「わ、私は大丈夫です。全然。私より自分のことを心配してくださいよ。ヨウさんが倒れて、血が止まらなくて、わたし、わたし」

「ああ、ごめん！ 心配かけたね！ 泣かないで！」

へなへなとその場に座り込み、涙ぐんでしまった響を慌てて慰める。

「ふむ。存外元気そうだな」

「あ、ゲンさん。どもども」

「それで、さっそく何だか、昨夜のことで話があるんだが」

「俺もですよ。・・・翼ちゃんは？」

「怪我はない。他の異常もな」

弦十郎の話では、その後、翼にメデイカルチェックと事情聴取をしたそうだが、翼当人はあの時のことをほとんど覚えていないそうだ。

「・・・じゃあ、あのもやみたいなのはいつたい・・・？」

「霧？」

「あの時、翼ちゃんに黒いもやみたいなのがまとわりついてたんですけど・・・」

「ふむ・・・、こちらが見ていた映像にはそんなものは映っていなかったが・・・」

「・・・響ちゃんは？」

「いえ。私も、そのもやみたいなのは見えなかつたんですけど・・・」
「じゃあ、あれは何だ？。と、陽介は思う。あの状態の翼はまるで機械のような無機質な感じだったが、同時に悪意も感じた。だがそれは、翼本人ではなく、別の意思のように感じた。

「それにしても、もう少し上手くやれなかつたのか？」

何を、と聞かれれば、あの時の翼に対する対応だろう。確かに、もう少し上手くやれたのかもしれない。

「だか、あの時、戦友を宿敵に強引に支配下におかれた時のことを思い出した。」

「・・・翼ちゃんに怪我させたくなかつたんで」

「・・・それでお前が負傷したら意味ないだろ」

「あはは・・・」

「やれやれと弦十郎にため息を吐かれ愛想笑い。響も複雑な表情をしていた。」

「前から聞こうと思ってたんですけど・・・」

「ん？」

「ヨウさん、翼さんとどういう関係何ですか？」

「なにやら頬を少し膨らませながら響が陽介に詰め寄る。」

「どういふものにも、仲間だよ」

「・・・」

黙りこみながらもなにか納得のいかない表情の響。言った通りの意味なんだがなあ。と、陽介は思う。

ノイズ警報が鳴った。

「ツ！ ノイズ！」

「待て！」

病室より飛び出そうしたところを弦十郎に止められる。

「ちよ!? ゲンさん!? 何を!？」

「何を、はこちらのセリフだ。病み上がりでいきなり無茶をするな」

「いや、俺は大丈夫なんで」

「指令として、出撃は許可できん！」

「だから、大丈夫ですって！」

「いいから！ 怪我人はしばらく寝ているお!!」

「ゴフツ!？」

「ヨウさー！ーん!!？」

弦十郎の拳が陽介の腹部を直撃。病室の中を舞いベツトに吸い込まれるように陽介は倒れ、意識を失った。

☆

「………ハッ!？」

「キャ!？」

意識が覚醒し飛び起きる。どのくらい気を失っていたのだろうか。病室は薄暗く、カーテンの隙間から見える外は暗くなっていた。腹に感じる鈍痛に眉を潜める。改造人間である自分を一撃で気絶させる風鳴弦十郎に驚嘆すべきか畏怖すべきか、そんなことを考えつつ先ほど聞こえた声の方向を見る。

蒼い髪の少女、風鳴翼がそこにいた。

安堵した表情を浮かべるが次の瞬間には悲しそうな顔になり陽介に背を向けそのまま病室を立ち去ろうとする。

「待った!」

「は、離してください!」

そんな彼女の手を掴む。言葉では拒絶しているが陽介の手を無理矢理振りほどこうとはしなかった。

「そんな逃げなくても……」

「……会わせる顔がありません」

「何で?」

「……防人として力なき人々を守る為の剣が、志を同じくする戦友を……傷つけました」

「俺は気にしてないよ」

「私は! 己の不甲斐なさに腹がたって仕方がないのです! 一度ならず二度も貴方を……」

「あの時は、状況が状況だったし」

「それでもです! ……この度はまことに申し訳ありませんでした!!

失礼します!」

「あ、ちよ」

彼女はそれだけ言うと逃げるように病室から退室していった。

誰もいなくなった病室で深くため息を吐く。今回の風鳴翼の暴走は何か作画的なものを感じた。彼女自身に問題があったとは思われない。むしろ、被害者ではないかと考える。

「(だか、．．．しかし．．．)」

彼女から感じた悪意はいったい何だったのだろうか？ 今の彼女からは悪意は感じられなかった。あの時はまるで、別の誰かの悪意を植え付けられたようなものだった。しかし、これ以上考えても答えはでなかった。

それから、程なくして陽介は退院。いつもの日常に戻りつつ、立花響を加えたシンフォギア奏者2名と仮面ライダーBLACKは三人一組のチームとして対ノイズ戦に繰り出すことになった。

しかし、まともな連携をとれず行き当たりばったりでノイズを駆逐していく日々が1ヶ月を越えようとしていた。

☆

喫茶店ストーン。小ぢんまりした何処にでもある普通の喫茶店。

そこに、労働に勤しむ黒山陽介と、学院の課題のレポートに悪戦苦闘している立花響、その立花響の様子を眺めながらミルクココアを飲んでいる少女。立花響の親友である小日向未来がいた。

小日向未来は店内を見渡す。机を隔て目の前にいる親友は、あーうー、と唸りながらレポートと格闘中。視線を後ろに向ければ、この喫茶店の店長である菩薩のような優しい顔をした老人、石田さんがカウンター席の向こうの椅子に座り新聞を読んでいる。更に視線をずらせば床を清掃している黒山陽介。

店内にいる3人は響の唸り声をBGMにし夕方の穏やかな時間を過ごしていた。

「陽介さくん、すみませくん」

ぷはあ、と軽く息をはき未来は陽介を呼ぶ。追加注文かな？と陽介は未来の元へ行く。

「はくい。おかわりかい？」

「えつとですね……陽介さん、何か隠し事してます？」

陽介はその場で固まり、響は飲みかけた自分のミルクココアでむせた。

「……どうしたんだい急に？」

「いえ、別に」

空のマグカップの縁をなぞっている未来から視線を外し響をちらりと見る。首を高速で横に振る響。

シンフォギア関連のことを口外しないことを約束している彼女だが、元々隠し事等が上手くできる性格ではない。うっかり口を滑らせてしまったかと思うが、響の様子を見るにそうではないらしい。そう思う自分も冷や汗が止まらなかった。

「なんか最近、陽介さんがストーンにいないことが多いなあって思ったので」

「そうかい？ 偶々じゃない？」

「大抵はここか、街の何処かで人助けしている場面に遭遇しますけど、最近はその姿を見ないことが多いですよね……」

小日向未来は薄々感づいているのだろう。何を隠しているかはわ

からないが、何かを隠していることはわかっているのだ。

沈黙が店内を包む。その静寂を破るようにキュルルくと、立花響のお腹が鳴った。

「あはは。あー！ ヨウさん！ おにぎりお願いしますー！ 大で！」

「もく響。これから晩ご飯何だよ？」

「へいきへいき！ おにぎりは別腹だから！」

「普通はデザートに使う言葉でしょ、もう」

「うえへへ」

「はあ・・・じゃあ陽介さん、私もおにぎり、小で」

「あくはい。承りました」

注文を受け席から離れる。今回は響のお腹のおかげでなんとかやむやにできたが、そう何度も上手くはいかないだろう。

未来を危険に巻き込むわけにはいかない。彼女は響にとってとても大切な親友であり、自分の友人だ。彼女達のやり取りは掛け替えのない大切な日常であるからだ。楽しそうに談笑している二人を見ながら陽介はこの平和を守っていききたいと、そう思った。

☆

明くる日の夕方、バイトも終わり、とある場所に向けてバイクを走らせる。歩道を見れば帰宅途中の学生や親子などが見える。おそらく自分と同じ場所に向かっているのだろう。

今晩は流星群が見れるらしく、喫茶店に来た客は待ち合わせに利用したりしていた。響や未来もこの日を楽しみにしていた。響も課題がギリギリ間に合うと言っていたので、今頃は流星群が見える場所に移動しているだろう。

自分も二人と一緒に見ようと誘われたので有りがたく付き添うことにした。このイベントが良い思い出になれば良いと思う。

ズボンのポケットに入れている通信機が震えた。バイクを停車させ通信機を取り出す。

『はい』

『俺だ。・・・ノイズが出現した』

『・・・わかりました。場所は？』

『○×エリアだ。行けるか？』

『ええ。直ぐに向かいます』

弦十郎からの通信を切る。なんというタイミングだろう。だが、愚痴をこぼす暇はない。被害が出る前に向かわなければ。そう思ったところで今度はプライベート用の携帯に着信がきた。

相手は小日向未来だった。

『もしもし』

『あ、・・・陽介さん？ えっと・・・今日の流星群何ですけど・・・響が、これなくなっちゃって・・・』

『・・・そっか。・・・ごめん未来ちゃん。実は俺も急用が入っちゃってね。今日の流星群一緒にみれないんだ』

『ツ・・・そう、ですか・・・。また、人助けですか？』

『まあ、そんなところ』

『まったく、しょうがないですね』

『・・・本当にごめん』

『謝らないで下さいよ。人助けなら仕方ないんですから』

『この埋め合わせは必ずするよ』

『いいですよ、そんな気にしなくて。…それじゃあ、失礼しますね』
『ああ、うん。またね』

『はい』

本当に、なんとというタイミングだろう。

電話ごしでも伝わってきた彼女の悲しい気持ちが。おそらく、今現場に向かっている響も同じような気持ちだろう。

なればこそ、急いでノイズを殲滅すればまだ流星群に間に合うなもしれない。そうと決まれば、善は急げ。直ぐに現場に向かった。

☆

今日は厄日なのだろうかと黒山陽介は思った。

もうすぐノイズが発生した現場に到着するところまで道を塞がれた。

信じがたい光景で思わず幻覚かと疑ったがそうではないらしい。前方約50メートルほどの距離に立っている1つの人影。いや、人ではない。

二本足で立っているが姿勢は前傾、腕が6本あり、腰の辺りから大きな突起物が生えていた。上半身は女性的なフォルムをしているが、

その顔は人と判断するにはあまりにもおぞましい顔だった。血走った目。耳まで開く口は嫌悪感や恐怖感を煽るのに十分だった。

黒山陽介はこの人ならざるものを知っている。

「クモ怪人」

かつて、自身が壊滅させた暗黒結社の怪人がそこにいた。

第七話 夜に舞う

『弦さん。今、俺がいる〇〇エリアに変わった反応ってありますか?』

『何? どうした? 何があった?』

『怪人がいます』

『怪人・・・だとツ!?!』

一課に連絡をとり、二課の方でも状況を確認してもらおう。

『むう、こちらも確認した。しかし何故そこに?』

『たぶん、狙いは』

「ケケケケツ!」

奇声をあげたクモ怪人は建物の屋根へ跳躍し、そのまま姿を隠した。

「待て!」

『おい!陽介!』

『弦さん! ノイズの方は響ちゃん達に任せます! 俺は奴を追います!』

『だから待て! あからさますぎる! 罠の可能性が高い!』

『だとしても! このまま奴が何もしない保証もないですよ!』

通信を切りクモ怪人が姿を隠した方へバイクを走らせた。

☆

「ここか・・・」

クモ怪人を追い、たどり着いたのは町外れの廃工場だった。付かず離れず適度な距離を保たれ、クモ怪人を見失うことはなかった。弦十郎の言うとおり罠の可能性が高い。

「それにしても廃工場か・・・」

廃工場には嫌な思い出がある。ここではない違う廃工場で、真実を話してくれた父はクモ怪人の手によって殺された。だが今は感傷に浸っている暇はない。廃工場へ足を進めた。

扉には鍵がかかっているが簡単に入ることができた。慎重に入に入る。人の気配はなかった。当たり前だが電灯はつかない。窓から差し込む月の光が廊下を照らしてくれた。

埃が舞う廊下を進んでいく。静かだ。だが、気配は感じる。ここはもう敵地なのだ。警戒を強め進んで行く。

しばらく進むと少し広い部屋にでた。何かの生産ラインなのか、大きなベルトコンベアや何だかよくわからないマシンがあった。更に歩を進める。

左足に何かが巻き付いた。

「うおッ!」

巻き付いたモノは糸だった。強烈な力で左足を引っ張られ体を引きずられる。糸の先を見るが、先は真っ暗で何も見えない。

「なめるなッ!」

引きずるといふなら好都合。その引っ張る力を利用して、暗闇の中に飛び込む。そこで蠢く影に拳を振るう。

「グガア!」

影、クモ怪人は予想外だったのか、叫び声をあげ壁に打ち付けられた。足に巻き付いた糸を引きちぎる。

「クモ怪人! お前の目的は何だ? 答えろ!」

「グゲゲッ!」

こちらの問答に答えずクモ怪人は飛びかかってきた。その場を飛び退き、クモ怪人との距離を空ける。

「答える気はないか。・・・変・・・身!」

暗闇の中で黒山陽介の体に変化する。

「仮面ライダー・・・ブラックツ!!」

廃工場を舞台に2つの影がぶつかり合った。

☆

立花響は今の状況を把握するのに精一杯だった。

発生したノイズは全滅させることができたが、そこからだった。白、あるいは白銀の鎧を全身に纏った人物が現れた。

風鳴翼の発言でその鎧、ネフシユタンの鎧という完全聖遺物を纏った人物、背は小さいが声や胸部の膨らみがその人物を女性だということを知らしめた。

ネフシユタンの鎧は響にとっても、翼にとっても因縁のある完全聖遺物だ。少女と風鳴翼が戦闘を行おうとし、響は慌てて止めようとしたができず、翼と少女の戦いが始まってしまった。

翼は斬撃を放つ。少女は結晶のような鞭でそれを風ぎ払う。翼は次々と剣を振るうが少女はその攻撃を難なく回避する。鞭で剣を受け止め、翼の動きを一瞬止めさせ蹴り飛ばした。

(これが完全聖遺物のポテンシャル!?)
「ネフシユタンの力だなんて思わないでくれよな。あたし天辺はまだまだこんなもんじゃね〜ぞッ!」

鞭を振るい攻勢にでる少女。伸縮自在に変化するその鞭を翼は回避する。木をへし折り、地面を陥没させるその威力に当たってやるわ

けにはいかない。

「翼さん!？」

「お呼びではないんだよ。こいつらの相手でもしてな」

少女は杖をようなものを手にすると何かを発射した。着弾した地点から何かが現れる。それはノイズだった。

「ノイズが操られてる!？」

初めて目にするタイプのノイズ、頭身が高いダチョウのようなノイズに思わず響は背を向けてしまった。

「まだまだ、特別ゲストも追加だ!」

響の正面の地面が不自然に盛り上り、地面から何かが飛び出してくる。飛び出してきたのは2つの影。

「な、何!?! ガッ!?!」

突然現れた影に驚いた瞬間その影に突き飛ばされる。倒れた響に向かってノイズと影は糸のようなモノを吐き響を拘束した。

「なんなの!?! こいつら!?!」

響は視認したその影に恐怖した。人ではない何か、まるで蜘蛛が人間になったような異形が2体いた。

「その子に掛けて私を忘れたかッ!」

「慌てんなよッ! お前にも用意してるぜッ!」

上段から振り下ろした一撃を鞭で受け止められ、両腕に白い糸が絡み付く。それぞれ別方向から2体のクモ怪人が糸を吐き出していた。

「何!?!」

「オラッ!」

「くあっ!?!」

動きが止まった瞬間にクモ怪人達が糸を引く。腕を上へ上げられ、がら空きになった腹部に大振りで振るわれた鞭が直撃した。腕を糸で拘束されながら地面に叩きつられる。

「のぼせ上がるな人気者! 誰も彼もが構ってくれななどと思っただじゃねえッ!」

倒れた翼の顔面を踏みつけながら少女はさらに言葉を続ける。

「この場の主役と勘違いしてんなら教えてやる。狙いははなっからこ

いつをかつ拐うことだッ！」

「ッ!？」

「鎧も仲間も、あんたにや過ぎてんじやないのか？」

「・・・繰り返すものかと、私は誓ったッ！」

顔を踏みつけられ、腕を糸で拘束されながらも剣を空に掲げる。空から無数の剣が降り注ぐ。少女はその場から離れ剣の雨から逃れた。自分諸ともに巻き込むことで翼は己を拘束していた糸を断つ。再び、翼と少女が肉薄する。

「そうだ！ アームドギア！」

アームドギア。それはシンフォギアの主武装。響はそれを発現させようともがいた。

「奏さんの代わりになるには私にもアームドギアが必要なんだ！ それさえ有れば！」

もがき、念じる。天羽奏が扱っていた槍状のアームドギアを思い描き、それを発現させようする。

「出るッ！ 出てこいッ！ アームドギアッ!!」

だが、幾らもがいても響の手にアームドギアが現れることはなかった。

「なんでだよ・・・どうすればいいかわかんないよ・・・」

「ケケッ」

そんな響の様子をクモ怪人は愉快そうに笑った。獲物が巢にかかり、必死に逃れようとしている。無駄なのになあ。そう思わせるような歪んだ笑みを浮かべて響の回りを徘徊していた。

「助けて、ヨウさん・・・」

一方、翼と少女の戦闘はさらに激しさを増していた。

「鎧に振り回されているわけではない？ この強さは本物!？」

「ここでふんわり考え事とは度し難てえッ！」

剣を払われ顔面に蹴りが迫る。顔を反らし、続けて連続でバク転し間合いをとる。少女が再び杖を構え光弾を発射。ノイズの集団が召喚され、翼に襲いかかる。小規模とはいえ召喚されたノイズを瞬く間に殲滅する。

「ガアアアアッ！」

クモ怪人が雄叫び上げながら翼に飛び掛かる。先端が鋭い棘のよ
うな爪を振るう。6本ある腕を次々と突きだす。身を捻り回避。逆
袈裟斬りでクモ怪人の腰から左肩に線が走る。

「ギャ!? グガア！」

一瞬怯むが、すぐに反撃の爪を振るう。跳躍して回避。斬撃を飛ば
す。クモ怪人は本能的危機感でそれを回避。飛んだ斬撃の勢いは衰
えず、少女に向かって一直線に飛んだ。

爆発。しかし、爆炎から出てきた少女は無傷で不適な笑みを浮かべ
る。翼が少女に突貫する。その間に立ち塞がるようにクモ怪人が立
つ。爪を振るうクモ怪人の股を滑り込んで潜り抜け少女に剣を振る
う。剣と鞭がぶつかり合う。

翼が小刀状のアームドギアを取り出しそれを投擲。数は3つ。

「ちよせいー！」

少女はそれを虫を払うかのように纏めて尻ぎ払う。そして、少女は
勢いをつけ跳躍。鞭の先端にエネルギーを集中させた。

エネルギーは球体の形を作り、それを勢いよく投げつけるように鞭
を振るった。そのエネルギーの強さに翼は剣を盾の用に構えようと
するが

「ッ!? しま」

両腕を糸に絡まれ、大の字を体現するかの用に両腕を引っ張られ
る。糸の先にいるクモ怪人達の卑しい笑みが見えた。無防備となっ
た自分に放たれたエネルギー弾が迫る。

爆発。収束された球状のエネルギーが炸裂した。

「翼さん!!」

爆煙から放り出される翼はそのまま地面を数度跳ね動かなくなっ
た。

「ハッ。まるで出来損ない」

「そんな・・・そんな・・・」

「助けを待っても無駄だぜ。お仲間の化物は、今頃は化物同士で仲良
くしてるだろうからお」

「化物って・・・、まさか、ヨ、仮面ライダーのこと？」

「それ以外に何があるって言うんだ？」

「仮面ライダーは、化物何かじゃない！」

「化物だよ！ 世間様がヒーロー扱いしてるようだが、仮面ライダーも、こいつらと同じ化物なんだよ！」

「ちがう・・・。絶対にちがうッ！」

少女の言葉の響は真っ向から否定する。仮面ライダーBLACKはヒーローだ。そして、それに变身する黒山陽介もヒーローだ。少なくとも響にとってはそれが揺るぎない真実だ。

彼の体は、人ではなくなってしまうたが、その心は紛れもなく人であると響は信じている。

「ああそうだ。よく言った立花」

「翼さん！」

「なんだ。まだやれんのか？」

「未だこの身は出来損ないの剣。だが、奪われたネフシユタンを取り戻すことで、この身の汚名を灌がせて貰う！」

剣を杖変りにしながらフラフラと立ち上がる。既に体はボロボロ。身に纏うギアもいくつか損傷が見える。

だが、その瞳はまだで闘志で燃えていた。

「そうかい。脱がせるものなら脱がして——何!？」

体が動かない。その場から身動きがとれないことに少女は気づいた。何とか身を振ると自分の影に小刀が突き刺さっていた。自分が凧ぎ払った小刀だった。

影縫い。そう呼ばれるこの技は、対象の影を武器で突き刺すことで、対象の身動きを封じるというものである。

「チツ、こんなもんであたしの動きを、・・・まさか、お前」

「月が覗いている内に決着をつけましょう」

「歌うのか、絶唱を」

少女が翼の顔を見る。覚悟を決めた人がそこにいた。

翼が夜空の月を見て思う。

(そういえば、黒山さんと初めて顔を会わせた日もこんな月が出てい

たな)

☆

私、風鳴翼が仮面ライダーBLACKと初めて遭遇したのは戦場だった。

まだ、両翼で羽ばたいてた頃、ある日、市街地でノイズと戦闘していた際、シンフォギア以外でノイズと戦闘している謎の反応があった。現場に到着すれば、黒い人の様な何かがノイズを打ち倒していた。

ベルトの様な部分にある赤い宝石を光らせ、その光をノイズに浴びせ、徒手空拳で炭に還していた。その身一つでノイズに立ち向かう姿は、異様で恐ろしく思えた。

何故か、目をキラキラさせていた奏は、謎の存在、怪人と呼ぶべき者に接触しようとしていたが司令がそれを堅く禁じてきた。

あとから聞いた話では、当事はゴルゴムからの圧力で仮面ライダーは“いないもの”として警察などの国家機関からは無視されていたそうだ。

しかし、世間の目はしつかりと彼を見ていた。最初は都市伝説などの噂レベルの情報で、新種のノイズか？ 現代に復活した妖怪か？ 等、よくわからない情報が世間で流れていた。しかし、そういった噂は時が経つにつれて、人を助ける黒い怪人。化物を倒す黒い怪人。等といった噂に変わっていった。

私も、何度か戦場でノイズを倒す怪人。人命救助を行う怪人を見て

きた。だが、その虫人間のごとき風貌は助けた人に怯えられたり、時には石を投げられたり、化物と非難されたりした。

それでも、怪人は命を見捨てることはしなかった。自分がどれだけ傷ついても、人を、命を救う為に全力を尽くしている。戦場ですれ違っただけでまともな会話する機会はなかったが、その姿だけは、目に焼き付いた。

そうした行動を続けていたお陰か、怪人はいつしか人々から“仮面ライダー”と呼ばれるようになった。

多くの人の目に触れる訳ではなかったが、仮面ライダーの活躍は確かに世の中に伝わった。少しずつ少しずつ築き上げた仮面ライダーの活躍は、世界の闇に潜んでいた“暗黒結社ゴルゴム”の存在を明らかにさせた。

人々の希望、ヒーローと呼ばれるようになっていった仮面ライダーはまるで防人のようだと思った。

だが、希望とは失くしてしまって、絶望の重さが増すものだとこの時の私は知るよしもなかった。

第八話 剣と仮面

ツヴァイウイングのライブの惨劇。

仮面ライダーの敗北と死。

この2つの大事件が、まさか同じ日に起こるとは誰が予想しただろうか。

私が、天羽奏という片翼を失ったあの日。世界からは1人のヒーローが失われた。私が奏を失った悲しみから立ち直る暇もなく、その日から、世界は激動の日々を送った。

仮面ライダーの敗北と死を宣言したゴルゴムの首魁、シャドームーンは、世界征服を宣言し、日本を始め世界中でゴルゴムの怪人が暴れまわり、ゴルゴムを信奉する人々によってライフラインの制圧、独占がされ、世界は混乱を極めた。

ノイズよりも直接的な危機に防人として奮い起つ時だというのに私は、戦えなかった。歌えなかった。片翼をもがれ、地に堕ちた私は、1人では戦いの空へ飛ぶことができなかった。

日本がゴルゴムに征服され一週間が経過した頃、ある噂が世に流れた。

仮面ライダーが復活した。

真実かどうかも分からぬ噂だった。だが、日が経つにつれてその噂の信憑性が増した。仮面ライダーがゴルゴムの怪人と戦っている写真や動画が広まり、その姿を見た人々はゴルゴムに対して反撃を開始した。

やがて、ゴルゴムの怪人達が消失し、ゴルゴムを信奉していた人々を取り押さえられ、ゴルゴムが壊滅したことが世界に報じられた。後に「ゴルゴムショック」と言われる出来事だった。

私は、何もできなかった。

☆

ゴルゴムショックから半年が過ぎた。

世界は、緩やかに平穏を取り戻そうとしていた。そんな中、私個人に矢文が送られてきた。その内容に驚愕した。

風鳴八紘を預かった。

信じられない事だった。何の戯れかと思ったが、同封されていた写真に、頭部から血を流し拘束されているお父様の姿を見て、冷静ではいられなくなった。

奏に続いて、お父様まで失うのか。そう思ったらいてもたってもいられなくなった。矢文に記された場所に向かう。相手の陰謀など知ったことか。今度こそ守るために私は、走り出した。

時刻は夜の8時を過ぎた。満月が夜道を照らしてくれている。指定された高級ホテルに向かう。政界の人間がよく使う20階建ての超高級ホテルだ。おそらく相手はお父様の敵だろう。政敵という奴だ。

いざ、参る！

そう意気込んだ瞬間、ホテルの中腹部分が爆発した。

轟音が鳴り響き驚愕の光景に呆気にとられてしまう。数秒経って、気を落ち着かせホテルへ急ぐ。

ある程度ホテルに近付くと、そこで私は見た。

倒れているお父様に、手を伸ばす黒い影を。

瞬間、ギアを身に纏う。黒い影に剣を振るった。

☆

勘違いだった。

穴があつたら入りたいとはこういう気持ちなのかと、羞恥の感情が沸き上がる。

事は既に終わっていた。

私が、矢文を読んでいる間に、弦十郎叔父様、緒川さん、そして、仮面ライダーBLACKの3人で、事態を解決していた。

今は、二課に移動し、医療ベットで眠っているお父様を見ていた。司令と緒川さんは、今回の事件の後処理があると言って、この場にはいない。私の隣には1人の男性が立っている。

身長は170後半ぐらいで、髪型は黒い短髪、体格は普通よりやや痩せ型、というより少し筋肉質なように見える。そして、特長的なのはその瞳だった。宝石のような紅い瞳。見てれば吸い込まれそうなほど、綺麗、と感じてしまう瞳だ。

そして、彼と目が合った。

「ん？　どうかした？」

しまった。じろじろ見すぎたかもしれない。体をこちらに向ける彼。その右腕には包帯が巻かれていた。

「あ、その・・・この度は申し訳ございません。父の窮地を救っていただいた恩人に、そのような傷を・・・」

「ああ、これ？　大丈夫だよ。見た目ほど酷くないから」「ですが」

「俺よりも、ゲンさんのお兄さん、君のお父さんの方が怪我の状態は悪いんだから、そつちを心配してあげて」

彼は、気にするなと言う。お父様を救ってもらった恩人に怪我を負わせるなど、なんたる失態か。そんなとき、彼は思い出したかのように言い出した。

「それにしても、君のお父さんは凄いな」

「え？」

「いやね、今回の事件の黒幕がね。えくと、君に対して結構下品なことを言ってたんだけど、それを聞いた君のお父さんが、すごい怒ったんだ」

「・・・怒った？」

「うん。『貴様の様な下衆に、私の大切な娘を渡さんツ!!』って、拘束されてたのに、そのまま黒幕に回し蹴りを喰らわせたなあ」

「・・・」

「まあ、そのあと追い詰められた黒幕が逆ぎれして、部屋に仕掛けてた爆弾を爆発させて道連れにしようとしたんだけどね」

私が見た光景は、その時の爆発だったのか。医療ベットで眠るお父様を見つめる。

「お父様が、私のことで・・・」

「どうしたの？」

「いえ、その・・・父は厳格な人なので、私の為に怒るなんて、少し信じられなくて・・・」

「・・・風鳴の家の事情ってやつは、俺には詳しくは分からないけど、

少なくとも、君のお父さんは、君のことを大切してるのは間違いないんじゃないかな？」

「・・・そう、でしょうか・・・」

「そうだと思うよ。あんなに、怒った人は見たことがないからね。・・・目が覚めたら、話してみたら？」

「・・・そうですね。・・・そうしてみます」

確かに、私とお父様は「普通の親子」ではない。風鳴の家の人間として、為すべき使命がある。それを、不満に思うことはないが、私には「親子」というものに、あまり馴染みがない。

たげど、ほんの少しだけ勇気を出してみよう。

今なら、少しだけ、お父様と話ができそうな気がするから。

☆

事件から数日がたった。お父様が誘拐された事件についての全貌が明らかになった。黒幕はゴルゴム派の政治家で、ゴルゴムが壊滅したことで後ろ楯を失った奴は、お父様を人質に、シンフォギアを扱える私を手中に収め、風鳴宗家との繋がりをもつ腹積もりでいたらしい。

・・・もつとも、仮に、お父様を人質にし、私を捕らえた所で宗家がそう簡単に動くとは思えんが・・・。

ゴルゴム派の政治家の動きを探っていた調査部の連絡を受け、司令と緒川さんが対応していたそうだが、生き残ったゴルゴムの怪人を護衛として匿っていたらしく、仮面ライダーに秘密裏に接触、協力してもらったことになったそうだ。

そして、3人による少数精鋭で事件を解決した。と、いうわけらしい。怪人は倒され、自爆した政治家も奇跡的に命が助かり逮捕された。

そして、二課に新しい人が配属されることになった。

仮面ライダーBLACKこと黒山陽介さん。

少々込み入った事情はあるが、彼が新たな仲間となってくれたのは嬉しいことであり頼もしいことであった。

普段は、喫茶店の定員として働いている彼は有事の際、主に対ノイズ戦では、いの一番に戦場に駆けつけ、ノイズを殲滅していた。ノイズと戦うだけではなく、戦闘後の生存者の捜索なども積極的に行っていた。

私は、ふと聞いてみた。

「何故、そんなに戦えるのですか？」

彼が二課に来てから、彼に関するこれまでの行動の軌跡を報告書で読ませてもらった。

彼は人生を壊されていた。

19歳の誕生日に彼はゴルゴムに拉致され、その身を改造され人の体ではなくなり、改造人間となってしまう。だが、どうかゴルゴムから脱走することができたが、ゴルゴムには同じ日に拉致され同じ改造手術を施された親友が捕まったままだったそうだ。

彼は、親友を救い出す為にゴルゴムとの戦いに臨んだ。しかし、その戦いは厳しいもので市民の助けになるはずの警察はゴルゴムの圧力で捜査に出れず、彼は孤独に戦うことになった。

僅かな情報を頼りにゴルゴムと戦い、数々の怪人を打ち倒し、ようやく再開できた親友はゴルゴムの首魁、シャドームーンとなっていた。

彼はいったいどれほどの苦痛を味わってきたのだろう。彼がゴルゴムを壊滅させたということは、シャドームーンを、親友を倒したことになる。親友をその手に掛ける。その痛みを想像もしたくない。

彼がゴルゴムを壊滅させた後は、現れるノイズを遭遇できたら殲滅するという行動をとっていた。

そして、今は二課で共に平和の為に戦っている。

・・・彼の人生はゴルゴムによつて一変し、そこから戦いの連続である。

何故、そこまで戦えるのか？ 只の一般人だったはずの彼の戦う理由が知りたくなつた。

「自由と平和の為だね」

まるで、それが当たり前かのように彼は答えた。

「そりゃ、最初はいいつを取り返す為にゴルゴムを追つてたけど、ゴルゴムがやらかす事件も放つておけないしね。何より、ゴルゴムのせいで苦しみ、悲しむ人達がいる、そんなのは許せない」

・・・力強い瞳、その奥から感じられる怒り。

「まあ、ゴルゴムがなくなつても、悪事を働く奴はいるし、ノイズもある。人の自由と平和を守りたいから俺は戦えるんだ」

何より、俺が満喫したいからね、自由と平和を、と、付け加えてたははと彼は笑う。

少年のように笑う彼の笑顔に胸の奥が不思議と温かくなつた。

悪を許さぬ正義感。力なき人々の為に立ち上がる勇氣。この人はまるで、いや、正しくヒーローなのだ。

☆

「やらせるかよ！ 好きに、勝手に！」

ネフシユタンの鎧の少女がもがく。翼が放った技、影縫いでその場から動けなかった。

翼がこれから歌う「絶唱」は装者の切札とも最終手段ともいえるものだ。歌えば凄まじい高出力を得られるが、その代償は最悪装者の命を奪う危険なものである。

「クソッ！ オマエヲ何してんだ！ あいつを止めろオ！」
冗談ではない。自爆に付き合えるか！ 内心焦る少女はクモ怪人達に檄を飛ばす。

クモ怪人達は少女の命令を聞き翼に飛びかかる。四方から攻めいるクモ怪人に、翼は右手に持ったアームドギアを天に掲げる。空から無数の剣が降り注いだ。

豪雨の如く降り注ぐ剣はクモ怪人達を斬りつけていく。己が身を守る為に足を止める者がいれば、ダメージを気にせず突き進む者もいた。

やがて、剣の雨を抜け翼に接近できた一体のクモ怪人はその鋭利な爪を突き出す。翼の顔を捉えたはずの一撃は届くことはなかった。クモ怪人は困惑する。目の前で、あと数ミリというところで自身の爪が止まった。いや、爪だけではない。体の自由が利かなかった。周りを見れば他の同胞も動けずにその場でもがいていた。

「ガッ!? ギッ!?」
「安心しろ。きっちり冥府へ送ってやる。」

クモ怪人は理解した。今の攻撃は自分達を単に迎撃したのではない、自分達の動きを止める為の攻撃だった。

「立花ア！」
「ッ!？」

「防人の、戦士の生き様、覚悟を見せてあげる！ 貴女の胸に焼きつけなさいッ!!」

響は何も言えなかった。翼の表情が、発せられる強い言葉にただただ圧倒された。翼が再びアームドギアを掲げる。そして、

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a
l—」

透き通るような歌が響いた。

「Emustolronzen fine el baral zi
z—」

ネフシユタンの鎧の少女は必死にもがく。そのかいあつてか、ノイズを召喚する杖を取り出すことができた。すぐさまノイズを召喚。翼にけしかけようとするが、防人の少女は既に目の前にいた。

翼が優しく少女を抱き寄せる。穏やかな顔で歌い終える。翼の口端から血が流れると、衝撃が広がった。

凄まじい衝撃だった。翼を中心に広がる膨大なエネルギーは、地を抉り、ノイズやクモ怪人を消し飛ばした。ゼロ距離でその衝撃をまともにくらった鎧の少女は苦悶の声をあげながら吹き飛ばされた。た。

「うう・・・」

意識が覚醒する。翼の絶唱に巻き込まれ吹き飛ばされたが、自分に巻き付いていた糸はなくなり動けることが立花響にはわかった。

まだ、全身に痛みが走るが我慢出来ないほどではない。顔をあげ周囲を確認する。ノイズや怪人、鎧の少女の姿はなかった。立ち上がると少し離れた所に人影が見える。地面に突き刺さった剣のように立っている人。風鳴翼が見えた。

「翼さ—」

「ガアアアアア!!」

翼のもとへ駆け寄ろうとした瞬間、翼のいる地点の左側の地面からクモ怪人が飛び出した。

間に合わない。翼はクモ怪人が現れたことに気づかず、響の助けも間に合わない。憎悪にまみれた咆哮をあげながらクモ怪人は爪を振るう。

クモ怪人は同胞を盾にしながら急いで地面を掘り、間一髪、翼の絶唱から逃れた。

屈辱だ。

妙な姿になっているとはいえ相手は人間なのだ。自分は怪人だ。人間以上の膂力を持ち、遙かな時を過ごせる寿命があるのだ。この人間につけられた傷が痛む。

与えられた命令があつたが、そんなこと知ったことか。

コロス。コロス。

コロスウ！

憎悪に任せて爪を振るう。普通の人間なら簡単に貫ける。

だが、クモ怪人の爪が翼に触れることはなかった。

「グギャア!?!」

紅い閃光がクモ怪人を突き飛ばした。

クモ怪人を突き飛ばしたソレの纏っていた光が徐々に消えていく。響はソレが何なのかわかった。オンロード型のバイク、自分も乗せてもらったことがあるそのバイクの名はロードセクター。そして、そのバイクに乗るのは

「ヨウさん!」

仮面ライダーBLACKだ。

「翼ちゃん! しつかり! なんて無茶を・・・」

「私とて、人類守護の勤めを果たす防人、こんなところで、折れる剣じゃありません。・・・それに、あなたなら必ず来ると、信じていましたから」

ロードセクターから降り、倒れそうになった翼を抱き留める。目や口から血を流す彼女の体は限界だった。防人であることに誇りをもつ彼女はそれだけ言う瞳を閉じた。

「翼ちゃん・・・ぐっ!?!」

突然呼吸が苦しくなる。何かが自分の首を絞めている、糸だ。視線

を首に向けると糸があつた。その糸の先にはクモ怪人がいた。

「ヨウさん!？」

「響ちゃん、翼ちゃんを・・・」

「は、はい!」

「早く、二課に」

「で、でも」

「早く!」

「ッ!」

気を失っている翼を響に受け渡す。翼の容態が心配だ。早く治療しなければならぬ。響が首を絞められてる陽介を案じるが優先度が違う。少し怒鳴ってしまったが、それでようやく響はこの場から離れていった。

クモ怪人は怒り心頭だ。せつかく仕留められた弱った獲物を仕留め損なつたのだ。だか、この場に現れた仮面ライダーBLACKは自分を無視して背を向けた。

チャンスだ。そう思い、背後から糸を吐く。弱った人間に気をとられていたBLACKの首に糸を巻きつけ締め上げる。そこから引きずり爪を奴の首に突き刺してやる。

だか、奴は動かなくなつた。この重さは何だ? 改造人間とはいえ100kgもないはずだ。山のようにBLACKはその場を動かない。

糸を掴み、こちらに振り向くBLACK。そこでクモ怪人は過ちに気付いた。

「ゆるさん!」

自分は奇襲ではなく逃走を選ぶべきだつた。飛蝗としての要素があるBLACKのその赤い目に射ぬかれた瞬間、自身の体が固まつた。

何故か? 答えは単純だ。仮面ライダーBLACKから伝わる巨大な怒り。その圧に呑み込まれたのだ。

心臓を鷲掴みされたかのような錯覚を覚える。感じるのは恐怖だけだつた。

にげる、ニゲロ、逃げる!

本能が警告する。だが体が動かない。まずは糸を切らなければ、そう思った瞬間、首がもがれたような衝撃が走る。

悲鳴をあげる暇も、鋭い痛みに悶える暇もなく、自身の体が引っ張られた。次に伝わったのは腹部から全身を駆け巡る激痛だった。

「グボガア!?!」

痛み、浮遊感、痛み、痛み、手足が勝手にばたつく。自身が今、どういう状態なのかクモ怪人はわからなかった。

何てことはない。BLACKはただ首に巻き付いた糸をおもいきり引き寄せ、釣られた魚の如く引き寄せたクモ怪人の腹部を殴り、空へご案内しただけだ。

ベルトのキングストーンが輝く。バイタルチャージ、BLACKの右腕にエネルギーが集中する。

「ライダーパンチッ!!」

落ちてくるクモ怪人にめがけて必殺の拳をくらわせる。

クモ怪人の顔面にクリーンヒットさせ、再び空へ返す。

まだだ、

右足にエネルギーを集中し跳躍、

「ライダーキッククッ!!」

黒い稲妻が天へ昇った。

直撃。クモ怪人の胸部を穿ち着陸する。

「ガア・・・アア・・・」

体が燃える。燃えて、燃えて、燃え尽きて、クモ怪人が落ちた場所には何も残らなかった。

「・・・・・・・・」

静寂。今、この場には仮面ライダーBLACKしかない。月の光が地を照らし、夜風が皮膚を撫でた。

第九話 一夜明けて

深夜の激闘から一夜が明けた。

私立リディアン学院の地下、二課本部のオペレーションルームに主要な人物達が集まっていた。

「それでは、今回の件の経過報告といきましょう」

間延びした声の主、二課所属のエージェント蛇川悟は手に持っている報告書を読み上げた。

「ネフシユタンの鎧、ならびにそれを所持していると思われる少女の行方は不明。ゴルゴムの残党と思わしき怪人も、確認できた五体は全て消滅……。うん、なぐんにもわからないことだけがわかりましたね」

「陽介を誘き寄せた廃工場もか？」

「はい。数年前から放置されている工場で何もなかったですね」

「そうか……」

「怪人が現れたってことはゴルゴムが復活したんですかね？」

二課のオペレーターの一人、藤堯朔也は心配そうに言う。短期間とはいえ日本を征服したかの悪の組織、暗黒結社ゴルゴム。多くの人々に恐怖を植えつけたその組織の復活を危惧するが、

「それはないはずだ」

それを否定するのは仮面ライダーBLACKこと黒山陽介。

「ゴルゴムは間違いないなく壊滅した。生き残って姿を潜めている怪人はいるかもしれないが、組織としてのゴルゴムは完全に壊滅している」

「……じゃあ、あの怪人は？」

「それについてはなんとも……だけど、クモ怪人やネフシユタンの鎧の女の子の背後に黒幕がいるのは確かだ」

「まあ、現場に証拠が残ってないんで調査は難航してるんですけどね

」

「・・・それにしてもその黒幕の狙いは何なのかしら？」

「狙いの1つは響君だろう」

ネフシユタンの鎧の少女は言った。狙いは最初から立花響だと。日本の最重要機密であるシンフォギアシステム、その装者である響個人を狙えたこと、それは、

「内通者、ですか・・・」

「考えたくはないですね」

「・・・私が悪いんです・・・」

「響ちゃん？」

「2年前も、今度のことも、私がいつまでも未熟だったから翼さんが・・・、シンフォギアなんてスゴい力があっても私自身が至らなかつたら・・・、翼さん、泣いていました。翼さんは強いから戦い続けてきたんじゃないやありません。ずっと、泣きながらもそれを押し隠して戦ってきました。悔しい涙も、覚悟の涙も、誰よりも多く流しながら、強い剣であり続ける為に、ずっとずっと1人で・・・」

少女は震える。自身の情けなさに涙がでる。それでも、

「私だって守りたいものがあるんです！ だからッ！」

☆

喫茶店ストーン。

昼下がりの午後、客足も落ち着き、店内は静かだった。黒山陽介は

店内の床を清掃していた。ただ、ひたすらに。

今は、何かしていなければ落ち着いていられなかった。風鳴翼は絶唱によるバックファイアで凄まじいダメージを負うも一命はとりとめた。しかし、まだ意識は戻らず今も二課の医療室で眠っている。

立花響もあの戦いで何か思うところが出来たのだろう。翼の力になれなかったこと、自身の力が足らなかったことを、総じて己の未熟さに震えていた。

「(君を守るだなんて言っただけか)」

そして、黒山陽介も共に戦う仲間を守れなかったことを悔やんでいた。防人の少女は血を流し、撃槍を宿した少女は涙を流した。

この体でできることは結局何かを壊すだけなのか、本当に守りたいものは守れなかった自分はこの先、何かを守れるのか、そんな思考がぐるぐると頭を駆け巡っていた。

「お〜い陽介」

「ツ！ はい！ おやつさん！」

「お前さん、いつまで同じところ掃除してるんだい？」

「え？ ……あ……」

喫茶店の店長、石田に声をかけられはつとする。床を見れば一部分だけがぴかぴかになっていた。大分、思考の渦にはまっていたらしい。

「……陽介、ちよつとこっちにきなさい」

言われるがままカウンター席に寄る。石田は、座ってなさい、と言いつつ陽介は席に座る。しばらくするとあるものが差し出された。

コーヒーだ。

「……おやつさん？」

「まあ飲みなさい。儂の奢りじゃ」

コーヒーカップを持つ。普通のブラックコーヒーのようだ。特に気にせずコーヒーを飲む。

「ツ!? ニガツ!?」

とんでもない苦さだった。匂いは何ともないのに、口の中で一気に苦みが広がった。脳天に突き刺さるような苦味だ。

「はっはっは」

「ちよ、おやつさん!？」

陽介がおやつさんと呼ぶこの石田という男は、客の注文に合わせて様々な飲み物を提供する。甘いミルクココア、香りが良い紅茶、コクが深いコーヒーなど様々だ。どの飲み物も美味しいと老若男女を問わずそう称されるのが石田という男だ。

それが、こんな苦いコーヒーをだすとはいったいどういうことだろうか？ 急激に頭が冴えてくる。

「少しは目が覚めましたかな？」

「・・・え？」

「なにやら珍しく悩み事がありそうでしたからな。しかし、回りが見えてなかったようなので、少し休憩と思いましてな」

「・・・それでこのコーヒーを・・・確かに目が覚めましたよ」

「ここは喫茶店じゃ。誰でも心休めるようなゆったりとした時間を過ごせるような店じゃ。だから、陽介よ。少し落ち着いてはどうじゃ？」

「・・・落ち着いてませんでしたか？」

「お前さんとはもう2年以上の付き合いになるが、お前さんよりは少し長く生きてるからの。そういうのはなんとなくわかるもんじゃ」

優しい笑みを浮かべながら石田はそう言った。

「年寄りのお節介で言わせてもらうなら、悩み過ぎるな」

「悩み過ぎるな、ですか」

「そうじゃ。悩むことじたいが悪いとは言わんが、答えが出ない悩みに時間をとられるのは勿体ないと思わんか？ そもそもお前さん、考え事が得意な部類ではあるまい」

まあ、確かにと内心同意する。

「なら、どうすれば？」

「やれること、できること、したいことに全力を尽くすのじゃ。それだけだよ」

「・・・」

「お前さんはまだ若い。悩みすぎず、自分がしたいことをしてみては

「どうかの?」

「俺がしたいこと・・・」

「それでも、悩み、疲れることはあるじやろう。そんなときはこの店に来るがよい。暖かい飲み物でも飲んでゆっくりするとよい」

ほっほっほ、と笑いながら石田は店の奥へと行った。

残ったコーヒーを再び飲む。苦い。だけど、先程と違い苦味の奥から体の芯に届く旨みを感じた。

その時、店のドアが開いた。カランカランとベルが鳴る。入ってきたのは、

「あ、いた! ヨウさん!」

「響ちゃん?」

「ヨウさん! 私、強くなりたいです! 私が私のまま強く!」

ズンズンと勢いよく陽介に近付き、若干鼻息荒く響は言う。年頃の女子から聞かされる力強い発言。その目はやる気に満ちていた。

この子はもう踏み出したのだ。自分がしたいことをするために。ならば、自分は、

『私とて、人類守護の勤めを果たす防人、こんなところで、折れる剣じゃありません。・・・それに、あなたなら必ず来ると、信じていましたから』

翼の言葉を思い出す。彼女の決意は既に固まっていた。それに、彼女は言っていたではないか、

信じていましたから。

己を律している彼女に信じられ、今また、目の前の少女もフンスフンスと気合い充分な様子でいる。

「・・・よし」

バチン!と、自分の頬をはたく。

「うわわ!?! ヨウさん!?!」

「大丈夫だよ響ちゃん。ちよつと気合い入れたただけだから」

「?」

陽介がいきなり自分の頬を叩いたので驚く響。理由を聞こうにも気合い入れたと言うだけでそれ以外はわからなかった。

俺は守りたいんだ。

人が当たり前に過ごせる日常を、それを謳歌できる自由と平和を。なら、くよくよしている暇はないのだ。

「それで、響ちゃん。強くなりたいの？」

「はい！ ヨウさんなら強くなるためのいい特訓とか知ってそうだったんで！」

期待の眼差しが陽介に突き刺さる。自分が過去にゴルゴムの怪人に対抗すべく特訓をしたことがあったが、かなり無茶な方法が多い。

彼女に、落ちてくる岩を殴り壊せと、言っただけでやらせるわけにはいかない。

とはいえ、彼女の決意を無駄にしたくはない。

「・・・響ちゃん。特訓もいいけど、君はまず戦い方を覚えた方がいいと思う」

「ならそれを教えてください！」

「待った待った。俺の戦い方は我流だし、俺も誰かに戦い方を教えたことはないよ。そもそも、参考にならないと思うし」

「ええ、そんな」

「だけど、いい師匠になってくれそうな人は知ってるよ」

☆

「たのもー!!」

「二人揃ってどうした」

というわけで、気合い充分の2人は風鳴弦十郎が居る風鳴邸にやって来た。

「ゲンさん、響ちゃんに戦い方を教えてやってください!」

「お願いします!」

むう、と、風鳴弦十郎は唸りしばし思案する。こちらに頭を下げる2人。

気落ちしていた様子だったが、今はもうやる気に満ちている。なら、大人として彼がとる行動は決まっていた。

「・・・俺の指導は厳しいぞ?」

「望むところです!」

響は歓喜した。自分が自分のまま強くなるために信頼する人に頼み、その人が推薦してくれた人が指導してくれることになった。

どんな厳しい修行だろうと必ず強くなるぞ! と、わくわくしていた。

「ところで響君。君はアクション映画に興味はあるかね?」

「・・・はい?」

立花響、最初の修行はアクション映画の映画鑑賞だった。

第十話 いつか私も輝ける太陽に

「はあ、はあ」

みなさん、おはようございます。立花響です。

私は今、朝のロードワーク中です。

強くなるためにヨウさんに頼み込んで、風鳴司令こと師匠に弟子入りして一週間が経ちました。

最初はいきなりアクション映画の鑑賞が始まった時はどうなることかと思いました。

男の鍛練は飯食って、映画を観て、寝ることだッ！

私、女ですよ!?

豪語する師匠に反論した私は悪くないと思う。うん。

とはいえ、アクション映画はバカに出来ないと実感したのも事実です。動きを観て、技を盗む。型を身に付かせる為の反復。基礎体力を向上させる為の厳しい特訓。

あああ

強くなるのは凄く大変だ。でも、へいきへつちやら。

あああああ！

私は、私のまま強くなりたい。その意思は変わらないから。

あああああ!!

・・・って、この声は!?

後ろを振り返れば人影が見えた。凄いスピードで走ってくるあの人は、

「うおおお!? ゲンさん!? これ、効果あるのお!？」

「スピードを落とすな！ お前の場合は普通の鍛練では意味がないからな！」

「ぬおあああ!？」

嵐のように私を追い抜いていき3周目に突入するヨウさん。

ヨウさんは四肢に10kgの重りを付けられ更に、タイヤを3つを引きその上に竹刀を持った師匠を乗せて走っていた。

ヨウさんの叫び声が遠退いていくの聞きながら私も走り出す。まだまだ追い付けない背中だけど、いつか、きっと、

☆

私、立花響がヨウさんと出会ったのは2年前のことだ。

ツヴァイウイングのライブの惨劇で生き残ってしまった私は、病院

で辛いリハビリも頑張って退院すればいつもの日常に戻れると思っていた。

だけど、待っていたのはどうしようもない悪意だった。

学校に行けば周りの人達が、昨日まで友達だった人が急に離れていった。『人殺し』、『卑怯者』、謂れのない噂が広まり陰湿ないじめもあった。

辛い毎日だった。それでも、待っていてくれる家族といつも一緒にいてくれる未来だけが心の支えだった。

だけどもある日、お父さんが帰って来なくなった。

連絡もつかずお母さんの元気がどんどんなくなっていく。

辛い。毎日が苦しい。

そんな日々が積み重なったある日、私と未来は公園で大人数に囲まれた。

同級生の子達と私達よりも年上で体が大きい男の人達。手には金属バットや鉄パイプなどを持っていて、それらをこれから何に使うかなんて想像もしたくなかった。ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる人達。携帯やカメラを構える同級生。

ああ、何でこんなことになってるんだろう。

生きているのがそんなにおかしいのか？

私は何をしたんだ？ ただ、生き残ってしまっただけなのに。

いや！ 近づかないで！ 未来だけでも逃がさないと！

ああ、でも、どうすれば・・・

誰か・・・

助けて・・・

「なくにしてんの？」

その人は突然現れた。

覇気のない声の主は衣服がボロボロで浮浪者や不審者かと思った。周りの人達がまた何か言っている。

その言葉を聞き私達を見るボロボロの人。服もボロボロだけど、顔、というか立ち姿全体に生氣を感じられなかった。

まるで、生きる希望を失ってしまったかのような。

日本人だと思われる容姿だけど、宝石のような紅い目をした男の人は私と未来を見たあと周りの人達に言った。

「君達恥ずかしくないのか？ そんな大勢で女の子2人を囲んで何をしようってんだ？」

「あ、あ、ん!? テメエこそなんだよ！ 正義の味方のつもりか！」

「・・・そんなんじゃないやねえよ。・・・まあ、元気が有り余ってるならスポーツでもしたら？ その手に持つてるモノはそのためだろ？」

「・・・ああそうだよ。・・・今からするんだよ！ お前も混ぜてやるよ！」

男の人がバットを振り上げる。危ない！ と、声をあげることもしかない。私は未来を抱き締めてただ震えていることしかできなかった。

ゴッ！ と、嫌な音が響く。男の人が号令をあげ周りの人達も紅い目の人に群がる。

殴打音が更に鳴る。私は恐くて目を瞑った。

どのくらいの時間がたったのだろうか。とても長い時間が流れた気がする。いつの間にか辺りが静かになった。

「な、なんなんだこいつ!？」

「・・・え?」

ゆつくりと目をあける。大勢の人達が紅い目の人を囲んでいる。それぞれが手に持つてる凶器には赤い液体がついていた。だけで、

「こいつおかしいよ!」

「何で倒れねえ!」

「何か気持ち悪い!」

紅い目の人はただ立っていた。

「・・・はあ。痛いなあもう」

「こ、このヤロオ!」

男の人がまた金属バットを振る。紅い目の人が金属バットを掴んだ。片手で、

「なっ!? 離しやがれ!」

「危ないだろ。よっと」

「うわわわわ!」

紅い目の人がバットを掴んだと思っただけのまま男の人を持ち上げてしまった。バットを掴んだままジタバタしていた男の人はバットから手を離して地面に落ちた。

そして、紅い目の人は金属バットを持つと、それを捻子切った。

耳障りな金属音が辺りに響くがそれよりも衝撃的な光景にびっくりする。

え? 金属バットが捻子切れた?

「は?」

「え? 何?マジック?」

「こいつ、なにしやがった!」

別の人が鉄パイプで殴りかかる。紅い目の人は難なくそれを奪い取ると、今度は鉄パイプを折り曲げて丸めてしまった。まるで、鉛細工のように、

「さて、・・・まだやるかい?」

「ひい!」

人が離れていく。あんなに大勢いたのに蜘蛛の子を散らすように

いなくなっただけだった。やがて、公園には私と未来と紅い目の人だけが残った。

しばしの静寂。

紅い目の人はゆっくりとこちらに振り向いた。

頭から血を流しながら何故か微笑む彼。

そして、彼は仰向けに倒れた。

「……え？」

動かない。ピクリとも動かなくなった。

「……あわわ!? だ、大丈夫ですか!? ど、どどどどうしよう未来!」

「お、落ち着いて響! えっと、えっと救急車を呼んだ方がいいよね!」

未来と一緒にわたわたしてると、ぐうぐうと、音になった。

「……響?」

「いいい!? 違うよお! 今のは私じゃないよお!」

未来がじとくとこつちを見る。確かに! 私は人よりちよつとだけ多く食べるかも知れないけど! 今のは私のお腹の音じゃないよ!

じゃあ今のは? その疑問はすぐ解決した。

また、ぐうぐうと音になる。未来と2人で音の発信源に目を向ける。

「……腹が、へったな……」

私達を助けてくれた人のお腹の音だった。

「ガツガツガツ! ゴクツ……。あ〜ごちそうさまでした! すまないね、ごちそうになって。しばらく何も食べてなかったから」

「ああ、いえ、只のコンビニ弁当ですから」

「というか、さっきの血は? 何でそんなに元気なんですか?」

「あ〜……俺は人より怪我の治りが早いんだ」

「え〜?」

「それより! 君達の方は怪我はないかい?」

「え、あ……」

「響……」

それは、こっちのセリフだと思う。この人の方がボロボロだった。直接その光景を見てないが、この人は金属バットや鉄パイプで殴られた筈なのに、なんで、こっちの心配をするのだろう。

それに、なにより、

「なんで、助けてくれたんですか?」

「何でって? あの状況なら普通助けるでしょ?」

「わ、私達、初対面ですよね?」

「別に知り合いじゃなきゃいけない訳じゃないでしょ?」

「あの人が言ってたことが本当だったら?」

「その時はその時だけど、俺には君が人殺しするような子に見えないよ」

「で、でも」

「あくも! まどろっこしい! いいかい、俺は、女の子2人を大勢で囲んでるあの状況が見過ごせなかっただけ! 俺が助けたいから勝手にやっただけ、それで君達が無事ならそれでいいじゃないか」

「……それで、ボロボロにやられたと思ったらお腹が空いて倒れたんですか」

「……君、中々厳しいこと言うね」

「小日向未来です」

「ん?」

「フツ。名前ですよ。私達まだお互いの名前も知らないじゃないですか」

「そうだね、俺は黒山陽介。……只の通りすがりさ」

黒山陽介。それが、この人の名前。

「あの、私は、立花響です」

「小日向ちゃんに立花ちゃんね。よろしく」

そう言って手を差し伸べてくれる黒山さん。……でも、その手を

とっていいかわからなかった。だって、

「どうしたの？」

「・・・あの、今日みたいなことがあったら、また、助けてくれますか？」

聞いた。聞いてしまった。今日会ったばかりの人に何を聞いているのか私は。

この人は通りすがりだと言っていたのに、今日はたまたまだったのだ。

この先なんて・・・

「もちろん」

「え・・・」

「こうして知り合ったのも何かの縁だし、ご飯の恩もできた。また、なんて言わずいつでも言ってくれ。何度だって必ず助けるよ。……………今度こそ」

「あ・・・う・・・」

「ん？」

迷いなく言いきる黒山さん。その表情は真剣だった。

そこで限界だった。

「うわああああん！ あああああん！」

「おう!? 立花ちゃん!?!」

「あああああん！ ひびきいいい！」

「あれ!? 小日向ちゃんも!?!」

私は泣いた。未来と抱き合って泣いた。

たぶん、今まで生きてきた中で一番泣いたんじゃないかってくらい泣いた。大声で、ありったけで、私の中でくすぶっていた何もかもを吐き出すように。

この日、私はヒーローに出会った。

「ハア……ハア……」

「ぜえ……ぜえ……」

「よし！ 10分休憩だ！」

私とヨウさんは一緒に倒れる。地面が冷たい。

「ヨウさん、大丈夫ですか？」

「な、なんとか……」

「すみません、特訓に付き合ってもらって」

「なくに、俺も勘が鈍っていたところだし、ちょうどいいよ」

とは言つても、ヨウさんの訓練メニューだけ明らかにおかしい。常人がこなせるような訓練ではない。とはいえ、それぐらいキツイ訓練でないという意味がないらしい。

俺、改造人間なんだ。

ヨウさんが改造人間。ううん、仮面ライダーだと知った時はすごく驚いた。

初めて会ったあの日から、ヨウさんと未来と三人で一緒にいることが多くなった。

私に対するいじめとかはなくなった訳ではないけど、そんなものは時間が経つにつれて気にならなくなったし、いつの間にかいじめそのものがなくなっていた。

ヨウさんが喫茶店ストーンに勤めるようになってからはその常連になっていた。

マスターの石田さんが淹れてくれるお茶とヨウさんが握ってくれるおにぎりがとてもおいしいんだよね。

時折、店にいないことがあったけどそれは、ノイズが現れてノイズ

から人々を守るために戦ってくれていたんだ。

ヨウさん。ヨウさん。ヨウさん。

ヨウさんと一緒にいると胸の奥が温かくなるのはなぜだろう？

ヨウさんの笑顔を見るとドキドキするのはなぜだろう？

未来といるときとはまたちよつと違うこの感じ。イヤじゃない。

むしろ、心地いいこの感じは？

考えてもよくわからないや。

「ヨウさん」

「ん？」

でも、

「私、がんばりますね！」

この人ともつと一緒にいたい。

ヨウさんは私のヒーローだから。

私も誰かを助けられるようになりたいから。

第十一話 劍聖

完全聖遺物デユランダ

かつてEU連合の経済破綻に伴い、不良債権の一部肩代わりを条件に日本政府にもたらされた経緯があり、現在は私立リディアン音楽院の遙か地下1800mの最下層「アビス」にて厳重に保管されている。

二課が保有しているこの完全聖遺物を護送することになった。

場所は永田町最深部の特別電算室「記憶の遺跡」。

「不朽不滅の聖劍ねえ」

西洋に伝わる伝説の劍が国家郡の為に売られるとはなんとも複雑な感じだと黒山陽介は思った。

先程、デユランダルの移送計画の緊急ブリーフィングが終わり、移送開始まで待機することになった。

ネフシユタンの鎧の少女。或いはデユランダルを狙う別の勢力に對抗できる戦力は限られている。

人間が相手なら二課のエージェント達で対応できるが、ノイズが襲撃してくるなら相手をできるのは仮面ライダーとシンフォギア、黒山陽介と立花響だけなのだ。

二課全体に緊張が走る中、黒山陽介はある疑念があった。

デユランダルの移送の段取りが良すぎる。

まるで、こうなることが最初から決まっていたかのようだ。

事の発端は了子さん。櫻井了子が政府のお偉いさんに二課の活動報告をしにいったところから始まる。

二課が活動しやすいよう、影ながら支援してくれていた防衛大臣がいたのだか、その防衛大臣が殺害された。複数の革命グループからの犯行声明が出ているため犯人はわからない。

防衛大臣に報告しに行った櫻井了子の安否も不明だったが、当の本

人は何食わぬ顔で二課に帰還、無事であった。

了子の無事に喜ぶ一同だが、黒山陽介はある違和感を感じた。了子と連絡がつかなかったのは彼女の通信機が壊れていたからだった。

シンフォギアを開発するほどの才女が通信機の故障に気づかないのか？ これに関しては本人が忘れていた可能性があるのであまり気にしない。

問題は次だ。

黒山陽介は改造人間として強化された五感、嗅覚で感じ取ってしまっただ。

櫻井了子から血の匂いがしたこと。

正確には、彼女が防衛大臣から受理したというアタツシケースからわずかに血の匂いがした。

もちろん、その血が誰の血か迄は判別出来るほどの嗅覚はない。だが、確かに匂ったのだ。

だが、その事を聞く時間はなかった。

了子の無事で安堵していたあの空気を壊すのは何だか気が引けてしまったからだ。

櫻井了子は二課の中心人物であり高い能力を持った技術者である。彼女の開発したシンフォギアシステムによって多くの命が救われたのだ。

そんな人を疑いたくはないと黒山陽介は思った。

ふう、と息を吐き、気持ちを切り替える。

移送開始まであと数時間。今はデュランダルのことに集中しよう。そう思っていた時だった。

「おやく？ そこにいるのは黒山さんじゃあないですか？」

「・・・何だ、蛇川か」

どうにも胡散臭い笑みを浮かべながら二課のエージェント、蛇川悟が現れた。

「何だ？ とはひどいですね〜」

「あんた、仕事はどうした？」

「休憩ですよ休憩。調査部も楽ではないですからね」

「ふん．．．」

蛇川は廊下に設置されている自販機に移動。自販機から天然水を買い、それを飲みはじめた。

「いや、最近はいろいろと忙しくなってきた大変ですね」

「そうだな」

月日が経つのは早い。響が GANG ニールの装者として覚醒してからは毎日が忙しくなったと思う。

ノイズの発生頻度の増加、失われたと思われたネフシユタンの鎧を纏った謎の少女の出現、その少女がノイズを召喚する術を持っていること、ゴルゴムの残党と思しき怪人の出現。

改めていろいろな出来事が起きたと思う。

「やれやれ、休む暇もないですよ」

「今休んでんじゃん」

「5分10分の休憩では休みになりませんよ。．．．まあ、黒山さん的には忙しい方がいいかもしれませんが」

「．．．どういう意味だよ」

「いえね、あなた．．．退屈してたんじゃないやありません？ 平和に」

「．．．なんだと」

「ゴルゴムから世界を救った仮面ライダー。だけど今はそのあり余る力を小さな人助けの為に使うだけ。いや、実につまらない。もっと派手にその力を使いたいんじゃないですか？」

「何バカなこと言ってるんだよ。平和が退屈？ いいじゃないか平和で」

「ええ、本当ですか？ ．．．あ！ そうでしたそうでした」

「なんだよ」

クツクツクツと薄気味悪く笑う蛇川に不信感が募る。この男は何が言いたいんだ。

「私としたことが忘れていました。黒山さんはもう失くしているのでしたね、一番守りたかったものが」

「．．．お前」

「おくとコワイコワイ。そんなに怒らないでくださいよ。まあ？　だから平和がいいんでしょ？　戦いにならないければ何も失うことがないんですから。でも、いざというときにあなたは何かを守れるんですかね？」

確かに蛇川の言う通りだった。黒山陽介は救いたかった者を救えず、守りたかった者を守れなかった。だが、

「守るさ」

「ほお？」

「守れなかったからこそ今の俺がある。どんな状況だろうと今度こそ全力で守りきるさ。必ずな」

黒山陽介は迷いなく宣言する。もう二度と大切なものを失うことがないようにこれからを全力で生きぬく。その決意に揺らぎはなかった。

「…まあいいでしょ。その意思を貫けるよう頑張ってください。…それでは私はこの辺で」

手をひらひらと振り、蛇川はその場を離れていった。

「…なんだったんだ？　あいつ？」

結局のところ蛇川が何がしたかったのか陽介にはわからなかった。

「フム、掴みかかってくるかとおもえば意外とあっさり返されましてね」

二課の通路を一人、蛇川悟は歩く。

「まあ、楽しみが増えたとプラスに考えておきますか。・・・フッフ、
絶刀は今は眠っていますですが新たな撃槍は目覚めている。魔弓は蛇の
鱗を纏い、そして黒い太陽もまた燃えはじめた。・・・クッフ」
笑う。誰もいない通路で薄気味悪く笑う。

「さてさて今後も楽しませてもらいますか」

そのおぞましく歪む表情を見る者は誰もいなかった。

☆

早朝。山の向こうから太陽が顔を覗かせる。私立リディアン音楽
院の玄関前にはデュランダル移送のメンバーが集合していた。

「防衛大臣殺害犯を検挙する名目で検問を配備、記憶の遺跡まで一気
に駆け抜ける！」

「名付けてえ！ 天下の往来独り占め作戦”！ よ！”

風鳴弦十郎の号令によって作戦は開始された。

永田町へ向かう橋の上をピンクの車を中心に4台の黒塗りの車が護衛のため囲みながら走行する。その50メートル後方には1台のオンロードバイクが追従していた。

ピンクの車には櫻井了子と立花響が乗車しており移送対象のデュランダルも積み込まれている。黒塗りの車には二課のエージェント達が乗り込む。いずれも精鋭揃いだ。そして、追従する1台のオンロード型バイク、ロードセクターには黒山陽介がいた。

前方で走る車の集団を見ながら陽介は視線を空へ向ける。空には二課が所有しているヘリコプターが一機飛んでいる。そこからはドアを開け体半分を機体からのり出して作戦地域全体を見渡している風鳴弦十郎が見えた。

作戦の通り今は一般車が走ってないためスムーズに走行している。だが、油断は禁物。何時襲撃があるかわからない状況で緊張感が増す。

彼らの走行している橋の一部が崩れた。

驚いてる暇はない。すぐさま進路をずらし、崩れた部分から遠ざかる。しかし、1台の黒塗りの車は間に合わず崩れ穴ができた部分に落下、爆発した。

橋を抜け町へ入る。

『敵襲だ！ まだ目視で確認できてないがノイズだろう！』

『この展開！ 想定していたより早いかも！』

通信機から弦十郎と了子の声が聞こえたと瞬間。護衛車が1台突如上空へ吹き飛ばされた。

「うおッ!？」

目の前に迫る水の柱を慌てて避ける。水の柱の出所は、

『下水道だ！ ノイズは下水道から襲撃してきている！』

また1台、護衛車が吹き飛ばされた。

『弦十郎君、ちよつとヤバイんじゃない!? この先の薬品工場で爆発でも起きたらデュランダルは・・・』

『わかつている！ さつきから護衛車を的確に狙い撃ちしてくるのは、ノイズがデュランダルを損壊させないよう制御されているとみえる。ならば、狙いがデュランダルの確保ならあえて危険な地域に滑り込み攻めて封じるって算段だ！』

『勝算は?』

『思いつきを数字で語れるかよッ!』

弦十郎の指示通り薬品工場へ向かう。薬品工場へ到着する目前、突風がロードセクターを襲った。

「おわっ!」

車体の真横からの衝撃に体制が崩れる。そのままロードセクターは横転。陽介も道路へその身を投げ出された。何とか受け身をとりすぐさま立ち上がる。

「今の風はいったい? ……——ッ!」

足音が近付いてくる。覚えのある気配が近付いてくる。気配の方へ視線を向ける。

全身を魚類の鱗を思わせる甲冑で身を包み、マントをたなびかせている。左手に、赤い宝石を飲み込もうとしている蛇が描かれた身を締めれば上半身をすっぽり覆える程の大きさの盾を持ち、右手には両刃剣を持つ顔面が文字通り真っ白な人物が近付いて来た。

黒山陽介はこの者を知っている。

かつて、自身の前に立ちほだかり自身に埋め込まれたキングストーンを巡って何度も戦った強敵。

その名は……

「劍聖、ビルゲニア……」

「フッフ……、久しいなブラックサン。いや、仮面ライダーBLACK K」

剣を陽介の方へ突き立てビルゲニアには怪しく微笑んだ。

☆

「ヨウさん!？」

自分達の後方にいたロードセクターが横転したのが見えた響は動揺の声をあげる。

「響ちゃん！ 今、彼に気をとられている場合じゃないわよ！」

「でもー！」

「彼なら大丈夫よ！ 信じなさい！ あなたは自分のすべきことに集中しなさい！」

「ッ！ はいッ！」

了子の言葉に響は気を引き締める。

「(そうだ、ヨウさんならきつと大丈夫。私は、私にできることをやるんだ!)」

そう決意した響の眼前、車のフロントガラスにノイズがへばりついた。

☆

「生きていたのか、ビルゲニア」

「フッフ。いや、死んでいたさ。奴に、シャドームーンに斬られ私は死んだ」

「地獄から甦ったとでもいうのか」

「フッフ、さてな。私が甦った方法などさほど重要なことではあるまい」

「今さら復活して何をするつもりだ！ ゴルゴムを復活でもさせるつもりか！」

「ゴルゴムの復活だと？ 今さらゴルゴムも新たな創世王にも興味はない」

「なら、何の用だ！」

「そんなもの決まっていよう。・・・貴様との決着をつける為だ」
「なんだと・・・？」

「あの時はいろいろと邪魔が入ったからな。・・・だが！ 今はもうその邪魔者達はいない！ シャドームーンを倒し、創世王を倒し、ゴル

ゴムを滅ぼしたキサマはこの私が倒すのに十分な実力者だ。そのキサマを、仮面ライダーBLACKを倒すことが私の目的なのだよ。・・・さあ！ 変身しろ黒山陽介！ そして、私と戦え！」

ちらりと自身の背後、薬品工場の方へ目を向ける。響や了子の身を心配するが、薬品工場の方から歌が聞こえてきた。

この歌は響のものだ。あの子も戦っているのだ。この短期間でめきめきと成長していく彼女には驚きを隠せない。

視線をビルゲニアに戻す。闘士や殺気が漲ってるように見える。

信じよう。デュランダルの方は響に任せ、自分は目の前の敵に集中するのだ。

「ビルゲニア！ 望み通り戦ってやる！ 今度こそ完全に倒す！」

・・・変・・・身ツ!!」

黒山陽介の体が変わる。

「仮面ライダー・・・ブラックツ!!」

「おお・・・懐かしき我が宿敵の姿」

「いくぞ！ ビルゲニア！ トウア！」

BLACKはビルゲニアに飛びかかる。拳を握り、殴る。ビルゲニアの盾、ビルテクターがそれを防ぐ。

「まだまだ！」

拳の乱打がビルテクターに叩き込まれた。

「ぐっ!!」

BLACKは攻撃を止めビルゲニアから距離をとる。両手が痺れる。

「固い。固い盾であった。」

「次はこちらからゆくぞー！」

ビルゲニアがその手に持つ剣、ビルセイバーを掲げる。キラリと刃が光る。

「ハアッ！」

一瞬の踏み込みで間合いが縮まる。振り下ろし、突き、風ぎ払い。怒濤の剣さばきがBLACKを襲う。BLACKはビルゲニアの攻勢をひたすらに避ける。避けて避けて時には手刀にキングストーン

エネルギーを集中させ刃を弾く。

(まだまだ・・・焦るな)

「そらそらそらッ!」

ビルゲニアの猛攻は続く。BLACKは刃の直撃だけは避け防御に徹した。必ず来る反撃のチャンスを掴むため。

「スウ——ハアッ!」

「——ここだッ!」

ビルゲニアの一瞬の一呼吸の間に間合いを積める。ビルゲニアの突きに対して刃の横を滑るように回転して避ける。

ガッ!と剣を突き出したビルゲニアの手を掴み、剣を封じる。そして、ビルゲニアに背中からのし掛かるように動きながら右肘をビルゲニアの後頭部に叩き込む。

「ガッ!」

命中。苦悶の声が聞こえた。

「なんのお!」

「ぐあっ!」

僅かにふらついたビルゲニアだが、踏みとどまりビルテクターでBLACKを殴り飛ばす。両者の距離が再び離れた。

互いの距離を保ちつつ相手の様子を見る。

「ビルセイバー——」

先に動いたのはビルゲニアだった。

「——デモントリックッ!!」

ビルゲニアの姿が歪む。歪み、ブレ、ビルゲニアは3人に増えた。

「ッ!? これは!」

かつての戦いで観たビルゲニアの技。自身の分身を作り立て続けに攻撃するものだったはずだ。3人のビルゲニアはBLACKを取り囲み斬りかかった。

3方向から振るわれる刃から逃れるためその場から大きく跳躍する。刃ば空振り6つの瞳がBLACKを捉える。

「マルチアイ!」

BLACKは自身の目の機能をフルに使いビルゲニア達を見た。

(やはり本体の区別がつかない。ならこれは分身しているのではない?)

以前、この技を受けた時も本体を見破れなかったことを思い出す。分身している訳ではないとしたら3人に見えてるこの現状はどう説明すればいいのかわからなかった。

対抗策を考えなければ切り刻まれてしまう。地上にいるビルゲニア達は剣を構え迎撃の態勢だ。

どうする? 3人纏めて攻撃するか? だが、自分には範囲攻撃できる技などキングストーンフラッシュしかない。しかも、相手はビルゲニアだ。よくて目眩まし程度にしかないだろう。

(いやまて、目眩まし?・・・まさか)

1つの考えがBLACKに浮かんだ。

「空中に逃げたところで結果は同じよ! さあ!我が剣を受けよ!」

「やるしかねえ!・・・——キングストーンフラッシュ!!」

「ッ!」

閃光がビルゲニア達を包む。急な光にビルゲニア達は思わず目を盾で覆う。すると、どうだろう。ビルゲニア達の姿が歪むとビルゲニアは1人に戻っていた。

「ビンゴォー!」

ビルゲニアは分身していたのではない。ビルゲニアが分身しているように錯覚させていたのではないかとBLACKは考えた。

幻術の類いを見せられていると分かれば、それを打ち破る手段は既に持っていたのだ。予感的中。ビルゲニアの技を破ることができた。

そして、ビルゲニアは今、自身の盾で視界を塞いでしまっている。チャンスだ。

落ちる速度を加速させ空中で一回転する。狙うは盾が覆っていない右肩。

「オラッ!」

「グオッ!」

隕石が如く落下しビルゲニアの右肩を蹴る。ビルゲニアは地面を

転がる。すかさず、バイタルチャージを発動。右拳を握りしめる。

「ライダーパンチッ!!」

寸でのところで立ち上がり盾を構えるビルゲニア。その盾ごと砕く勢いでBLACKの拳が盾に突き刺さる。

ドゴオ!! という音が盾から響き、ビルゲニアは自身の足でコンクリートの地面を抉りながら後退する。

「ライダーキックッ!!」

必殺の蹴りがビルゲニアに炸裂する。

「——ビルセイバー」

かに思えた。

「ネオ」

ビルゲニアは刃にエネルギーを集める。それだけではなく手のひらの上で剣を高速で回転させていた。

「ダークストームッ!!」

回転し、エネルギーを纏った剣が突き出される。

BLACKの蹴りと、ビルゲニアの突きが激突する。ガガガガッ!! と切削音に似た音を出しながら2人の力がぶつかり合う。

「ハアアアアアッ!!」

「おおおおお!!」

「——クラッシュッ!!」

ぶつかり合う力の拮抗を破ったのはビルゲニアだった。

剣を突き出す時、ビルゲニアは剣を持っていなかった。剣を手にはたず、剣の根本を掌底による衝撃で突き出した。

力が拮抗したその瞬間、ビルゲニアは腕を引き今度は剣の根本を殴りつけた。

剣を釘に例えるならビルゲニアの拳はハンマーだ。釘は打つと食い込む。ビルゲニアは行ったのは正にそれだ。

結果。

「な!?!」

高速回転するビルセイバーはBLACKの足を抉り裂きながら空へ飛翔した。

だが、それだけではない。高速回転により産み出された暴風はBLACKを巻き込み、大きく吹き飛ばした。

自身が何かに叩きつけられる衝撃を感じた後、地面に落ちる。

「ぐ……がはっ……」

自分は今どうなった？ 急いで状況を確認する。まずは自分の状態だ。ライダーキックが破られた。全身に痛みが走る。右足を見る。右足のくるぶしから膝の辺りが裂けている。血が溢れてる。その光景を認識した瞬間、激痛が全身を駆け巡る。痛みを声を上げそうになるが、ぐつと歯を食い縛り痛みを耐える。取り敢えず、傷口を手で無理矢理押さえつけこれ以上の出血を抑える。

次に自分の位置だ。どうやら薬品工場の方まで吹き飛ばされたらしい。自分の後ろにある塔のような建物に人形の凹みが確認できた。

「そこにいたか」

「くっ……」

ビルゲニアが堂々とした足取りで近付いてくる。ビルゲニアが右手を広げれば、飛翔していったビルセイバーが吸い寄せられるように戻ってくる。

立ち上がるうとするが上手く立てない。そうこうしている間にビルゲニアはもう目の前まで来ていた。

「如何かな？ 我が新技の威力は？」

不適な笑みを浮かべビルゲニアはBLACKを見下げる。

（これはちよつとまづいな……）

必殺技が破られ、足が動かない。ピンチである。

その時だ。

遠方から光の柱が伸びた。

「む!?!」

「これは!?!」

「この巨大なエネルギー……。ふん、どうやら覚醒したようだな」

「何だと!?! まさか、デュランダルか?」

「そのようだが、今の貴様に他のことを気にしている余裕はあるのか?」

刃が突き立てられる。

「シャドームーンや創世王を倒したいうのにこの体たらく。がっかりだよ仮面ライダーBLACK。……では、さらばだ！」

ビルゲニアが剣を振り上げた時、遠方の光の柱の耀きが増した。

「何!?!」

「なんだ!?!」

光の柱がこちらに倒れこんでくる。直後、薬品工場全体を大爆発が包んだ。

「うう……」

自分の上に覆い被さっている何か振り払い黒山陽介は周囲の状況を確認する。変身は解けてしまっていた。

自分が振り払ったのは建物の残骸。周囲の光景も薬品工場の施設の残骸が散乱していた。

「何が起きたんだ?」

「ほう? 生きていたか?」

声が出た方角を見る。そこには、ビルゲニアが瓦礫の山の上に立っていた。

「ビルゲニア……!」

「相変わらず悪運は強いらしいな。……今日のところは退こう。こちらの用事は済んだのでな」

「何? 俺を倒すことが目的じゃなかったのか?」

「ああ、確かに『私の』目的はそうだが、こちらにも事情があるのでな。その命、しばし預けてやろう。次に会うときが貴様の最期だ、仮面ライダーBLACK。フハハハハ！」

ビルゲニアはビルテクターで自身の体を覆うと、謎のエネルギーがビルゲニアを包む。橙色の光球となると何処かへ飛んでいった。

手を握りしめる。力の限り、目一杯。

見逃された。自分は負けたのだ。

「くそおお・・・」

久方ぶりに感じる不愉快な感覚に陽介は只体の震えさせることしかできないかった・・・。

第十二話 私の娘はかわいいのだよ

自然に囲まれた中に豪邸が一件そこにあつた。豪邸の敷地内にはちよつとした湖があり、そこに2人の女性がいた。1人は銀髪の少女、もう1人は金髪の女性であつた。

銀髪の少女は金髪の女性に何か言っている。銀髪の少女は手に持っていた杖のようなモノを金髪の女性に投げ渡し、その場を去つていった。

その様子を見ていたビルゲニアは金髪の女性に歩み寄つた。

「随分なじやじゃ馬なようだが、いいのか？」

「必要なモノはほぼ手に入っているわ。あの子も必要なことはしてくれたし、そろそろ潮時ね」

「怖い女だな。お前は」

「年季が違うのよ」

軽い口調で2人は言葉を交わす。まるで、付き合いの長い友人のように。

「デュランダルが覚醒したことで、計画は一気に進められるわ。予備プランとして考えていたキングストーンを利用する必要はなくなつたわね」

「だが奴は、貴様の悲願成就の障害になるぞ」

「その為の貴方じゃない。私はてつきり仕留めた思つただけど？」

「すまん。デュランダルの覚醒は、あのタイミングでは幸であり不幸であつた」

「?・・・。貴方、その腕・・・」

女はビルゲニアの右腕を見る。ビルゲニアの右腕は肘から先の部分がなくなつていた。

「ままならないものだ。せつかく肉体を得たというのに限界を超えれば崩れてしまうとは。私もまだまだということだ」

「ハア・・・、さつさと『ポッド』に入りなさい。調整するわよ」

「おや？ 小言の1つでもあると思ったのだがな」

「聞きたいのかしら？」

「いや、結構」

「仮面ライダーの存在は私にとっては不確定要素だ。その対抗策として用意できた駒が貴方なのよ。ここで朽ち果ててもらっては困るわ」

「ああ、わかっている。私としても未練を残したまま死ぬつもりはない」

「なら、さつさといくわよ」

女はそう会話を切り上げると豪邸の方へ足を進めた。ビルゲニアもその後を付いていく。その光景はさながら令嬢に付き従う従者のようにも見えた。

☆

「くあ〜く〜。・・・いい天気だなあ〜」

ある日の昼下がり。二課の医療施設の屋上のベンチで黒山陽介は空を眺めていた。

デュランダルの移送は中止になり、再び二課本部の地下に格納されることになった。それに合わせて二課本部の防衛システムの強化などが行われることになり、二課の作業スタッフ達はその作業に追われている。

ビルゲニアとの戦いで見た光の柱はデュランダルの輝きだった。それを覚醒させた響に驚くも、彼女がああ剣を振るわなければ自分はビルゲニアにやられていたかもしれない。なかった。

彼女には助けられたお礼を言ったが、当の本人はデュランダルの強大な力を迷いなく振るってしまったことに何か負い目を感じている様子だった。

自分の右足を見る。膝辺りまで巻かれた包帯が目に見える。ビルゲニアに斬られた箇所だ。傷そのものはもう塞がっているが、二課司令、風鳴弦十郎に安静にしていると、命令が下つているのでおとなしくしていることにした。また、強制睡眠司令の拳はごめんである。

とはいえ、やることのないもの問題だった。喫茶店ストーンに行けば、「怪我人は休んでいなさい」と、笑顔の店長に追い返されしまい、鍛練をすることも禁じられてしまった。ロードセクターの整備も終わってしまったのでいよいよやるのがなくなっていた。

だが、緒川慎次から連絡がきた。「お暇でしたら翼さんのお見舞いにかかれてはどうですか？」その提案に乗り翼のお見舞いに来たのだが、

「あ、え!? 黒山さん!? すすすみません! 5分、いや30分、時間を下さい!」

と、翼の病室からなにやら騒がしい音が聞こえてきたが、彼女の言うとおりに待つことにした。

そして現在に至る。そろそろ30分経つ。

「行くか」

ベンチから立ち上がると携帯に着信がきた。相手は翼だった。

「翼ちゃん? どうしたの?」

『あ、く、黒山さん。た、助けて下さい!』

「ッ!」

「どういふ状況？」

陽介は翼の病室に飛び込んだ。衣類などが散乱し部屋は荒れている。そこでは立花響と翼の父、風鳴八紘がいい笑顔で握手をしており、翼は両手で顔を覆ってプルプル震えていた。

「立花響君と言ったか？ なかなかわかつているじゃないか」

「いえ、そちらこそ。流石は翼さんのお父さんですね！」

「2人とも、もうやめてえ」

「・・・どういふ状況？」

陽介は混乱した。

「いやあ、君とも久しいな陽介君」

「ええ、お久しぶりです。八紘さん。しかし、さっきのは？」

「なに、同好の士という奴だ。彼女も翼のファンであると言うからね。少しばかり語り合っただけだ」

「な、なるほど」

翼の助けを呼ぶ声に焦ったが、真実は響と八紘による翼への誉め殺しであった。歌手、風鳴翼がいかに素晴らしいか、翼のあの曲のこの詞がいいとか、などなど、本人を前に2人は大いに盛り上がったという。

恥ずかしさから思わず助けを呼び、陽介が入室した一瞬で翼は響の

首根っこを掴み病室から立ち去った。陽介達も病室から移動し今は待合室にいた。

「ここ最近、広木防衛大臣の件もあり何かと忙しくてな。ようやく、時間がとれたので翼の見舞いに来たのだ」

「そうなんです。すみません八紘さん」

「何だね急に？ 先に言っておくが、翼が重症を負った責任は自分にもあるとかはなしで頼むよ」

「え？」

「翼の負傷は翼自身の行いが招いたものだ。あの子も覚悟の上で絶唱とやらを歌ったのだろう。もちろん、そのことについて軽く説教でもしてやろうかと思ったが……。先ほど、立花君と楽しそうに話しているのを見てね。久方ぶりにあの子が素の表情でいるのが見れたよ」
陽介が翼の病室から離れてすぐに響が来室。本人は入るかどうか迷っていたが、病室から聞こえてくる騒音に思わず入室してしまった。

部屋の惨状を目の当たりにした響は、片付けの手伝い（ほぼ9割、響が片付けた）をしていた最中に八紘が来室。

初対面の2人だったが、何故かすぐに意気投合。翼誉め愛合戦が勃発した。

「立花響君か、良い子だなあの子は。翼には良い後輩とファンがいることを知れたのは良かったよ」

「ええ。響ちゃんの明るさにはこっちも元気をもらえますからね」

「君にも感謝しているぞ、陽介君」

「え？ 俺ですか？」

「いっぞやの、私の不手際で、翼に下衆の魔の手が迫った時があっただろっ？」

「ああ、あの時の」

「天羽奏君が亡くなって、翼から笑顔が消えてしまい、仕舞いには私の件で翼には余計な心労をかけてしまった。私自身も翼との関係は良くなかったし、接し方も正しくはなかったのだろう。だが、あの時の君の言葉に私は衝撃を受けたよ」

「俺、そんな大層なこと言っちゃったっけ？」

「なに、私にとつては充分意味はあったさ。『家族の繋がりは血だけじゃない！ 過ごした時間と想う心があれば絆はできるんだ！』その言葉にハッ！ としたよ。例えば血は繋がってなくても、私は翼の父親なのだと。娘として想う気持ちに偽りなどない」と

「あの時は、あの政治家の言動に腹がたつて思わず」

「それを迷いなく言えることが素晴らしいと私は思うのだよ。あの一件以来、翼と家族してふれ合える機会が増えたのだ。だから、君にも感謝しているよ。ありがとう」

「うわあ!?! 頭を上げて下さいよ!?! 俺なんかそんな畏まらなくてもー!」

「1人の父親として礼を尽くしただけだよ」

「いや、でも」

「ふむ、君はもう少し相手の好意を素直に受け取ってもいいと思うが、まあ、いいだろう」

感謝を述べ、頭を下げる八紘に陽介は慌てた。彼は日本の安全保障を影から支える内閣情報官。つまりはかなりのお偉いさんである。そんな人物に頭を下げられるのは内心ヒヤヒヤである。

弦十郎も地位的にはかなり高いのだが、本人がフレンドリーであり、付き合いも長い為そんなに気にならないのだから、八紘の真面目な性格は「政府の高官」という雰囲気が出ているのでこちらも緊張してしまうのであった。

「・・・さて、私はそろそろ戻るとするよ」

「あ、お疲れ様です」

「うむ。君も気をつけたまえよ。いろいろとな」

「? はあ?」

何やら意味深な笑みを浮かべ八紘は立ち去っていった。

さて、自分はこれからどうするか。陽介は考えた。とはいえ、やることがないので帰るかなと思いい待合室を出る。

しばらく歩いてみると、先の通路から見知った人物、風鳴翼が歩いているのが見えた。

「あれ？ 翼ちゃん。どうしたの一人で」

「あ、黒山さん。立花がお好み焼きを買いに行くと、飛び出したので入口で待とうかと思いましたが」

「お好み焼き？ 何でまた」

「まあ・・・、お腹が空いていては良い考えが浮かばないと言って」

「ハハツ、響ちゃんらしいな」

「ええ、明るい子ですね。フフツ」

「お？」

「？ なにか？」

「いや、久しぶりに翼が笑つてるところを見たからね。うんうん、やっぱり翼ちゃんは笑ってる方が可愛いね」

「かわツ!? な、何を言いますか！ この身は防人としてあるもの、歌女として着飾ることはあれど私が、か、可愛いなどど！」

「可愛いよ。翼ちゃんは可愛い」

「~~~~ツ！ あなたは、もう！」

「ん？ そんなにおかしなこと言っているかなあ。なんなら他の人にも聞いてみる？ 翼ちゃんは可愛いって」

「やめてくださいッ！ いいですからッ！ ほんとッ！」

翼の笑顔を見て、正直な感想を述べる陽介。可愛いと言われ、顔を赤くしそれを否定しようする翼だったが、更なる追撃で顔の赤みが増してしまうのだった。

「ん？」

自分の通信機から着信音が鳴る。通信機を取り出す。

『はい。こちら陽介ですが』

『お、繋がりましたか』

『その声、蛇川か。何かあったのか？』

『ええ、ネフシユタンの鎧の少女が現れたんですよ』

『何ツ!？』

『今、響さんと戦闘中みたいなんで、援護に向かえますか？ 場所は

△○方面ですね』

『わかった。すぐ向かう』

「黒山さん、何が？」

「ネフシユタンの鎧の少女が現れたそうさ。今、響ちゃんが戦ってるらしい。・・・行ってくるよ」

「待って下さい！・・・私も連れてってもらえませんか？」

「・・・翼ちゃん。だけど、君はまだ」

「ええ、私はまだ万全ではありません。ですけど、立花と黒山さん、2人の援護くらいならできます。お願いです。連れてって下さい！」

「・・・なら約束がしてくれ、絶対に無理しない？」

「はい。今また無理をすればまた病室に逆戻りですからね。無理はしません、約束です。」

「・・・わかった。行こう！」

「はいッ！」

ネフシユタンの少女の襲撃。その報を聞き陽介は現場に向かうとした。翼が同行を求め、それをやめさせようとしたが、翼の意思は固かった。

その瞳に宿る輝きは今までの彼女とは違う決意のようなものを感じた。無理はしないという約束を交わし、2人は響の元へ急いだ。

☆

林が多い茂る中で2人の少女は激しく激突していた。1人は撃槍を纏い、1人は白き蛇の鱗を纏っていた。

撃槍を纏う少女、立花響は言う。

言葉が通じるなら、話し合えるなら解り合えると、

鎧の少女は反論する。

解り合える訳がないと、人間がそんなふうにはできてはいないと、互いの主張は交わらず、鎧の少女の激情が燃え上がる。

「気に入らねえ、気に入らねえ、気に入らねえ！ 気に入らねえッ!!」

わかっちゃいねえことをぺらぺらと知った風に口にするお前がぁ!!
・・・お前を引きずってこいと言われてたがもうそんなことはどうでもいい。お前をこの手で叩き潰す！ 今度こそ、お前の全てを踏みにじってやるッ!!」

「私だってやられるわけには」

「うおおおお！ ぶっとべえ！」

鎧の少女は飛び上がり鞭の先端にエネルギーを集束させる。かつて、翼に放った光球を響に打ち出した。響はそれを真正面から受け止める。

「もってけ！ ダブルだぁッ!!」

だが、鎧の少女の攻撃はこれで終わりではない。響が光球を受け止めている間にもう1つ光球を作成、それを響に叩きつけた。

2つの光球がぶつかり爆発した。

「お前なんかがいるから、わたしはまた・・・ッ!?!」

「はあああああ！ ——うあ!?!」

「この短期間でアームドギアまで手にしようってのか!?!」

鎧の少女は驚愕した。自身の技を受け無事であることにも驚いたが、爆煙の中で巨大なエネルギーを形にしようとする響の成長性にも息を飲まずにいられなかった。

「させるかよー！」

これ以上は不味い。鎧の少女は焦る。このままでは目の前のコイツが止まらなくなる。自身の手に余ってしまう。そうになったら、

あたしはまた、ひとりぼっちになってしまう。

鞭を振るい響の行動を阻害しようとするが、鞭は難なく掴まれてしまった。

(これじゃあダメだ。翼さんのようにエネルギーを固定できない) なら、どうする？

(エネルギーはあるんだアームドギアに形成されないのなら、その分のエネルギーをぶつけなければいいだけ！)

どうやってぶつける？

(あの時のヨウさんみたいに！)

脳内に深夜の公園で見た仮面ライダーBLACKの動きが再生される。今、響の脳内では急速に仮面ライダーの技の動きをトレースしていた。

(雷を、握りつぶすように！ そして！)

掴んでいた鞭を力の限り引つ張る。鎧の少女が引き寄せられる。

エネルギーを右拳に集中、勢いをつけ飛ぶ。空中で屈伸を加え、拳を突き出す。

(私自身が稲妻のようにツ!!)

響の意思に呼応するように腰部にあるブースターが点火。響は更に加速する。

(最速で、最短で、真っ直ぐに、一直線に！ 胸の響きを、この想いを伝えるために！)

「うおおおおッ!!」

撃槍、稲妻の如く。

そう、形容しうる状態になった響の拳が鎧の少女に突き刺さった。

圧倒的な破壊力を内包したその拳はネフシユタンの鎧に罅を入れ、鎧の少女を吹き飛ばした。

第十三話 揺れる弾丸

(・・・ぐはっ!?　・・・なんて、無理筋な力の使い方をしやがる。この力、あの女の絶唱に匹敵、いや、それ以上の馬鹿力か)

意識が一瞬とんでいたが、痛みにより覚醒する。響の渾身の一撃はネフシユタンの鎧の少女を捉え、確実に穿った。

その威力は直撃した部分の鎧が砕け散り、拳大の穴が空き少女の肌が見えてしまうほどだった。だが、

(・・・ぐがっ!?　・・・食い破れる前に、片を付けなければ・・・!?)
完全聖遺物であるネフシユタンの鎧には、無限の再生能力が備わっている。例え、鎧が粉々に破壊されようと再生してしまうのだ。

一方で鎧が粉碎され装着者が負傷した場合、ネフシユタンの組織が装着者の傷口に侵入したまま再生し、装着者の肉体を食い破り乗っ取ってしまうという危険性がある。

体の内側から伝わる不快感に耐えながら鎧の少女はふと思った。

何故、あいつが追撃してこない?

答えは直ぐに分かった。響は歌っていた。追撃をするわけでもなく、残心をしているかのように、ただ、歌っていた。

響は鎧の少女を倒したいのではないのだ。彼女はあくまでも戦いを止めさせたい。言葉が通じるなら戦う必要はないと思っている。

だが、鎧の少女にとってはそれは傲慢以外の何物でもなかった。

「お前、バカにしてんか!　あたしを、*“雪音クリス”*を!」

「そっか、クリスちゃん、ていうんだ。・・・ねえ、クリスちゃん、こんな戦いもうやめようよ。ノイズと違ってわたし達は言葉を交わすことができる。ちゃんと話をすればきつと解り合える筈、だって私達、同じ人間だよ!」

「・・・お前、くせえんだよ、ウソくせえ、青くせえ!」

うっかり本名を口にしてしまう。響は鎧の少女の名前を知れて少し嬉しくなったが、雪音クリスは更に怒りを燃やす。

鎧は再生中だが、そんなことはおかないなしに響に襲い掛かる。感情の赴くままに力を振るう。回避に徹する響。鎧の再生稼働が鬱陶しい。

そこでクリスは次の手段に打って出た。

「吹っ飛べよ！ アーマーパージだッ！」

「うわあッ!?!」

アーマーパージの言葉通り、クリスは纏っていたネフシユタンの鎧を豪快に脱ぎ捨てた。パージされたネフシユタンの鎧は弾丸のように射出され、地面や周りの木に突き刺さる。

そして……、

「Killiter Ichaiival tron……」

歌が響いた。

「この歌って……」

クリスが光に包まれる。そして彼女は赤い装甲を身に纏い姿を現した。

「見せてやる、＼イチイバル＼の力だッ！」

「クリスちゃん、私達と同じ……」

響はその姿は驚く。その姿は自分や翼と同じシンフォギアに他ならなかったからだ。

「唄させたな……」

「え？」

「あたしに歌を唄させたな！ 教えてやる、あたしは歌が大っ嫌いだッ！」

「歌が嫌い？」

クリスが叫ぶ。ネフシユタンの鎧の時とは違い、今度ははつきり顔が見える。

歌が嫌いという彼女の発言とその表情に怒りと悲しみを感じた響はどうしてかと理由を聞こうとした。

しかし、クリスは有無を言わさず行動に移した。

アームドギアらしき弓、いやボウガンを取り出す。そして赤い光の矢が形成され射出される。弓を引く動作などなく、光の矢は次々と生成され即座に発射される。

弾幕と言われるレベルの数の矢が次々と射たれ、響は逃げるように回避することしかできなかった。だが、クリスの攻撃は止まらない。

ボウガンらしきアームドギアをガトリングのような重火器に変形させ次は弾丸を撃つ。さらには、腰部の装甲が横に開くと、ズラリと大きな弾頭が並んでいた。

ミサイルだ。矢、ガトリング、ミサイルとクリスの感情の高ぶりに合わせるかのように攻撃の意思が上昇する。そして、ミサイルが一斉に発射された。

「いいっ!?!」

回避を許さぬ弾丸の嵐が響を包みこみ爆発が起こった。

「はあ、はあ、はあ」

高揚とした気分が少し落ち着く。これだけの弾丸を撃ち込めば、あのすつとろいのをぶっ飛ばしたはずだ。

そう思うクリスは爆発で起きた煙が晴れるのを待つ。煙が晴れるとそこには巨大な壁があった。

「・・・盾?」

「剣だ」

声が出た方に視線を向けると、クリスを見下ろすように風鳴翼がいた。

翼はアームドギアを巨大な剣に変形させ、地面に突き刺したのだ。盾と見間違うほどの大きさだ。その剣の柄に翼は立っていた。

「はっ、死に体でお寝んねと聞いていたが、足手まといを庇いにでもきたか」

「もう何も、失うものかと決めたのだ」

「翼さん……？」

「まったく、いきなり無茶してくれちゃって」

「ヨウさん!?! 2人ともどうしてここに？」

「連絡を受けてね。響ちゃんも大丈夫かい？」

「は、はい。大丈夫です」

剣の盾から姿を出し、仮面ライダーBLACKは雪音クリスと相対する。

「あの子は？」

「えと、雪音クリスちゃんです。ネフシュタンの鎧の……」

「ネフシュタンの？ だけどあの姿は？」

「それが、私にも、なにがなんだか」

「……彼女が纏っているのは、恐らくイチイバルのシンフォギアです」

「イチイバル？」

「簡単にいえば北欧神話に登場する弓のことです。何故、彼女がそれを持つているのか、それも疑問ですが……」

「ハッ！ 雁首揃えてゾロゾロと！ 飛んで火に入るってやつか」

「ジャキ！ つとクリスはガトリングの銃口を仮面ライダーBLACK

CK達に向ける。

「待った！ 何故、響ちゃんを狙う？ 君の目的はいったい——」

「うらああああッ!!」

BLACKの問いに答えず、クリスはガトリングを放つ。それに合わせてミサイルも再び発射した。

固まっていた3人は散開、辺りに爆発が起こる。翼が突出した。

「翼ちゃん!」

「無力化して、捕らえます!」

「ナメるな！ 病み上がり!」

翼を迎撃する為にクリスは弾幕を貼る。翼は真正面からクリスに突っ込む。迷いなく突き進み、弾幕を掻い潜る。

翼が剣を振るう。クリスは一度後ろに飛び退く。ガトリングを構える隙を与えまいと更に踏み込む。それに対してクリスは翼を飛び越える。

「なッ!？」

「まとめてぶつとべえッ!？」

空中で乱回転し弾幕をばらまく。ガトリング弾だけではなくミサイルも着いてくるオマケつきだ。

「ハアアアッ!？」

「あわわ!？」

「むん!・せい!？」

翼は剣で切り払い、響は慌てながらも全力で回避、BLACKは地面に手刀をし地面を盛り上げ即席の壁を作り防ぐ。壁は直ぐに破壊されたが、BLACKは無事だった。クリスは着地し、ガトリングを構える。

「テメエは念入りだ!？」

「くっ・・・ッ!？」

BLACKに狙いを定め、ガトリングを撃つ。BLACKは走り回り避ける。

しかし、回避していたか思えば急にクリスに突進しだした。

「ハッ!・観念したか!？」

直進してくるBLACKに弾幕を集中させる。BLACKは腕で顔を防ぎながらダッシュする。弾に対して回避をせずひたすら進む。体に弾を受けてもお構い無しだ。

「このおおおおッ!？」

突っ込んでくるBLACKに恐怖を覚える。最初は狙う手間が省けたと思ったが、何故こんな無理矢理向かってくる? 弾は当たってる。命中させた箇所からは火花が散る。

なのに、何故止まらない?

「おおおおッ!？」

「うわあああああ!？」

弾幕を突き抜けBLACKは跳ぶ。クリスは自分に襲い掛かるであろう衝撃に思わず目を瞑ってしまった。だが、次に感じたのは妙な衝撃だった。

確かに、クリスに衝撃は襲った。全身に伝わる衝撃だ。BLACKはクリスにタツクルを仕掛けた。だけど、そんなに痛みはない。目を開けると、目の前には赤い瞳があった。

「——ッ！ 離れろ！ この！」

「うお!？」

「どういうつもりだ、テメエ……！」

組み付かれていたことに驚き、BLACKを蹴飛ばし距離をとりガトリングを構える。

クリスは困惑する。何故、あんなことをしたのか。攻撃と言うにはお粗末なタツクル。理由を問い詰めようとしたら嫌な光景が見えた。

自分がさつきまでいた地点に異形が陥没していた。その異形はノイズだった。

「……な、何で……?？」

「また来るぞ！ 上だ！」

「な!？」

BLACKの言葉に反応し、とつさにその場なら飛び退く。空からノイズが襲ってきた。間一髪、直撃は避けられた。

「……まさか、お前」

BLACKが何故、あんな中途半端なタツクルをしたのか分かった。分かってしまった。

BLACKはクリスからの攻撃で最初は回避に徹しようとした。だが、クリスの背後にノイズが現れたのが見えた。

声をかけて危険を伝える時間がないと判断したBLACKはクリスをノイズから守るために突貫したのだ。イチイバルの銃弾を受けながら。

「ヨウさん！」

「黒山さん！ あなたも無茶しないでください！」

「だ、大丈夫だよ、これくらい」

「……」

「あだだだだ!? 翼ちゃん、アームドギアでツンツンしないで!」

現れたノイズを素早く殲滅し、響と翼はBLACKの元へ駆け寄る。クリスをノイズから守ろうとした彼の行いは良いものだとは思う。

しかし、そのために直ぐに体を張るのだ。平気だと言う彼に響はじどくつと見つめ、翼はアームドギアの剣先で僅かにBLACKの体をつつく。

銃弾を受けて痛いですむのはおかしいのだ。いくら、改造人間としての強固な肉体を持っている彼でも、身近な人が銃撃を受けている姿を見て、2人の少女は内心ヒヤヒヤしていた。

それでも、なにかを守る時の彼の行動力には敵わないとも思うのだった。

「なんでだよ……」

「だけど、その行動を理解できない少女もいた。

「バカかおまえは! あたしは敵だぞ! 敵を守ってダメージを受けるバカがどこに——いるなあ! 目の前に! クソ!」

怒ればいいのか、呆ればいいのか、渦巻く感情にクリスは困惑する。

「いまさらまもったっておせえんだよ……」

「……君は敵じゃないよ」

「ツ! ふざけんな! あたしは!」

「命じたこともできないなんて、あなたはどこまで私を失望させるのかしら……?」

緊迫する状況の中で、この場にいる全員に声が聞こえた。

全員が声の主を探す。いち早くその主を見つけたクリスはその人物の名を口にした。

「フイーネ!」

(フイーネ? 何者だ?)

海が見える堤防に、1人の人物がただずんでいるようにそこにい

た。

黒いサングラスを装着し、着ている服や帽子も黒で統一している。体型や長い金髪が見えることからその人物は女性だということが分かった。

「こんな奴らがいなくなつたつて、戦争の火種くらいあたし1人くらいで消してやる！ そうすれば、あんたの言うとおり人は呪いから解放されて、バラバラになった世界は元に戻るんだろう!？」

「ふう……、もうあなたに用はないわ」

「な、なんだよそれ!？」

クリスの言葉など聞く気がないのか、黒い女性は一方的に会話を打ち切る。

女性は手を広げると、その中に光の粒子が集まる。何かを集めているようだ。光が集まり終わると、もう片方の手に持っていた杖を取り出した。

以前、クリスが持っていたノイズを召喚する杖だ。女性は大量のノイズを召喚した。

「今日のところはノイズが相手をしてくれるわ。また会いましょうね、ガングニールの装者さん」

「待てよ、フィーネエエツ!!」

ノイズを召喚するとこの場から去る謎の女性、クリスは叫びながらその女性を追いかけていった。

「待って、クリスちゃん!」

「落ち着け立花、この大量のノイズを放っておくつもりか？」

「それは……」

「今はノイズの方をなんとかしよう。あの子のことはそれからだ。いいね?」

「……はい」

仮面ライダーと装者はノイズ殲滅のために動きだした。

第十四話 迫る者

雨が降る。

明け方の曇天の中、雨が降っていた。人通りの少ない路地裏で戦闘している複数の影があった。

1つの影は少女だ。赤い装甲を身に纏い、両手にはボウガンのような弓を持ち、光の矢を放ち、自分を追ってくる別の影、人の天敵たる異形、ノイズを撃ち抜いて煤に還していた。

何でこんなことになってしまったのだろう。

少女、雪音クリスは、先ほどおこってしまった事を思い出していた。

「フィーネツ！ いるんだろ！」

自分達が拠点にしている豪邸に帰ってきたクリスは扉を勢いよく開けた。

「あたしが用済みってなんだよ！ もういらなくてことかよ！ あんたもあたしをモノのように扱うのかよ！」

「……………」

部屋の奥にいる女性、フィーネに向かって叫ぶ。誰か電話しているようだったか、そんなことを気にしている余裕はクリスにはなかった。

「頭ン中グチャグチャだ！ 何が正しくて何が間違ってるかわかんねえーんだよ！」

「イヒヒ！ そりゃあお前が間違ってるんじゃないの？」

「ッ!? だれだ、お前は!？」

そこにいたのは見知らぬ男だった。

サングラスを描けた茶髪の男。見るからに“チャライ”と表現できそうな男だった。

「フウ・・・どうして誰も、私の思い通りに動いてくれないのかしら」
謎の男に気をとられ、フィーネが反応したかと思えば、フィーネはノイズを操る杖、“ソロモンの杖”を取り出し、クリスの周りにノイズを召喚した。

「さすがに潮時かしら」

「な、なにがだよ!？」

「そうね。あなたのやり方や争いを無くすことなんて出来やしないわ。せいぜい1つ潰して、新たな火種を2つ3つばらまくくらいかしら」

「あんたが言ったんじゃないか！ 痛みもギアも、あんたがあたしにくれたものだけが——」

「私が与えたシンフォギアを纏いながらも、毛ほどの役に立たたないなんて・・・、そろそろ幕を引きましょうか」

失望と落胆、呆れたように言うフィーネは光を纏う。

「・・・その光は、ネフシユタンの・・・!？」

「私も、この鎧も不滅。未来は無限に続いていくのよ」

光が晴れると、ネフシユタンの鎧を纏ったフィーネが現れた。ただし、クリスが着用していた時とは色や形状が変化していた。

色は白銀から黄金に、形状も身体の局部だけを守るような形状になり、鎧と言うにはあまりにも攻撃的な印象になった。

「カ・デインギルは完成しているも同然。もう、あなたの力に固執する理由はないわ」

「カ・デインギル・・・? そいつは・・・?」

「あなたは知りすぎてしまった・・・フフツ」

フィーネは怪しく微笑むとソロモンの杖を構える。ノイズがクリスに襲い掛かった。

なんとかノイズの攻撃を回避。攻撃を止めさせようとフィーネの顔を見るが、その顔はかつて自分を痛めつけた“大人”とそっくりだった。

目頭が熱くなった。

「ちきしょお・・・、畜生おおおおッ!!」

クリスはその場から逃げるごときか出来なかった。

「っだあ!」

最後のノイズを撃ち抜く。息苦しい、体が重い。一晚続いたノイズとの逃走劇がひとまず落ち着く。

「お〜お〜、頑張るね〜」

「ッ!?!」

上から、建物の屋上からクリスを見下ろす影が1つ。フィーネの豪邸にはいた男がいた。

「おまえは・・・」

「あれだけのノイズを1人でやっちゃまうなんて、さすがはシンフォギア装者ってところか」

「なんなんだお前! フィーネとどういう関係だ!」

「イヒヒ! あのお方は俺様の新たなご主人様でね」

「なんだと!?!」

「イヒヒ！ ノイズだけで事足りるかと思ったが、俺様の出番があるようだな」

男の体が膨れ上がる。膨張し、人の体が別の何かに変わる。

動物的な黒い体毛、大きな口に、そこから伸びる牙。長い耳と豚のような面構え、両腕を広げれば大きな膜が広がった。

「か、怪人？」

「イヒヒ！ そうとも！ この俺様！ コウモリ怪人のミナガ様が、お前の命を食ってやるよ！」

「くっ……、このお！」

堂々と名乗りを上げる怪人にクリスは矢を撃ち込む。コウモリ怪人はその場から空へ飛んで回避。

空を自由に飛び回るコウモリ怪人に狙いをつけようとするが、建物の影に隠れて見えない。建物の屋上へ飛び上がり、遮蔽物がない状況にして再び狙いを定める。

「……くそッ、狙いが……」

頭が痛い。視界がぼやける。

ほぼ一晩、休むことなく戦い続けたせいでクリスの疲労は限界に到達しているようとしていた。

「んなろおおおおッ！」

だが、泣き言を言っている場合ではない。

なんとか力を振り絞り、アームドギアをボウガンからガトリングに変形、腰部の装甲を開きミサイルを準備、ありったけの弾幕をコウモリ怪人に放った。

ガトリングで動きを制限させ、追尾するミサイルで墜とす。それで終わりだと思った。

「イヒヒ！ カアアアアッ！」

「なっ!？」

動きの制限はできた。だが、ミサイルは当たらなかった。

コウモリ怪人は奇声を上げながら口から爆音の衝撃波を放った。それに包まれたミサイルはコウモリ怪人に命中することなくすべてが空中で爆散した。

空が爆煙で包まれる。爆煙を突き抜ける影があつた。コウモリ怪人だ。

両足の爪を大きく広げクリスに掴み掛かろうとする。クリスはその場から飛び退く。建物の屋上が陥没する。屋上に着地したコウモリ怪人に銃口を向ける。コウモリ怪人が再び跳躍、クリスの目の前にまで接近した。

「イヒヒヒャア！」

「がっ」

コウモリ怪人が跳び回し蹴りをする。クリスはガトリングを盾にしガードするが、ガードごと押しきられ、蹴り飛ばされてしまう。

別の建物の壁に激突し、そのまま地面に落ちた。

そこまでだった。

クリスは遂に気を失ってしまった。

シンフォギアが解け、クリスを守る鎧も失くなってしまった。

怪人が舞い降りる。

「イヒヒヒ！ 死んだ？ 死んだ？・・・ いやゝ残念。まだ死んでないよこいつ」

うつ伏せに倒れているクリスに近づく。倒れているクリスを足で仰向けに変える。

「イヒヒ、イヒヒ！」

薄気味悪い笑い声をだしながらコウモリ怪人はクリスの体を見る。なめ回すようにじつくりと。

「ガキの割には旨そうな肉付きだな。へっへっへ」

舌舐り。薄汚い獣欲がクリスに迫る。

「待てッ！」

「あ、あ、ん?!? なん——ッ!？」

怒声と共にコウモリ怪人の視界の隅に何かが写った。
ポリバケツだ。

自身に迫ってくるそれだが、コウモリ怪人にとってはなんの脅威にもなりえない。

虫を払うかのようにポリバケツを腕で払いのける。

次の瞬間、拳が顔面にめり込んだ。

「ゲハッ!？」

痛覚が脳髓を駆けた。

「チッ………。テメエは」

自分を殴り付けた正体に目を向ける。黒髪で宝石のような紅い目をした男がそこにいた。

「テメエは……、黒山陽介。何故ここに？」

「それはこっちのセリフだ。爆発音が聞こえて、来てみたら……」

男、黒山陽介は周辺を見る。

目の前には怪人。かつて自分が戦ったゴルゴムの怪人コウモリ怪人に似ているが、細部が違う外見をしていた。

自分の後ろには少女が1人倒れている。

(この子は……)

倒れている少女は雪音クリス。つい数時間前に二課でこの少女についての情報を確認したばかりだった。

失われたと思われた第二号聖遺物イチイバルの適合者であり、完全聖遺物であるネフシユタンの鎧を纏ってクモ怪人を引き連れ、響と翼を襲撃した少女でもある。

その彼女が何故、怪人に襲われてるのか。あのフィーネとかいう女の仲間ではなかったのか。疑問がつきなかった。

「お前、この子に何をした？」

「イヒヒ！ お前には関係ないよ。そこをどきな！」

コウモリ怪人がその場から飛び上がる。

「変……」

「させるか！ キイイイイイツ!!」

「があ!？」

仮面ライダーに変身しようとした陽介だったがその行動は阻まれた。

コウモリ怪人が発した奇声は、思わず耳を塞いでしまうほどの音だった。生理的に嫌悪感を抱くような音、例えるなら黒板に爪をたてた時のような音だった。

耳を塞ぎ、完全に無防備になってしまった陽介は、次の瞬間にはコウモリ怪人に蹴飛ばされる感覚が伝わった。

腹部を蹴られ、建物の壁が少し凹む程の衝撃。肺の中の空気が全て吐き出される。

「かはっ……」

「イヒヒ！ お前の相手などをしている暇などない。サラバだ！」

壁に打ち付けられ、膝をついた陽介のことなど眼中にないのか、コウモリ怪人はクリスの胴体の辺りを両足で掴むと、その場飛び立った。

建物よりも高く飛び、これからクリスをどう弄ぶか、下衆な妄想を巡らせる。

（ああ、楽しみだあ。始末した証拠として、首は持ち帰るとして、そうだなあ……、足からイクか、手からイクか、ゲヒ、ゲヒヒ！）

飛んでる自分に不意の衝撃が襲った。

「行かせるか!」

「イヒ!? テメエー!」

コウモリ怪人の膝に仮面ライダーBLACKが飛び付いた。

コウモリ怪人は飛び去った時に、陽介からは完全に目を離れた。一人掴んでいるとはいえ20メートル以上も上空に飛び立てば、只の人間なら為す術はない。

だが、陽介は改造人間であり仮面ライダーだ。目を離れたその隙に

変身し、勢いをつけ建物の壁を走り、コウモリ怪人へジャンプした。その結果、コウモリ怪人に追い付くことができた。

「離せ！ テメエー！」

「離す、かよおー！」

「ゲピツ!?!」

クリスを掴み、仮面ライダーBLACKにしがみつかれ、重さに耐えきれず、高度を落とすコウモリ怪人。

何とか落ちないように激しく翼を動かす。BLACKを振り落とそうするが、今、バランスを崩せば地面に落ちてしまうので怒鳴ることしか出来ない。

BLACKはコウモリ怪人の膝を掴みながら振り子のように体を動かし、コウモリ怪人の顔面につま先を叩きこんだ。

コウモリ怪人の態勢が崩れ、クリスが空中に投げ出される。

BLACKはコウモリ怪人から手を離し、クリスを追う。落ちるクリスに追い付き、しっかりと抱き寄せ、地面に着地した。

「大丈夫か!?!」

返事はない。

クリスは気を失ったままだった。

「テメエ．．．よくも．．．」

「むう．．．」

「この俺様の顔面に2発も入れやがって．．．許さねえ．．．テメエも殺してやる!」

クリスを奪い返され、己のプライドを傷つけられたコウモリ怪人の怒りのボルテージが上がる。

BLACKとしてもこの怪人を放っておく訳にはいかないが、自身の腕の中にいる少女の安全をまず確保したかった。

このまま彼女を抱いたまま戦う訳にはいかない。しかし、BLACKの事情などコウモリ怪人にはどうでもいいことだ。

BLACKに襲い掛かろうと空中から攻撃を仕掛けようとしたコウモリ怪人だが、その動作を途中で止めた。

「．．．．．チツ」

視線をあらぬ方向に向けたかと思うと、舌打ちをし、コウモリ怪人は何処かに飛び去っていった。

「何だ・・・？」

コウモリ怪人が急にこの場を離れたことに疑問を抱く。建物の隙間から光が射し込んで来た。朝日だ。

「夜行性か、太陽が苦手か、どっちにしる奴は逃げたか・・・」

周囲に敵意などを感じず安堵する。変身を解除した。

「さて、この子の応急手当をしなきゃな。まずは、何処か雨風をしのげる場所に」

「陽介さん？」

「ッ！—— 未来、ちゃん？」

「こんなところで、何、してるんですか？」

「えくと・・・」

傘をさし、こちらを見つめる1人の少女、小日向未来がそこにいた。その笑顔には、何故か有無言わさない迫力があり、陽介は思わず強ばった。

第十五話 私の我儘

「うえくん、やめてよ〜」

「いいじゃんか！ 先っちょだけだよ」

「おい、あんまり暴れんなよ」

とある何処かの公園に子供達がいた。だが、彼らは仲良く遊んでいようではなかった。

1人の少女を数人の少年が囲んでいる。少女は幼いながらも整った顔立ちをしており、おさげにした銀色の髪が彼女を幻想的な雰囲気仕立て上げている。

だが、その少女は泣いていた。

「なあなあ、ほんとうなのか？ こいつの髪の毛を持ってくれば小遣いがもらえるなんて？」

「へへ、ほんとうだよ。この前から噂になってる『髪おじさん』に会ったんだ。こいつの髪を持ってけば1万円もらえるんだぜ！」

「マジかよ！ 大金持ちじゃん！」

「やだ！ やめてっば！」

「いいからおとなしくしろ！ 髪なんて、放っておいても勝手にまた生えるだろ」

「やだあ、やだあ！」

少年達の勝手な言い分に少女は必死に抵抗する。しかし、幼い少女の力では背丈も年齢も上の少年達に対抗できるわけがなかった。

リーダー格と思われる少年がハサミを持ち少女の髪の毛を切ろうとする。

少女は自分の両親が大好きだ。父は日本人で、母は外国人だ。ハーフであり、母の血を濃く継いだ彼女は将来は母親に似た美人になるだろうと、両親に言われていた。

少女も自分が母親のような綺麗な大人になれると、未来に希望を抱

いていた。しかし、そんな彼女の希望は今、切り裂かれようとしていた。

たかが髪の毛と思うかも知れないが、少女にとってはとても大切なことであった。

(ああ、いやだ、いやだ)

体を押さえつけられ身動きがとれない。髪の毛を掴まれる。身の毛がよだつほどの嫌悪感が少女の全身を駆け巡る。迫るハサミが物語に出てくるような死神の鎌に見える。

(助けて、誰か、助けてえ・・・)

怖くて、悔しくて、涙が溢れる。最早少女は誰かが助けに来るのを祈るしかなかった。

だが、そんな都合よく助けがくるなど――

「オオオリヤアアアツ!!」

「へぶう!?!」

「ああ!?! ゴウリくんが!?!」

「・・・ふえ?」

少女の目の前に迫っていたリーダー格の少年が何者かに蹴飛ばされた。

「オマエラ、何してんだ!」

「ヒエ」

突然現れた少年。黒い髪と黒い瞳の少年、少女よりも年上だと思われる少年だった。

少年の睨みに少女を押さえていた少年達は後ずさる。解放された少女を素早く抱き抱えてその場から少し離れる。

「大丈夫か？」

「……グスツ」

「やいやいオマエラ！ この子に何したんだ！」

「ま、まだ何もしてないよ」

「なんだと!? なら何でこの子は泣いてんだよ！」

「そ、それは」

「どんな理由があろうと、誰かを泣かせるなら、俺が相手ニブツ」

意気揚々と喧嘩腰になる少年の脳天に辞書が叩き込まれた。

「落ち着け、このバカ」

「ぐおくくッ!? ナニするんだ！ エイタ！」

「落ち着けと言った、このバカ」

「2回も言うな！」

辞書を片手にツンツンと刺々しい髪の毛の少年が現れた。何だか落ちていた雰囲気のある少年だと少女は思った。

「ったく、急に飛び出したと思ったら、また、面倒事に首突っ込みやがって」

「だってよ、あの子が泣いてたから」

「だからといって問答無用で相手を蹴飛ばすなよ。……見ろ、あちらさんもヒートアップしちまつてる」

「いてて、何しやがるんだオマエラ！」

「あくすまん。このバカが先走ったことは謝る。だが、こちらにも理由が知りたい。あの子をどうするつもりだったんだ？」

「うるせえ！ ウニ頭！ 先にそっちが手を出したんだろうが！」

「あ」

「……すまない。今、何て言ったんだ？」

「あん？ 先に手を出した」

「もつと前」

「……ウニあた」

「誰が海産物だゴルア！」

「ぐわあ!？」

「うわあ!？ ゴウリくんの顔面に辞書が!？」

「自前の剛毛だ、クソツタレ!」

「おおおおお!? こいつらゆるせねえ! お前ら、やっちまえ!」

「へへ、かかってこいや!」

「.....」

あれよあれよという間に少年達の乱闘が始まってしまい、少女はポカーンと置いてけぼりになってしまった。

そんな時、ツンツンと少女は肩をつつかれる。びっくりしつっ後ろを振り向くと、自分と同じくらい背丈の少女がニコニコしながらそこにいた。

「ねえねえ、あなた、大丈夫?」

「え、あ、うん」

「そっか、.....じゃあ、ちよつとこっちにきて」

「え? うわわ」

なんだかふわふわしている印象を受ける少女に手を引かれ、穴が空いているドーム状の遊具の中に2人の少女は移動する。

穴からヒョコつと顔を出し、乱闘の状況を見守る。5対2、自分を助けに入った少年達は人数差の不利に屈することなく立ち向かっていった。

「ねえねえ、あなた、お名前は?」

「え?クリスマス」

「そっか、クリスマスちゃんか。あ、ワタシはね、タツコっていうの。よろしくね」

ふわふわの少女はタツコと名乗り、ニコニコと笑みを浮かべながら少年達を指差す。

「えつとね、あつちのツンツン頭が“エイにい”で、あつちの元気なのが“ヨーにい”なの」

タツコが少年達それぞれの名前を覚えてくれる。その中でクリスマスは、“ヨーにい”と呼ばれた方の少年に視線を集めた。

「なんで、.....なんで助けてくれたの?」

「ん？ ヨーにいのことだから、あんまり深く考えてないと思うけど、そうだなあ……」

「……」

「ヨーには助けたいから助けようとしたんじゃないかな。だって、ヨーには『ヒーロー』だからね」

「ヒーロー？」

「うん！ そう！」

タツコは笑顔でそう言った。

クリスは再び『ヨーに』に視線を集める。

いつの間にか相手側の人数が増えているが、そんな中でも少年は堂々としていた。

逆境に対しても臆しないその姿はクリスの心に焼き付く姿だった。

この日、雪音クリスは不思議な少年少女達と出会った。

☆

「ん……」

目が覚めた。少女、雪音クリスは体を起き上がらせる。
何だか懐かしい夢を見たような気がするが、もう思い出せない。

「(っ)は・・・?」

自分の状況を確認する。

何処かの民家なのか畳が敷かれた部屋。その中央に布団が敷かれ、
自分はそこで眠っていたようだ。

さらに周りを見渡せば、対面して正座している男と少女がいた。

「・・・はあ?」

妙な光景にクリスは思わず声をあげた。

☆

時は少し遡る。

コウモリ怪人が撤退し、雪音クリスを保護した陽介だったが、小日向未来と遭遇した。仮面ライダーBLACKから人間に戻る瞬間を見られたので、もはや、言い訳のしようがなかった。

しかし、未来はまず、陽介の腕の中で眠るクリスの様子を心配し、ひとまずクリスの手当を優先することになった。

お好み焼き店である “ふらわー” のおばちゃんに軽く事情を説明し一室を借りて、クリスをそこに寝かせることが出来た。

クリスの衣服は雨で濡れ、汚れてしまっていたので寝ているクリスの着替えを未来に任せた。

そうして、一息ついた時、

「陽介さん、お話があります」

「・・・うん、わかった」

真剣な顔で未来は陽介に詰め寄った。

未来は知りたかったのだろう。自分が知らない所で何がおきているのか、知らずにはいられなかった。

一応、未来は先日、響がシンフォギア装者であることを知ってしまい、そのことについての守秘義務などの話は二課から受けていた。しかし、未来は自分の知りあいから直接聞きたかった。

床にちよこんと未来が正座し、陽介もそれに合わせ正座する。

「さてと、何が聞きたい？」

「じゃあ、まず・・・、陽介さんは仮面ライダーなんですね」

「うん」

「・・・そうですか」

「あんまり、驚かないんだね」

「驚いてますよ。響もシンフォギアっていう力を持つちゃったと思ったら、陽介さんが、まさか仮面ライダーだったなんて・・・私だけ、蚊帳の外だったんですね」

「それは・・・」

「最近、陽介さんだけじゃなくて、響の様子もおかしいと思ったら、まさか、2人ともノイズと戦ってるなんてね」

「未来ちゃん・・・」

「これも人助けですもんね。ノイズと戦えるなんて凄いことですね。私も友人として鼻が高いですよ・・・でも・・・でも、やっぱり私は、嫌だなあ・・・」

「・・・」

「2人がノイズと戦って、人々を護ってくれること。それはとても立派なことだと思います。だけど、それを秘密にしたこと。心配もさせてもらえないこと・・・。ううん、そうじゃない。私が一番嫌なの

は、私が何も出来ないこと」

「未来ちゃん、それは」

「わかってますよ。私は響や陽介さんみたいな特別な力なんてない。何も出来ないのは当たり前なのに、それでも、何かしてあげられることがあると思うのに、それも思い付かなくて・・・ほんと、何も出来ない自分が嫌になりますよ・・・」

「そんなことはないさ」

「いいですよ、慰めなんて」

「・・・未来ちゃん、難しい事情があつて君に秘密にしていることは本当にはすまないと思つている。だけどね、君が何も出来ないなんてことはないよ」

「何で、そんなこと」

「君がいてくれる。それだけでいいんだ」

「それだけつて・・・、何もするなつてことですか?」

「違う違う。うくん、何て言つたらいいか・・・。前に響ちゃんが言つてたんだ『未来は私の陽だまり』つて」

「・・・それが、どうかしたんですか?」

「響ちゃんが頑張れるのは未来ちゃんが帰る場所に居てくれるからだと思うんだ。・・・戦いで疲れた心を癒せるのは、帰れる場所、待つてくれている人、それがあるだけで人は頑張れると俺は思つてる。だから、信じて待つてほしい。響ちゃんが未来ちゃんの所に帰つてくることを」

「・・・なら、陽介さんは?」

「え?」

「陽介さんにはあるんですか? 帰る場所」

そう言われ、陽介は少し考える。そして、少し気恥ずかしそうに答えた。

「俺さ、未来ちゃんの笑顔が好きなんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふえ!」

ボツ!と、未来の顔が赤くなる。

「あのあのあのそう言つてもらえるのは正直嬉しいですけど私には響

「がいますしいや陽介さんが嫌ってことでは——」

「未来ちゃんが響ちゃんを美味しく食べてる時の笑顔が好き。響ちゃんがゴハンを美味しく食べてる時の笑顔が好き。ストーンで、穏やかにしているお客さんの笑顔が好き。俺は、人が笑顔が好きなんだ」

「——ああ、そういう・・・」

「? どうしたの?」

「い、いえ、なんでも!? んんっ! どうぞ」

咳払いを1つし、未来は続きを促す。

「まあ、つまり俺は、人々が笑ってすごせる場所を、その自由と平和を守りたい。その場所が俺の帰れる場所だと思うんだ」

「・・・はあくくく」

「あれ? 何故そこでため息?」

「いえ、陽介さんはお馬鹿さんだなって」

「ひどくない!」

「だけど、陽介さんは陽介さんなんです」

出会った時から変わらぬ青年の在り方に未来は感心しつつ、呆れた。守る為に戦う、そのためだったら平気で無茶をする。

そんな彼に自分が出来ることは・・・

「よし! 陽介さん、指、だしてください!」

「ん、こころ?」

未来は小指を突きだし陽介に向ける。彼女の意図をなんとなく察した陽介も小指を突き出す。2人の指は結ばれた。

「約束してください」

戦う力のない少女は告げる。

「私は待ちます。帰る場所で待っています。だから、必ず帰ってきてください。でないと、赦しませんから」

「未来ちゃん・・・」

「いいですね?」

都合のいいことを言っていると未来は内心自覚する。だが、自分に出来ることは「待つ」だけだ。自分にも戦う力があればと思うが、そ

れは叶わぬ願いだ。

なら、このくらいのわがままは言おう。このお人好しの帰れる場所くらいには自分もなれるはずだから。

「・・・わかった。必ず帰るよ。約束だ」

「ええ、約束です」

陽介は少し困ったような顔しながらも未来と約束を結んだ。彼女の願いを無下にはできない。

「・・・えくと・・・」

指切りを終え、2人は正座したまま見つめあう。なんとも言えない時間が流れた。

気まずい、というより気恥ずかしい。

(あれ・・・?)

そこで、小日向未来は自分の発言した言葉を思い出す。約束を交わした言葉はまるで、

大切な人を、恋人を待つようなニュアンスを含んでいるのではないか？

「あ・・・」

そう思ってしまった瞬間、顔が熱くなるのを感じた。

チラリと彼の顔を見る。出会った頃から変わらぬ黒い髪に宝石のような紅い瞳。さつき触れた指も、響や自分のとは違いゴツゴツしていた。

でも、イヤな感じではなかった。むしろ、暖かくてもっと感じていたいような・・・

「・・・はあ？」

そこで、眠っていたはずの少女の声が響いた。

雪音クリスが目を覚ました。

どうやら、こちらが思っているより元気そうで安心した。

クリスが元々着ていた衣服も洗濯が終わったので、今は未来に任せ、陽介はふらわーの台所を借りて、おにぎりを握っていた。

陽介が勤務している喫茶店ストーンのメニューにおにぎりがある。そのおにぎりは陽介が作っているのだ。元々、おにぎりを作るのが得意で、お客さんにも好評だったので、今ではすっかりストーンのメニューになっている。

起きたクリスのお腹がいさつしてきたので、彼女の為におにぎりを作っているというわけだ。

「よし、こんなものかな？」

とりあえず、三個、おにぎりを作った。

それぞれ、具なし、鮭入り、ごま塩と分けている。彼女の好みがあればいいが……

けたたましいサイレンが鳴り響いた。

「この警報はッ!?!」

外から店の中まで鳴り響く大音量を聞き、急いで外に出る。外に出れば、町の住人達が急いで避難していた。

陽介に続いて未来とクリス、ふらわーのおばちゃんも店から出てくる。

「な、なんだよこの騒ぎは!?!」

「ノイズが現れたの！ 警戒警報を知らないの!? とにかく、急いで逃げようッ！」

「ノイズが・・・? くッ！」

大慌てで逃げる人々の様子を見て、クリスは表情を歪める。そして、彼女は人々が逃げる方向とは逆の方向に向かって走り出した。

「あ、クリス！ どこに行くの!? そっちは——」

未来の呼び声は届かず、クリスは人混みの中に飲まれていった。

「・・・未来ちゃん、君は、おばちゃんと一緒に避難するんだ」

「・・・陽介さん・・・、行くんですね？」

「ああ」

「ツ・・・わかりました。クリスのこともお願いします」

「任せて」

「約束、守って下さいね」

「うん、行ってくるよ」

陽介はクリスの後を追い、人混みの中へ消えていった。未来は消えていく背中を少し見つめると、ふらわーのおばちゃんと一緒に避難し始めた。

走る。人混みを掻き分け、先に走っていった少女を追う。やがて、人混みから抜け出す。さっきまで人が溢れていたとは思えないほどの静けさに町は包まれた。

少女、雪音クリスを探すため更に加速する。すると、ノイズが群がっているのが見えた。ユラユラと揺れるノイズ達の隙間から見える人物、雪音クリスの存在が確認出来た。

「変身ッ!!」

ノイズに囲まれている少女を救うためにその身を変える。

走る勢いを殺さず、勢いよくノイズ達を飛び越える。雪音クリスと

ノイズの間に割ってはいる。

クリスは目の前に現れた仮面ライダーに驚く。ノイズ達は仮面ライダーが現れたことを気にするわけもなく自分達に与えられた命令をこなす為に突撃する。

通常ならばノイズの突撃に仮面ライダーも少女も諸とも炭化する。だが、

「アエエエイヤアツ!!」

仮面ライダーBLACKが蹴りを振るう。鎌のような一撃はノイズ達を風ぎ払った。

変身した時、BLACKは素早くキングストーンフラッシュをノイズ達に浴びせていた。一定時間とはいえ、位相差障壁を無力化できればノイズを屠ることは可能なのだ。そうなれば、仮面ライダーBLACKに砕けぬものはない。

「大丈夫かい?」

とりあえず、目の前にいたノイズ達を殲滅した。クリスの安全を確認すべく振り向く。クリスに近寄るが、彼女は両手をつきだし仮面ライダーBLACKを押し退けた。

「余計なことすんな! お前に助けられる覚えはない!」

「俺は、ただ・・・」

「うるさい! 何がヒーローだ! お前が本当にヒーローなら、何で・・・、何で!? パパとママを助けてくれなかったんだよツ!!」

「ツ!・・・」

「・・・あ、・・・ちくしょう」

息を荒げながらクリスは叫んだ。ハッキリとした拒絶の意思、自分の中にあつたヒーローに対する怒りを爆発させた。それを叫んだところで意味がないとわかりつつも、

クリスはすぐさまシンフォギアを纏うと逃げるようにその場から離脱していった。

仮面ライダーBLACK、黒山陽介はその場で立ち尽くしてしまつた。離れる少女の背中を目で追うことしか出来なかった。

こういうことは今までも何度もあつた。

ゴルゴムとの戦いでも、ノイズとの戦いでも、間に合わないことがあった。助けられない命があった。

『どうしてもっと早くきてくれなかったの』

『化物同士の戦いに巻き込むな』

『お前がいるからこんなことになったんだ』

被害にあつてしまった人々の怨嗟の声を何度も受けた。

だけど、それで止まることはできない。止まることは許されない。

なによりそれは、自分が許さない。

雪音クリス

あの子はどんな顔をしていた？ 怒りに歪んでいた。それもある。

だが、それよりも、

悲しそうな顔をしていた。泣きそうな顔をしていた。

そんな子をこのまま放つておく？

否、そんなことはあり得ない。

自分が仮面ライダーだからだけではない。

ただ、単純に黒山陽介は助けたいと思った。雪音クリスには余計なお世話かもしれないけど、放つてはおけない。ならば、ここで立ち尽くしている場合ではない。

「よしー」

決意を固めクリスを追いかける。

これは我儘だ。

助けたいと思ったから助ける。実に身勝手な想いかもしれない。だけど黒山陽介は走り出す。この想いを止められない。もう、悲しい想いはしたくないし、させたくないから。

第十六話 ヒーローごっこ

「♪」

銀髪の少女が歌を唄う。夕暮れの公園で唄う。観客は3人、自分と同世代の女の子が1人と、自分より年上の少年が2人。

少女は一生懸命唄う。瞳を閉じ両手を握りしめながら、心を込めて、想いを込めて、目の前にいる3人の観客の為に。

「・・・フウ」

1曲を唄い終え、銀髪の少女、雪音クリスは短く息を吐く。恐る恐る瞳を開けると観客が拍手で出迎えてくれた。

「すごいすごい」

「おお！　なんかこう・・・、こう、すごいな！」

「綺麗な声だな。聞いてて心地いいと思うぞ」

三者三様に感想を述べる。内2人は上手く言葉には出来ていないが喜んでいることはクリスには伝わった。それがとても嬉しかった。

この少年達と出会って一週間が経過していた。

クリスと同世代の女の子、タツコ。どこかふわふわしているマイペースでのんびり屋の少女。

タツコの実兄で、エイにいと呼ばれる少年。ツンツンと刺々しい頭髪を持つ大人びた雰囲気を持つ少年。いつも何か難しそうな本を読んでいる。妹のタツコは雰囲気同様ゆるふわな髪をしているが、彼の髪は鋭利で剛毛だ。その事を気にしている様子だ。

そして、あの時、クリスのピンチに現れた少年、ヨーにいと呼ばれる少年。活発で年上にしては少し落ち着きがないように感じるが、彼の明るさには元気をもらえるとクリスは密かに思っていた。

たかが一週間だが、クリス達はこの一週間で随分仲良くなった。初めて合ったこの公園は彼女達の待ち合わせ場所になっていた。

夕方になれば、みんなが集まり、そのまま公園で遊んだり、図書館に行つて本を読んだりと4人は楽しく過ごしていた。

楽しい時間はあつという間だ。そして、これからその時間を一緒に過ごせないことをクリスは彼らに伝えなければいけないかつた。少年達はクリスの歌の感想を言い合い和気あいあいとしていた。

「ねえ、みんな！ あのね、今日は大事なことを言わなきゃいけないの」

「ん？ どうしたクリス？」

「うんとね、もう、みんなとは会えないの・・・」

「え・・・」

「な、何で!? ...はっ！ まさか、またあいつらか!? あいつらに何かされたのか!?!」

「ううん、ちがうの。あのね——」

「くそう。こうしちやいらんねえ！ あいつらまたクリスにちよつかいかけやがつて！ ゆるさんぞー！」

「あの、ヨーにい、ちが——」

「ちよつと待つてなクリス。あいつらをこらしメカブ!?!」

「ちよつと待つて、このマヌケ」

クリスの話を勝手に拡大解釈したヨーには今にもどこかに飛び出してしまふ勢いだった。それを止めたのはエイにい。逸る彼にローキックをかまし氣勢を削いだ。

ぐおおおお・・・と、痛みに悶えるヨーにいを心配しつつも、エイにいに催促され自分が伝えなければいけないことを語りだした。

「わたしね、パパとママと一緒に外国に行くことになったの」

「え・・・」

「だから、もう、会えないの・・・」

「そんな、何で急に!?!」

「・・・急にはないだろう。おそらく、前々から計画してたんじゃないか? で、どこの国なんだ?」

「えつと、たしか、バルベルデつて名前だったような」

「ばる・・・、ばるばるでん?」

「バルベルデ、南米にある国だ。．．．しかし、あそこは．．．」
「？ えつとね、だから今日はお別れを言いに来たの。．．．みんな、
ありがとう。わたし、楽しかった。みんなと一緒に遊べて嬉しかった。
みんなとは離ればなれになっちゃうけど、この一週間は本当に楽し
かったよ！ だから、だから．．．」

楽しかったのは本当だ。嬉しかったのは本当だ。だけど、胸の奥か
ら溢れてくるのは寂しさと悲しさ。

どのくらい外国にいるのかはわからない。もしかしたら、もう彼ら
とは会うことがないのかもしれない。そんなことを考えてしまうと
言葉が続かなくなった。

さようなら。

その一言が言えない。言いたくない。

言ってしまうばもう本当に会えなくなる。なぜか、そんな気がして
しまった。

別れの言葉をきりだせず、クリスは服の裾を掴みながらぶるぶると
震える。どうしよう、どうしよう、と悩んでいると、クリスの手が温
かくなった。

クリスの手を優しく包み込むように握って、ニコニコと優しい笑顔
のタツコがそこにいた。

「ねえねえクリスちゃん」

「な、なに？」

「またね」

ふわりと、まるで当然かのようにタツコは言った。

「タ、タツコちゃん。なんで．．．」

「？ 確かに、クリスちゃんは少し遠くに行っちゃうけどそれだけで
しょ？ だったら、また、会えるよ♪ だから、またね」

「へへっ、そうだな。これでもう会えないなんてことはないんだ。だ
から、さよならはなしだぜクリス。それに、いざとなったら俺達の方
からクリスに会いに行けばいいしな！」

「うんうん。バルベルデってどんなところかなあ」

「．．．」

またね。

そう、言ってくれた。会えない寂しさはあるのだろう。だが、それ以上にまた会えると、彼らは信じているのだ。そう思えると、クリスは胸の奥が温かくなった。

「おい、エイタ。お前はなんかないのかよ」

「・・・気をつけてな、クリス」

「う、うん？」

「なんだよ、辛気くさいなあ」

「バルベルデは今内戦中だ。クリスの両親はたぶんNGO活動で行くんだろ。つまり、クリス達は危険な場所に行くことになる」

「なぬ!? クリス！ 本当か!?!」

「う、うん。パパとママがね、音楽で人助けをするって・・・」

「人助け!?! 音楽で!?! そりゃあすげえ!」

「・・・笑わないの?」

「なんでだ? クリスのお父さんとお母さんは人助けに行くんだろ?」

しかも、音楽で人助けができるんだ。すごいな! まるで、ヒーローだな!」

「ヒーロー・・・。えへへ。うん! パパとママはスゴいの!」

クリスは嬉しかった。自分の両親がとても難しいことしようとしているのはなんとなく理解していた。周りの人間もその行動を無理だと言い嘲笑う者達もいた。

だが、目の前の少年は自分の両親のことをすごいと褒めてくれた。それが、自分のことのように嬉しかった。

「・・・だが、危険なのはかわりないぞ。音楽では危険から守れんぞ」

「そんなときは俺が助ける!」

「バルベルデは南米にある国だ。どうやって行く気だ」

「飛行機!」

「子供1人で行けるか! それに、時差もある、計算できんのか」

「そんなもん、気合と根性でなんとか」

「なるか! バカッ!」

「なんだとお!」

「ああ。ケンカはダメだよ」

「む」

「ぐぬう」

なにやら一触即発な空気になるが、タツコの仲裁で高まりだした2人の怒気は静まった。

この一週間で見慣れた光景だ。ヨーにいとエイにはよくケンカしそうになるがそのたびにタツコが割って入り2人の空気を緩和する。

2人の少年はこのふわふわの少女に頭が上がらないようだ。この光景もしばらくは見納めなんだなあと一抹の寂しさがある。だけど、また会えるんだと希望が持てた。

「ねえ、ヨーにい」

「ん？」

「もし、わたしが“たすけて”って呼んだら、助けに来てくれる？」

「おう！ クリスが呼ぶなら何処だって助けにいくぜ！」

迷いなく、太陽のようにまぶしい笑顔で少年は答えた。

子供ながらの根拠のない言葉。しかし、クリスにとっては希望に満ちた言葉だった。彼なら、必ずピンチの時に自分を助けてくれる。そう、思えた。

やがて、少年少女達に別れの時がきた。

しばしの別れ。また会おうと約束し、雪音家はバルベルデへ旅立った。

そして、雪音クリスは地獄を見た。

☆

「・・・ッ!?!・・・夢、か・・・」

随分と懐かしい夢を見た気がする。

自分が幼い頃の夢だ。まだ、幸せで、現実を知らない甘ったるい夢だ。もう、帰ってこない幻想だ。

寒さで体が震える。現在、雪音クリスはもう誰も住んでないマンションの一室で身を潜めていた。

適当に空いていた部屋に入り、部屋に残っていた毛布で体を包み、コンビニでとりあえず空腹を満たすモノを手にいれ、食べ、休息をとっていた。

チラリと窓の外を見る。外は曇天で雨がしんしんと降り注いでいた。

このままではいけないと思う一方で、じゃあどうしたらいいのかと自問自答をする。

フィーネと話をするために拠点に向かえば、返ってきたのは用済みという言葉。追手のノイズとあの気色悪い怪人をけしかけられ追い詰められた。

意識を失い、次に目の覚ました時は布団で寝かされていた。そこで知り合った女の子、小日向未来と少し話をした。

あたしを助けたのは小日向未来と一緒にいた男、黒山陽介という

男、仮面ライダーBLACKだった。

屈辱だ。また、助けられた。しかも、2度も。

あいつも、あたしが潰さなきゃいけない戦争の火種だつていうのに、そいつに助けられるなんてマヌケがすぎる。それに、

『何で!?。パパとママを助けてくれなかつたんだよッ!!』

思わず吐き出してしまった自分の幻想に反吐がでる。

まだ、あたしはヒーローに期待しているのか？

ヒーローなんてのはいないと、あの時、バルベルデにいったときにおもいしつたじゃねえか。

助けを聞いて駆けつけてくる都合のいいヒーローなんていない。

この世界にあるのはどうしようもないクソツタレな現実だけだ。

そんなことはわかりきってるのに、なんで、どうして、

胸の奥がモヤモヤするんだ・・・。

カツツ

「ッ!?!」

足音。誰かきた!? 追手か!?

胸のペンダント、待機状態のイチイバルを握りしめ、クリスは臨戦態勢に入る。部屋のドアを睨み付け、近い付いてくる足音に警戒心を高めていく。

カツン、カツンと音を鳴らしながら近づいてくる気配。深呼吸を1つし、少し強ばった体の緊張をほぐす。相手が誰であれぶっ飛ばすだけだど心に決める。

足音が聞こえなくなつた。

いる。ドアの前に誰かが。

そして、ドアが開けられた。

「おじやましまさす」

「んなあ!？」

「やあ、また会えたね。探したよ」

呑気な声で1人の男が入ってきた。その男は黒山陽介。仮面ライダーBLACKでもある男が現れた。

「何で、おまえが・・・」

「昔とった杵柄っていうか、情報は自分の足で探すタイプだから俺。君が飛んでいった方角に行つて、後は手当たり次第聞き込みをしたんだ。そしたら、銀髪の女の子がこの辺に向かつていったつて話を聞いて、後は隠れられそうな場所をしらみつぶしに探して、ここにたどり着いたつてわけ」

「っ、随分と熱心じゃねえか。そんなにあたしを捕まえたかったのか」「別に捕まえるつもりはないよ。俺は、君と話がしたいんだ」

「はっ！ 信用できるか。どうせ、この場所を他の仲間伝えて、あたしを追い詰めるんだろ!」

「ん、そんなつもりはないけど・・・。あ、これ見てよ」

陽介がズボンのポケットに手をつ突つ込む。その動作にクリスは身構える。何か、武器でも取り出すのかとおもえば、取り出したのは通信端末らしきモノ。しかし、その通信端末は画面に輝が入っており、画面が真っ暗な状態だった。

「うんともすんともいわなくなっちゃった。たぶん、コウモリ怪人にぶつとばされた時かな」

触ってみなよ、と通信端末を投げ渡される。この男のいうとおりいろいろ端末を弄ってみるが、通信端末からの反応はなかった。どうやら、本当にこの端末は壊れているようだ。

「・・・ふん。で、あたしと何のおしやべりがしたいんだ」

「おっと、話をしてくれるのか?」

「聞くだけ聞いてやる。答えるかどうかは知らん」

「そっか」

端末を投げ返し、男の要望に答えてやることにする。どうやら、1人でここに来たことは本当のようだ。それに、いざとなったらシンフォギアでどうにかすればいいとクリスは思案する。

男、黒山陽介はうくん、うくん、と唸りながらこちらに聞く質問の内容を考えている様子だった。

そして、少し時間をおいて陽介は口を開いた。

「君が無事でよかったよ。本当によかった」

「・・・はあ？」

紡がれた言葉はクリスの無事を喜ぶ言葉。質問でも、なんでもなく、こちらの身を本気で案じている言葉にクリスは驚いた。

「なんなんだよ、お前」

「・・・覚えてないかい？ 俺のこと」

「あたしは、ヒーローさまと知り合いになった覚えはねえよ」

「そっか・・・」

なんなんだ、こいつ？

何故、そんな寂しそうな顔をする。この男とは知り合いではないはずだ。あたしはどこかでこいつと会っているのか？

黒山陽介の容姿を観察してみる。黒い髪に一般的な青年よりも若干筋肉質な体つき。特徴があるとすればその瞳だろう。紅い瞳。見れば吸い込まれそうな宝石のような紅い瞳をしていた。

だが、やはり会ったことはない。こんな目立つ目をした奴なら何かしら印象に残っているはずだ。

「あ、そうだ。お腹へってない？ おにぎりあるんだけど」

「施しならうけねえぞ。それに、敵からの飯なんて誰が食う——」
グウ。

「・・・」

「お腹は元気そうだな」

「ば、ちが!? 今のは!」

「まあまあ、いいから食べなよ。腹が減ってはなんとやらだ」

黒山陽介が弁当箱を取り出し中身を見せつけてくる。中に入っていたのはおにぎりだ。数は3つ、どれも綺麗に正三角形の形に握られ

たおにぎりだった。

腹はとつくに満たした筈なのに、何故か腹が音をあげた。何故だ？
見た感じは普通のおにぎりなのに。

「・・・って、違う！ 毒が入ってるかもしれないモンを食べるか！」
「え〜？ ・・・なら、これならどうだい？」

こちらの警戒がしていると黒山陽介はおにぎりを1つとった。それを、半分にしぎる。

「ほら、別に何か変なものは入ってないだろ？」

「ぬぐぐ・・・」

「ふくむ。・・・なら」

パクリ、と黒山陽介は半分にしぎったおにぎりを食べた。モグモグと咀嚼し、ごくり、と飲み込んだ。

「な？ 毒とかの心配はこれでないだろ？」

「・・・チツ」

仕方なく黒山陽介から残ったおにぎりを奪い取る。勘違いしないでほしいのは、別に腹が減ったからではない。そう、おにぎりがもつたないからだ。それだけなのだ。

「・・・あむ」

「どうだい？」

「・・・ふ、ふん！ まあまあだな」

「そうかそうか」

どうにも調子が狂う。黒山陽介は何がそんなに嬉しいのか穏やかな笑顔を浮かべていた。

まあ、おにぎりはまあまあうまいのは事実だが。

「さて、それじゃ、これから君はどうするんだ？」

「なにがだよ」

「君は今、ノイズや怪人に追われているんだらう？ それって君と、あのフィーネって女との間に何かあったんだらう？ そんな君が1人でいる。これからどうするのかなあって」

「どうするって、そんなの・・・」

言葉が詰まった。

こいつの言うとおりであたしは追われている。好き好んでこんな状況になったわけではない。なら、この先どうするか。どうしたいのか。

あたしは……。

「よかつたらさ、俺達の所にこないか？」

「あ……」

「二課のみんななら君を悪いようにはしない。同じシンフォギア装者の響ちゃんや翼ちゃんもいる。俺達なら君の力になれると思う。だから、俺達の所に来てほしい。もし、君に危害を加えるヤツがいたら、俺が守るから」

「守る……。……。……フツ」

「？ クリス——」

「アハハハハツ!! 守る、守るか。さすが、ヒーロー様だ。言うことが違うねえ」

「どうしたんだ？」

「黙れツ！」

「ツ!？」

「やっぱりあたしはあんたが嫌いだ。守るなあ？ できもしねえくせにほざいてんじやねえぞ化け物が！ お前はヒーローなんかじゃねえ！ ヒーローごっこしてる化け物だ！」

「何を」

「フイーネから聞いてんだよ。お前はゴルゴムとかいう組織に改造された改造人間なんだろう。ゴルゴムはろくでもねえ組織だってな。それを滅ぼしたお前は、自分の同類を裏切って世間に演出したんだ。自分にはヒーローだってな！」

「違う！ 何を言ってるんだ君は!？」

「うるせえ！ 化け物同士の潰しあいでも自滅したマヌケな組織を悪役に仕立てあげて、さぞ気分がいいだろうな、ヒーローとしてチャホヤされんのは——」

「落ち着くんだ。君は何か誤解している。俺はただ」

「何が守るだ！ 何がヒーローだ！ あたしを守ってくれるヤツなん

ているわけないッ!!」

部屋の窓ガラスを突き破り、雪音クリスは聖詠を唄う。空中に身を投げ出しイチイバルを纏いその場を離れた。

電柱や建物の屋上を足場にして次々と飛び越えていく。

チラリと一瞬だけマンシヨンの方を振り向く。そこにはあいつが、

黒山陽介が戸惑い、悲しそうな顔をしているのが見えた。

その顔を見てどうしてか、胸の奥がチクリと痛んだ。

だけど、それは気のせいだと思うことにした。

今は雨が降っていて、自分はそれに打たれてる。その雨の冷たさがそう感じさせているのだと思った。

そう思うしかなかった。

第十七話 嘆きの先

「何をしてるんだあたしは……」

とある沿岸部の倉庫街の路地裏で雪音クリスはぼやいていた。

すっかり雨は止み、夜空が見渡せる。星と月が見えるほどの夜空だった。だが、雪音クリスの心が晴れやかになったわけではなかった。

（らしくねえな。何であいつから逃げた。怖い？ いや、そんな筈は……）

何であいつはあんなにあたしを構う？

何であいつは飯をもってきた？

何であいつはあたしに優しくしようとしたんだ？

何で、何で……

答えのない疑問に悶々としながら路地裏を歩く。当てはない。ただひたすらに歩く。何処へいこうか。

そういえばと、ふと思いだす。

（あのおにぎり、うまかったな……）

あの時食べたおにぎりを思い出す。何故あのおにぎりをうまく感じたのだろう。あんなのより、フィーネのところで食べた料理の方がうまかったはずだ。

素材も味も高級だった。あんな普通のおにぎりよりもよっぽどうまかった。だけど、あのおにぎりはなんというか、「暖かかった」。おにぎり自体は冷めていたが、いや、冷めてうまいおにぎりはあるとおもうがそうじゃない。いずれにしても、

「また、食ってみてえなあ……」

おもわず口にしてしまった言葉にハッ！ となる。あたしは何を

考えてるんだ。おにぎりに絆されるほど食い意地が張ってる訳ではない。断じてだ！

壁に拳を叩きつけ頭を振る。余計なことを考えてる暇があればこれからのことを考えるべきだ。

背後から物音がした。

ドサリ、と何かが落ちた音だった。瞬間、臨戦態勢に移る。後ろを振り返るが、何もない。

いや、〃何か〃あった。

暗くてよく見えない。月が雲に隠れて一時的に暗さが増したが、それも一瞬。再び月明かりが夜道を照らすと、

「なっ!?!」

人が倒れていた。

「おい！ 大丈夫——」

倒れている人へ向かおうとしたが、足が止まった。妙だ。

倒れている人は女性だ。歳は二十代くらい、スーツを着ていることからOLさんだと思う。だが、注目すべきところはそこではない。

肌が異様に白かった。それどころか異常に痩せこけている。着ているスーツがぶかぶかだ。まるで、血を抜かれたように皮と骨しかのこっていないようだった。

「いったい、なんだよ、これ」

心臓の鼓動が早くなる。この人は死んでいる。死んでしまっている。こんな死に方、普通じゃない。

イヒヒ

「ツー」

声が聞こえた。振り返るが誰もいない。だが、嫌でも聞き覚えのある声があった。

「どこだ！ 出てこい！ 何で、何でこんなことをした！」

無音。自身の叫びだけが木霊する。だけど、〃いる〃。間違いなく〃奴〃がいる。

あらゆる場所に視線を向け、全神経を総動員させ、姿を見せない敵

を探す。

「どこだ、どこだ！」

早くなる心臓の鼓動がうるさくなる。見つからない。奴は何処にいる!？」

「キィヤアアアア!!」

「が、あああああ!？」

おもわず、いや、強制的に耳を塞いでしまうほどの奇声が自分の上空から響いた。嫌悪感が増す声で頭が割れそうだ。背後に気配。気力を振り絞って振り返る。

悪魔のような卑しい笑みを浮かべた怪人がいた。

「がはっ!？」

「こんなところをウロウロしてるとはなあ。探す手間が省けたぜ」

首を掴まれ壁に押し付けられる。どうにか振りほどこうともがくが振りほどけない。ふざけた力だ。

「イヒヒ!・ さてさて、邪魔が入るまえに楽しもうとするか！」

「がっ!？」

乱暴に投げられ、地面を転がされる。掴まれた首が痛むが関係ない。手を離れたというならチャンスだ。

「Killiter Ichival ——ぐあッ!？」

「ざくんねん、させるかよ」

現れた怪人、コウモリ怪人に蹴り飛ばされる。聖詠を紡ぐ間もなかった。

蹴り飛ばされた先で何かにぶつかる。何だ? とおもい、ぶつかったものを見れば、それは、先ほどの死体だった。

「ッ!・・・なんでだよ」

「あん?」

「なに無関係なやつに手を出してやがる! お前の狙いはあたしだろ!」

「・・・イヒ、イヒヒ、イヒヒヤハハハ!」

「なに笑ってやがる!」

「イヒヒ、無関係? まあ、そいつは確かにお前とは関係ないかも

なあ。だが、そいつが死んだのはお前のせいでもあるんだぜえ」

「・・・は？ なに、言つてやがる」

「俺様はフィーネ様の命令でお前を殺しにきた。そんなときになあ、言われたんだよ。俺様の自由にしていいってなあ。」

コウモリ怪人は大袈裟に翼を広げながらクリスに語る。

「5人だ。そいつもはめて5人殺した」

「――」

「イヒヒ！ いやあ楽しかったぜ、久しぶりの殺しは！ お前にも見せてやりたかったぜ。そいつらの死に様をよお！」

「なんで、なんでそんなことを！」

「んふく・・・。暇潰し、空腹、あと目についたからかな？ イヒヒ！」

「な、な・・・」

意味が分からなかった。目の前の人の言葉をしゃべる異形が何を言っているか理解できなかった。

「まあ、つまりだ。お前がさつきと死んでくれなかったからそいつらは死んだんだよ」

「ち、ちが」

「違わねえよ！ 用済みになったお前が生きてるからこうなった！」

「イヒヒ！ フィーネ様の言う通りだな。お前は何もできない半端者。戦争の火種を消すう？ フィーネ様の役にたてなくなつたお前は周りを不幸するだけなんだよ！ あくあ、かわいそうなやつらだ。お前が死んでればこいつらは死なずにすんだかもしれないのになあ！」

「あ、あ・・・」

触れた死体からは何も伝わってこない。あるのは冷たい感触だけ。この人は死んだ。何故？

・・・あたしのせい？

「あぐ!!? かはっ!!?」

「イヒヒ！ 安心しなあ。用済みの人形でも、俺様が遊んでやるからよ。そうすれば、こいつらも死んだかいがあるってもんだからよ、イヒヒヤハハハ！」

背後からまた首を掴まれ、持ち上げられる。息ができない。キリキ

りと首を締め付ける力が強くなる。

ああ、結局あたしは何をできたんだろう。

そもそも、何であたしは、ここまで頑張ってきたのだろう。

戦争の火種をなくしたい。そう思った。だから、フィーネに声をかけられた時に迷いなく協力することにした。大嫌いな歌を唄うことになっても、「痛み」が広がれば、あたしの望む世界がくるかもしれないと思っただ。

でも、何で、戦争の火種をなくしたいなんて思っただっけ……。

——人助け!? 音楽で!? そりゃあすげえ!

……ああ、そうか。あたしは……、

絶望していたはずなのに、無理だなんてわかってたのに、それでも、パパとママは毎日一生懸命だった。音楽で平和を広げようとしていて、あたしは、その姿がとても輝いて見えたんだ。

そして、あたしも、パパとママと同じようになりたかったんだ。いつか、また会えると信じたみんなに会ったときに、誇りに思える自分であるために。

だけど、もう、ダメかな。

「イヒヒ！ ようし、決めたぜ。殺してから遊ぼう！ 死んだお前をさらにぐちゃぐちゃにしてフィーネ様に見せよう。イヒヒ、フィーネ様どんな顔をしてくれるかなあ」

呼吸ができない。意識が遠のいていく。力が入らない。戦う為の歌が唄えない。

このまま死ぬのかな。死んだらパパとママに会えるかな？ いいや、きつとあたしはパパとママと同じところにはいけないだろう。だって、悪いことをしてしまった。たくさんたくさんしてしまった。あたしのせいで人が死んだ。だからこのまま惨めに殺されるんだろう。

タツコちゃん、エーにい、

ヨーにい……、

みんなは今頃どうしてるだろう。結局、あの頃は呼びやすい名前で呼んでいたから、本当の名前を知る機会はなかったな。

それでも、それでも、今あの頃の楽しかった風景を思い出すのは間違っているのだろうか。

——クリスが呼ぶなら何処へだって助けに行くぜ！

・・・どうせこのまま死ぬのなら、

「た、す、けて」

か細く、誰の耳にも届かない呟きが漏れた。

「そんじゃ、死ね」

首を締め付ける怪人にすらその呟きは聞こえなかった。1人の少女の命はここで潰える。その死体も獣欲にまみれた怪人に食られるだろう。

これは、それだけの話なのだ。

☆

「むく、むむむくん」

「どうしたの響？ 通信機とにらめっこして」

「あ、未来。・・・いやくせつかく未来と仲直りできたのに、ヨウさんと全然連絡つかなくてちよつと心配で・・・」

「ふむ、やはり黒山さんとは連絡がつかんか」

「あわ、翼さん！」

「お疲れ様です翼さん。ライブすごかったです」

「ありがとう小日向。楽しんでもらえたならなによりだ」
「むく」

「・・・それで、立花は何故そんなに唸っているのだ？」

「あく、お気になさらず、ここ最近陽介さんと全然会えなくてふてくされてるだけなんです」

「ちよ!? 未来!? わ、私は別にふてくされてなんか」

「ことあるごとに、『ヨウさくん、ヨウさくん』って言つてたくせに?」

「ぐ、ぐぬぬ」

「ふむ、まるで主人が大好きな子犬のようだな」

「子犬というには少し大きすぎると思いますが」

「ふふ、そうだな」

「もく! 翼さんまでなに言っているですか! 私、そんな犬みたい
にヨウさんに付きまどってなんかないですよ!」

「え?」

「え?・・・え?」

「まあ、そんなことより」

「うえ!? 流された!」

「黒山さんと連絡がとれないのは私も気になるが・・・、そういえば、
黒山さんを最後に見たのは小日向だったな」

「はい。陽介さんは、クリスマスを助けに行つて、それっきりですね」

「となると、黒山さんは雪音クリスマスを追っているまたは、共に行動して
いる可能性があるということになるか・・・先日のブリーフィングで
今までの雪音クリスのことをいろいろと確認したが、黒山さんは何か
思い詰めた顔をしていたな」

「知り合い、だったんですかね? 陽介さんとクリスマスは・・・」

「わからん。いずれにしても2人の行方が気になるところだが、小日
向はその、落ち着いているな。心配ではないのか?」

「え? もちろん心配はしてますけど、あんまり気にしすぎてはない
というか・・・」

「ほう? それは?」

「陽介さんとは『約束』しましたし、それに、困ってる誰かをほうつて
おくような人ではないですからね。だから、たぶん大丈夫ですよ」

「・・・」

「どうしました？」

「いや、信頼、しているのだな」

「フフツ、はい！ 陽介さんですからね！」

「ね、ね、未来。約束ってなに？」

「ウフフ、それはちよつと、ないしよかな♪」

「えく!? そんなく!?」

☆

「ゲハツ!」

「ツ！ げほツ!? えほツ!」

いったい何が起こったのか雪音クリスは理解が追い付いていなかった。怪人に首を締め付けられ、意識が遠くなり自分の命運はこれまでかと思つた。

だが、聞こえてきたのは怪人の悲鳴。一瞬の浮遊感のあとは誰かに抱き締められる感触。解放され、確保された気道から酸素が一気に肺を巡つたためむせてしまった。

ぼやけた視界がやがて正常に戻っていく。

「え?・・・な、んで?」

視界の先にいた者は、

「助けに来たよ。クリス」

ニツコリと優しく笑うお人好し、黒山陽介がそこにいた。

第十八話 蝙蝠をうて！

「助けに来たよ。クリス」

「……」

「どうした？ どこか怪我でも」

「……で」

「ん？」

「なんで来たんだよ。なんで来れたんだよ。……なんでお前は、あたしを助けるんだよ……」

「……君はもう忘れてしまったのかもしれないけど、俺と、いや、俺達と君は昔、一緒に遊んだ時があるんだぜ」

「え？」

抱き留めていたクリスを陽介はそつと地面に降ろす。クリスはそのままぺたんと地面に座り込む。陽介はクリスの前に出た。

「長い時間を一緒にすごしたわけじゃないけど、あの日々は楽しいものだった。昔交わした『約束』もあるけど、君をほうっておけるほどの薄情者でもないつもりだ。……まあ、なんだ、いろいろ理由はあるけど、ようはシンプルなことなんだ」

ガシガシと頭をかきながら黒山陽介は言葉をつなぐ。

「俺はクリスを助けたい。それで、君はさつき言っただろう？ 助けてって。だから助ける。なら、そんだけで充分さ」

聞こえてた。聞こえるはずのない小さな叫びはこの青年に聞こえていた。都合が良すぎるのかもしれないけど、不思議と嫌と思わなかった。むしろ、どこか懐かしい感じが……。

「あ……」

疑問という名のばらけたパズルに確信というピースが当てはまっていく。

懐かしく感じる背中はかつて出会った少年を思い出せ、その言動はうつとおしいと感じながらもこちらを気遣う優しさがあつた。けど、なにより彼がこれまでできてきた行動はあの少年を思い起こさせるには充分だった。

何故、この青年はこんなに自分に構うのか。

わかつた。わかつてしまった。この青年は、

「ヨーにい?」

「おう、なんだい?」

「ッ!……」

こんなことがあるのだろうか。子供の時に仲良くなった友人とこうしてまた出会うことができるなんて、胸の奥からいろんなものが溢れてくる。

喜びと悲しみと疑問。

また出会えたという喜び。友人に対して行ってしまった粗相。そして何故彼が仮面ライダーになってしまったかの疑問。

言葉が、想いがまとまらない。クリスはただこの状況に対して混乱するしかなかった。

「……さて、いろいろ話したいことがあるけど、まずは……」

黒山陽介は視線を前に向ける。クリスを護る為に出で視線の先にいるコウモリ怪人を睨み付ける。

クリスを救出するため背後から後頭部を蹴り飛ばしたコウモリ怪人は既に立ち上がっていた。色黒な肌は怒りからくる興奮からか若干赤くなっていた。

「テメエ、良いところで邪魔しやがって、このお邪魔虫が!」

「お前と問答するつもりはない。ここで倒す」

「ハッ! 調子にのりやがって! その小娘は俺様のモノだぞ!」

「黙れッ!」

「ッ!?!」

「モノだと？ ふざけるなッ！ クリスを痛めつけるだけじゃなく、人の命をおもちやにするお前を許すわけにはいかない！・・・変——」

構える。拳を力の限り握り締め、ギチギチと音をたて全身の筋肉が引き締まる。黒山陽介の体が変わろうとする。

「させるか！ キイイイイイイ!!」

「あぐ!?!」

陽介の変身を阻止するべくコウモリ怪人は大音量の奇声を上げる。

コウモリ怪人ミナガ。この怪人が上げる奇声は只の奇声ではない。この奇声は生物が本能的に嫌がる超音波を同時に発している。本来の超音波は人間には聴くことができないが、この怪人はそれができるのだ。

生物が本能的に嫌がる音を出すことで獲物は思わず耳を塞いでしまう。その隙を突くのがこの怪人の常套手段だ。

目の前のお邪魔虫の後ろにいるクリスは耳を苦悶の声と共に耳を塞いでいる。こいつも以前にこの音を聴き耳を塞いでいた。だから焦ることはない。今回もいつもと同じように隙ができた獲物を弄ぶだけだ。

その筈だった。

「——身ッ!!」

「な、なに!?! ぶこえっ!?!」

黒山陽介は変身した。

怪人が発する音などまるで気にする素振りを見せず陽介の体は変わる。ベルトが形成されそこから放たれる強烈な閃光にコウモリ怪人は思わず悲鳴を上げた。

「仮面ライダー・・・ブラック!!」

「ほんとに、ヨーにいが・・・」

「バカな!?! 何故、俺様の超音波が聞かない!?!」

「トオワ!」

「ゲアッ!?!」

コウモリ怪人の問いに答えることなくBLACKは怪人を殴り飛

ばす。

別にコウモリ怪人の奇声が聴こえなかった訳ではない。むしろ改造人間として強化されている聴覚は普通の人間よりも鮮明に聞き取れることが可能である。

ならば陽介はどうしたか？ 答えは単純だ。聴こえていたが聴いていなかったのだ。

コウモリ怪人の奇声だけをピンポイントで聴こえないようにするといった器用な芸当をしたわけではない。コウモリ怪人の奇声は確かに聴こえていた。バツチリ聴こえていた。しかし、音に対する嫌悪感よりもクリスを助けたいという想い、クリスを傷つけ、人の命を弄んだコウモリ怪人に対する怒りが嫌悪感を塗りつぶしたのだった。

「さあ、覚悟しろ」

得意の戦法をあつさり破られたコウモリ怪人は恐怖した。今は夜で辺りは真っ暗だがコウモリ怪人の目にはハッキリと見えていた。紅い瞳をギラつかせながらこちらに迫ってくる黒い戦士が。

そして、コウモリ怪人が次にとつた行動は、

「あー」

声を上げたのはクリス。

コウモリ怪人は自分を多い包めるほどの翼を広げると勢いよく羽ばたき空へ飛んだ。

(付き合っていていられるか。奴の相手はあのいけ好かないビルゲニアがやることになってんだ。俺様が戦う必要はねえ)

自分が与えられた命令は“雪音クリスの抹殺”。それを完了するまで戻ってはくるなど言われている。ならば、ここで仮面ライダーと戦う必要はないとコウモリ怪人は判断した。その為、なんの迷いもなく逃走という手段に打って出た。

相手は小娘と改造人間。翼を持ち空を自由に飛べる自分に追い付ける筈がない。しっかりと高度をとって、また、その辺の人間で遊んで次のチャンスを待てば

「逃がさん」

「ゲェー!？」

驚愕している間にコウモリ怪人は地面に叩きつけられた。

彼等がいた場所が倉庫街でなければコウモリ怪人はままと逃げる事ができただろう。彼等がいた倉庫街の通路は人が2、3人が通れる広さがあった。倉庫と倉庫の間隔もその程度である。

仮面ライダーBLACKがコウモリ怪人を追い、ジャンプしても、1回のジャンプでは飛び上がり続けるコウモリ怪人には届かない。ならば、1回ではなく2回のジャンプをすればいいとBLACKはそう判断した。

つまり、BLACKは壁に向かって飛び、壁を蹴って更に高く跳んだのだった。結果、コウモリ怪人に肉薄し、その顔面に拳を叩き込んだ。

ぐぎぎと唸りながら顔面を押さえ地面に倒れ伏すコウモリ怪人を追うように着地する。

(飛ばれると面倒だ。直ぐに決着をつけないければ)

「テメエー！」

怒りの形相でBLACKに怒鳴るコウモリ怪人。だが、そんなものを気にする素振りもなくBLACKはダッシュ、すぐさまコウモリ怪人に接近する。

右ストレート、コウモリ怪人は身を仰け反らせて回避、踏み込んで左ストレート、しかしこれも避けられる。

「ハハッ！」

コウモリ怪人が嘲笑う。しかし、BLACKの勢いは死んでいない。振り抜いた左ストレートの勢いを利用、回転しながら更に踏み込む、から空きの腹に右肘を振り込む。

「グエ!？」

右の裏拳を胸に当て少し間合いをあける、左の正拳を再び腹に叩き込む。コウモリ怪人は腹を押さえながら後ずさる。

「ガアアアッ!!」

痛みを押し殺すかのように獣のような叫びを上げるコウモリ怪人。両手の爪をギラつかせ乱雑に腕を振り回す。BLACKを引き裂こうと爪を振るうがその攻撃はひよい、ひよいと木の葉が舞うように

BLACKは回避した。

「こいつ！」

「シッ！」

大振りの右手、BLACKは踏み込む、顔面の右を爪が滑り抜ける、右膝が怪人の腹に吸い込まれた。

「ゴッ・・・ガ・・・」

フラフラとよろめく怪人。

「ハアッ！」

力を込めた右回し蹴りが怪人の顔面に叩き込まれコウモリ怪人は錐揉み回転しながら倒れた。

「すげえ・・・」

始まった仮面ライダーと怪人の戦いを見て雪音クリスが漏らしたのは感嘆の言葉だった。戦況は仮面ライダーの優勢、いや圧倒だろうか。的確に攻撃を加え、相手の攻撃は最小限の動きでかわしている。少なくともクリスにはそう見えた。そしてその戦いぶりから嫌でもわかってしまった。あの少年、いや青年は本当に仮面ライダーなのだ。

きつと多くの戦いを経験してきた筈だ。ゴルゴムという組織といったいどんな戦いをしてきたのだろう。自分が知っている彼は元氣いっぱいである少年だった。それが今やまるで戦闘マシンのように的確に冷静に戦っている。

確実に、無駄なく、そう思わせる戦い方だった。その背中から感じる怒気は恐らく自分を思っているのだろうと感じた。それに関してはちよつとうれしい。彼の中で雪音クリスという存在は確かにいるとわかった。だけど、淡々と戦うその姿はなんだか少し怖く感じた。

「ハア・・・ハア・・・」

「・・・」

BLACKとコウモリ怪人は互いの肩を掴み、ガッツリ組んだ状態になった。コウモリ怪人は息も絶え絶え、対するBLACKは無言でコウモリ怪人を睨み付ける。BLACKはコウモリ怪人を逃さまい

と強く肩を掴み、コウモリ怪人は逆にBLACKを引き剥がそうとする。ギリギリと互いの体が悲鳴を上げていた。

「・・・イヒ、イヒヒヒヒ！・・・まったく厄介な奴だな、仮面ライダー！　だがなあ！」

狂ったように笑いながらコウモリ怪人が口を開いた。なにか仕掛けてくる。そう直感したBLACKはコウモリ怪人の口を塞ごうとした。

自身の顔面を重い衝撃が襲った。

「ぐッ!？」

鈍器で殴られたような衝撃だった。その衝撃でコウモリ怪人から引き剥がされる。いったい何が？　と思しなが立ち上がる。

「イヒヒヒ！　カア！　カア！」

「ぐあ!？」

答えはすぐにわかった。コウモリ怪人はナニかを吐き出した。目に見えないナニかを。BLACKは上半身に、胸にまた鈍器で殴られたような衝撃を受けた。受けた感触はあった、だが視認できなかった。ならば答えは、

(奴め、空気を弾丸みたく吐き出してるのか)

空気砲。コウモリ怪人が行っている攻撃をそう思考しているとコウモリ怪人はまた連続してカア！　カア！　と吐き出す。視認はできなくても吐き出すタイミングに合わせれば、

「ッ！　ダメだ！」

BLACKはその場を動かず腕を交差させる。コウモリ怪人が吐き出す空気弾が次々とBLACKに襲いかかる。

「イヒヒヒ！　スウーバーバアッ!!」

コウモリ怪人は大きく息を吸い込んだ。肺に溜まる膨大な空気はコウモリ怪人の胸部を膨張させる。ぱんぱんに膨れ上がった風船のように。そして、その溜まった空気を吐き出した。BLACKは動かない。

「お、おい！　避け」

「うっ!？」

ドンツ！ とまるで爆発がおこったような音がなった。その場から動かずにいたBLACKはコウモリ怪人が吐き出した大型の空気弾、大砲のごとき一撃をモロに受けた。その衝撃に耐えきれずクリスの近くまで吹き飛ばされた。

「なにやってんだよ！ 棒立ちで、アイツにいいようにやられて……」
倒れたBLACKに駆け寄り思わず強めに言葉を投げ掛ける。だが自分で言いながらBLACKの行動の意図を察してしまった。

自分達がいるこの場合は倉庫と倉庫の間の通路。人が2、3人は通れる広さがあるが、逆に言えば2、3人しか通れる広さがないとも言える。

その中でコウモリ怪人は手当たり次第に空気弾を乱射した。例えば、見えない弾丸でも射線がある程度予測できれば物陰に隠れたり射線から外れることができる。

だがBLACKはその場を動かなかった。

「あたしを庇って……」

「いつつ、大丈夫だよこれくらい」

クリスに空気弾がいかないようにBLACKはその身を盾にした。BLACKの身体を見ると、その黒い装甲には幾つかの凹みが見えた。特に目を引くのは腹部にあるサッカーボールほどの大きさの凹み、それがBLACKを吹き飛ばすほどの空気砲だった。

「イヒヒ！ じゃあな！」

「クソツ！ 待て！」

こちらを見下すように笑いコウモリ怪人は翼を広げ飛び立つ。BLACKもすぐにその後を追った。

クリスは離れていくBLACKの背中を見つめていた。

（このままでいいのか？）
考える。

（あの頃から変わってねえじゃねえか）

走っていく背中はその時のままだった。守る為に無茶を押し通す。いつだって全力で突き進んでいく。そんな背中であった。

なら自分は？

あの頃と同じで守られているだけなのか？

(いや、違う)

胸のギアのペンダントを握り締める。胸の内から溢れてくるモノがある。

(あたしは変わったんだ。壊すことしかできない歌でも出来ることがあるはずだ！)

クリスは走る。

不思議と体が軽く感じた。心身共に疲弊していたのに何故か体が、いや体だけではなく心も軽くなった気がした。

だがそんなことはどうでもいい。今はやるべきことがある。あの怪人は放ってはおけない。

(やるんだ。あたしが、あたしたちがやるんだッ！)

「Killiter Ichival tron——」

決意を胸に少女は唄い、戦場へ向かった。

☆

「奴は何処に……、マルチアイー！」

倉庫街の通路を抜けると見渡す限りの海、波の動きは穏やかであった。仮面ライダーBLACKは自身の視力を限界まで駆使し、夜空に消えたコウモリ怪人を探す。

「……いた！」

翼を羽ばたかせ悠々と飛行する黒い影を捉えた。海面の上を飛ん

でいるコウモリ怪人の背中が見える。ここからでは届かないと悪態をつく。

ここでコウモリ怪人目掛けてジャンプしても追い付くことは不可能。なら見過ごすか？ それは出来ない。ここで奴を逃せばまた犠牲者が出てしまう。それだけはなんとしても阻止しなければならぬ。

(遠回りになるが陸路で迂回するしかないか)

空を飛べない自分ではこのまま追跡することは出来ない。なら、遠回りでも確実に追跡するしかない。せめて、“足場”があればと思うが、と無い物ねだりをしてもしようがない。

「ロードセク——」

自身の相棒を呼び出した瞬間、BLACKの頭上を飛んでいく複数の物体と歌が聞こえた。

「ゲヒヒ！ 所詮は虫。飛べないヤツでは俺様を追ってはこれまい」
コウモリ怪人は上機嫌だった。一時はどうなることかと思っただが、自分は今、空の上。いかに仮面ライダーが強敵だろうが空は自分のフィールドだ。高くジャンプが出来るだけのヤツには何もできまいと鼻高々だった。

「ああ？」

自身の耳が何かを捉えた。自身に猛スピードで迫ってくるモノがある。それも複数。

後ろを振り替えれば、大量のミサイルが迫ってきた。

「チィッ！ あの小娘が！」

小癩な追撃を放ってきたクリスに対して怒りのボルテージが上がる。だが、慌てる必要はコウモリ怪人にはなかった。

加速。追ってくるミサイルから少し距離をあける。ミサイルは自身目掛けて追尾してきた。

「スウ——カアアアアアッ!!」

息を吸い空気弾を吐き出す。空気弾はミサイルの横を通過した。すると、一部のミサイルが姿勢を崩す。姿勢が崩れたミサイルは別のミサイルに接触、それが引き金となりミサイルは次々と誘爆していった。クリスが射ったミサイルはコウモリ怪人にとってはなんの脅威にもなり得なかった。

「ハッ！ 今さらそんなもので！」

余裕をかますコウモリ怪人。爆発したミサイルの煙で周囲の視界が悪くなるがコウモリ怪人にはさほど関係なかった。この怪人も動物のコウモリ同様、超音波の反響によって周囲の地形を把握するエコーロケーションを行うことができる。煙の向こうから近づいてくる複数の物体、ミサイル郡が再び迫っていることがわかった。

「無駄無駄アッ！」

空気弾をさらに発射。ミサイルに直撃させる必要はない。空気の流れを変えるだけでミサイルは正常に動けないのだ。煙の中で爆発が起きる。耳障りな歌が聞こえるが自身を脅かすほどではない。

このまま逃げ切れる。コウモリ怪人は確信した。

「・・・あん？」

爆煙が濃くなるなかでコウモリ怪人は何かを感知する。ミサイルか？ いや、それにしても大きい。だが何かが迫ってきてる。

煙から現れたのはミサイルだった。

「ッ!? チィ！」

身をよじりミサイルを避ける。目にしたのは間違いなくミサイルだ。だが、その大きさは今まで撃ち落としてきたミサイルより大型のものだった。

今までのミサイルがサッカーボールほどの大きさだったのに対してあの大型ミサイルは軽自動車並の大きさのだった。

(思わず避けちゃったが、あの一発で終わりなわけねえよな)

本能的に避け、空へ登っていく大型ミサイルを見送り爆煙を見る。大型の物体を感知。数は5つ。またもや大型ミサイルだった。

「デカブツをぶつけりや倒せると？ 甘いんだよ！」

空気弾を連続で発射。大型になったことで命中させやすくなった大型ミサイルに空気弾が直撃。大型ミサイルはその姿勢を崩し他の大型ミサイルに接触、爆発した。

その爆発はコウモリ怪人に向かっていた5発すべてに引火していた。大型だけあって先ほどよりも爆発が大きい。爆風で自身も少し体勢を崩すがすぐに直す。

周囲を覆っていた爆煙もその爆発で吹き飛び空は晴れ渡った。コウモリ怪人はミサイルが飛んできた方向を見る。

「イヒヒ！」

赤い装甲を身に纏う少女の姿を発見。堤防の端でガトリングを両手に構えこちらに銃口を向けている。

無駄なことだと内心嘲笑う。こちらを見上げ、睨み付けているようだが、構えたガトリングは射程外、ミサイルをいくら撃とうが自身の前ではカトンボも同然。なんのつもりか耳障りな歌を唄いつづけているが、あの小娘は自身に対する有効な手段など持ち合わせていないのだ。

「・・・ん？」

そこでコウモリ怪人は違和感を感じた。

「仮面ライダーはどこだ？」

自身を痛めつけてくれたあのお邪魔虫が見当たらない。エコーロケーションによる探索も行うが反応がない。

「イヒヒ！ 逃げたか、イヒヒヤハハハ！ 飛べない虫じゃ何もできなもんなあ！」

高笑い。気分が高揚する。もう自身を邪魔する者はいない。後は

このまま飛び去るだけだ。

「あ?」

上空から轟音。振り向き見上げれば大型ミサイルが1つ向かって来ていた。

「そーいや墮とし損ねたのが、ひと、つ・・・」

何だ? と、妙な違和感があった。迫ってくる大型ミサイルに何か張り付いている影が見えた。

影が伸びる、いや影が立ち上がった。

「ッ! あの野郎ッ! ミサイルに張り付いていやがったのか!」

影の正体は仮面ライダーBLACKだった。

時は少し遡る。

「クッソ、やっぱミサイルはダメか」

「クリス!? どうして?」

「どうしても何もねえ。このままやられっぱなしの私様じゃねえってことだよ!」

放ったミサイルがコウモリ怪人に撃墜されるも、再びミサイルを発射。爆煙に突入してその先にいるはずのコウモリ怪人に向かっていくがミサイル郡はまた爆発した。

「イチイバルでも届かないのか」

「・・・なあ、あたしに考えがあるんだが・・・」

「考え？ 何かあるのかい？」

「むかつ腹が立つが、私の弾はアイツにはまだ届いてない。だけど、私の全力はこんなもんじゃない。だから・・・」

「全力って・・・、まさか!? 絶唱を唄うのか!? ダメだぞ！ そんなことをされる訳には」

「話は最後まで聞けって！ あたしの命をあんなゲスにくれてやるつもりはない！・・・あたしの弾は届かねえが、よ・・・ん、ん、あんたを届けることはできるかもしれないねえ」

「俺を？」

クリスの作戦はこうだ。

仮面ライダーのジャンプ力を当てにし、ミサイルをとにかくばらまく。コウモリ怪人に届くまでばらつきまくる。そのミサイルを“足場”にしてコウモリ怪人に迫るというものだった。

「・・・いや、それだけじゃダメだ」

「な、なんでだよ！」

自分の提案を否定され思わず声が荒ぶる。やはり、自分では役に立ってないのか。何も救えないのか。この人の助けにはなれないのか。そんな思考がグルグルとクリスの頭をかき乱していく。

「クリス、絶唱を使わなくても全力を出すことができるかい？」

「え？」

「唄うんだ！ クリス！」

「は、ハアッ!?」

仮面ライダーBLACKも策を考えた。

「虫が！…この俺様を見下すか！」

大型ミサイルに張り付いていた影は仮面ライダーBLACKだった。

唄うことによるフォニックゲインの上昇。それによるシンフォギアの出力の上昇によるギアの形状変化。BLACKはそこに目を付けた。

シンフォギアは唄うことでその力を発揮する。ノイズとの戦闘の折、自身のギアを状況によって変化させて戦う少女を彼は知っていた。

その少女は歌姫であり自身を防人又は剣と称する少女、風鳴翼。

その戦いぶりは戦場を舞う剣姫と呼ぶに相応しく、*“剣”*を振り、飛ばし、果ては巨大化させノイズを切り払う彼女は自分と違って器用だな感心していた。

クリスもシンフォギア装者であるならば、同じようなことができるはずだとBLACKは思った。唄ってくれ！と、いきなり言った時は彼女は困惑していたが、作戦を伝えれば、戸惑い一つも了承してくれた。

最初に放った一発の大型ミサイル。それにBLACKは張り付いた。その一発に力を注力し、残りの大型ミサイルは全てコウモリ怪人の注意を逸らす為に使った。まんまと作戦は成功。BLACKはコウモリ怪人の頭上をとることができた。

空を高速で飛行するミサイルの上にBLACKは立つ。決して安定した足場ではないが、それでも立つ。眼下にいる怪人を逃がすわけにはいかないから。

バイタルチャージ。右拳にキングストーンエネルギーを集中させる。

「俺様を見下すなアツ!!」

仮面ライダーに上を取られたことがそんなに気にさわるのか怒気

を撒き散らす。コウモリ怪人は大きく息を吸った。

(調子にのりやがって！　だが！　あのミサイルを撃ち落としてしまえばあいつは海に真つ逆さまよ！)

ミサイルの上で必殺の構えながら接近してくる仮面ライダー。この状況はコウモリ怪人にはピンチであったがチャンスでもあった。

ミサイルに乗りコウモリ怪人よりも高い高度をとり一足飛びで仮面ライダーがその拳を振るえばコウモリ怪人はその拳に沈むだろう。

だが、まだ距離がある。自分にも反撃のチャンスが残っているのだ。そして、自分は仮面ライダーを狙う必要はない。仮面ライダーが足場にいるミサイルを撃ち落とせばいいのだ。

そうすれば空を飛べない仮面ライダーはそのまま海へ落ちていく。

勝ったッ！　そう確信した。

翼に激痛が走るその瞬間までは。

「ア、ギヤッ!？」

何がおきた!？

吸っていた空気が吐き出されバランスを崩す。飛んでいたはずの自分がどんどん落ちていくことがわかった。痛みの元、左翼に目を向ける。翼膜に1つ、穴が空いていた。

この穴はなんだ？

痛みに耐えながら必死に羽ばたき高度を保つ。そこで目に入った。堤防の上で長身の銃を構えていた赤い少女の姿を、その少女、雪音クリスは不敵に笑っていた。

「あの小娘があああッ!!」

自分は撃たれたのだ。その事実には憤慨し意識をクリスに向ける。その時点でコウモリ怪人の運命は決まった。

ドガギンッ！　と激しい金属音が響いた。音は上から、音に反応し上へと体を向ける。

「何をッ!？」

仮面ライダーが足場になっているミサイルを殴り付けていた。その左拳はミサイルの装甲を穿ち、手首が埋まるほどだった。

自らの足場を自分で破壊しているその行動に理解ができなかった。

体を丸め高速回転、赤熱化した右足を付き出し天から降り注ぐ稲妻と化す。それが、コウモリ怪人ミナガが見た最期の光景だった。

「キツクツ!!」

堤防にできたクレーターに黒い稲妻が落下。凄まじい爆発が起こった。

「ハア・・・ハア・・・」

走る。爆発が起きた地点へ雪音クリスは急いだ。

「どうなった？・・・おい！ 仮面ライダー！」

コウモリ怪人が墜落し、後を追うように追撃をした仮面ライダーB LACK。彼等がいるであろうその場所は爆煙で何も見えなかった。

どうなったか？ あのクソコウモリは倒せたか？ 彼は無事なのか？

不安を隠せないでいると煙の奥から影が近づいてきた。思わずアームドギアを構えるがそれは杞憂に終わった。

「お、いたいた。やったぜクリス！」

煙から出てきたのは彼^{ヨウ}だった。

仮面ライダーから人間の姿に戻っておりこちらへ笑顔を向けながらサムズアップしていた。

その笑顔は子供の時に見た太陽のような笑顔だった。

「~~~~ツ！」

「うおっと、クリス？」

ギアを解除し、クリスは何も言わず陽介に抱きついた。陽介の胸に頭を押しつけ、腰に回した腕にも力が込められていた。

「どうしたんだクリス？」

「・・・うるせえ」

「・・・クリス」

「ちよつと・・・、ちよつとでいいから・・・、このまま・・・」

「・・・そつか・・・」

クリスの顔が見えない。だけど、この少女は今ここにいる。そのクリスの頭に優しく手を置き、ゆっくりと撫でる。

頭に触れた瞬間、一瞬クリスはビクツとするが特に拒否するわけもなく陽介の手を受け入れていた。

少女は安心した。

再び出会えた“大切な人”を抱きしめる。

少女は久方ぶりに感じる人の温もりをじっくりと感じるのであった。

第十九話　じゃあ行こうか

夜が明け、太陽が顔を覗かせようとしている時間帯。2人の人物が公園のベンチに座っていた。

黒山陽介と雪音クリス、港でコウモリ怪人を撃破した彼らはその場から移動、とりあえず落ち着こうということで2人は公園にやってきた。

「・・・なあクリス、そろそろ」

「やだ」

「まだ何も言って」

「やだ」

「・・・」

クリスは陽介の服の袖を掴まんで離そうとしなかった。港から公園までの移動中の間ずっとだ。戦いが終わったあとしばらく抱きついていたので、ハッ！と我に返り、陽介から一旦離れるが離れすぎることなくちよこちよここと近寄り彼の服の袖を掴まみ今に至る。

ベンチに座り多少の時間が経過したが2人の間に会話はなく少し重苦しい空気が流れる。クリスは陽介の服の袖を掴まみながらチラチラと陽介の様子を伺っていた。

そんなクリスを横目で観ながら陽介はコウモリ怪人との戦闘を思い出していた。

(妙な感覚だったなあ)

右手をグツ、パツ、と開いたり閉じたりしながら振り返る。コウモリ怪人との戦いでクリスが歌を唄っている間何だか調子が良かったのだ。

とはいえ感覚的な問題だ。もしかしたら気のせいだったかもしれない。だけど、あの時クリスの歌がキングストーンを通じて全身に力を巡らせたような感覚を受けたのは間違いない。

以前、櫻井了子からキングストーンはシンフォギア装者の歌を増幅するスピーカー的な役割をしていると聞いた。実際、対ノイズ戦の際、響や翼が唄っている近くにいると、キングストーンフラッシュを使うことなくノイズに攻撃が行えた。

しかし、先のコウモリ怪人戦は何か違った。何だかクリスの想いも背負って一緒に戦ったような、クリスの歌に“ノって”戦えたような、なんとも言えないが陽介は気分が、戦意が高揚して戦えたのは事実だと確信した。

(まあ、なんにせよ)

チラリとクリスに視線を集める。

(クリスを守れたからいいか)

「・・・な、なんだよ」

「・・・いや、クリス、綺麗になったなあって思ってたな」

「な!? バツ!? こ、こっぴどくかきいこと言うな!」

「いやいや、昔から綺麗だと思ってたけど、ますます綺麗になってお兄さんは嬉しいのです」

「なんだよその喋り方。あんたはあたしの兄貴ってわけじゃないだろ」

「そうか? 俺にとつちやクリスはもうひとり妹みたいなものだけどなあ。子供の頃はタツコちゃんと一緒に『ヨーにい、ヨーにい』つて後ろをついてきてたのに」

「子供の頃だろ。それにあれはついていったんじゃなくて、後先考えず爆走するあんたを止めようとしてたんだよ!」

「あれ? そうだっけ?」

「そうだよ。無闇出鱈目に騒動に突っ込んでくんだから、それを見せられるこっちは状況についていくのに必死だったんだからな」

ジトと陽介を睨むが、当の本人はたはと誤魔化すように笑う。子供の頃からあまり雰囲気が変わってないように見えるがクリスには1つ気になる点があった。

「なあ、その目、どうしたんだ?」

「ん? ああ、この目か」

「子供の時は、その、普通の黒目だった。カラーコンタクトつてわけでもなさそうだし、そんな紅くなって」

「俺もよく分からないんだが、いつだったかなあ……、ああ、ゴルゴムとの戦いが終わったあたりかな？　不意に鏡みたらなんか紅くなってたんだよね」

「大丈夫なのか？」

「うん、別になんともないよ。普通に生活できてるし、まあ前より視力がちよつとよくなったくらいかな」

「ゴルゴム……、あのさ」

「うん？」

「タツコちゃんやエイには今何してるんだ？」

「……」

「あの2人があんたが仮面ライダーになったことを知らないはずないだろう？　2人はどこに？　元気にしてるのか？」

「いや、もう、いないんだ」

「え……」

「俺が仮面ライダーになったあの日、あいつは、つきうみえいた月海影太はシャドームーンになったんだ」

「な……」

「俺は、ゴルゴムからあいつを取り返す為に戦った。タツコちゃんもそれをサポートしてくれた。ほんととは巻き込むつもりなかったんだけど、タツコちゃん、結構頑固でね。俺の方が丸め込まれちゃって一緒に行動することになったんだ。……だけど、今思えば無理矢理にでも引き離せばよかったよ……」

「ちよ、ちよつと待てよ。シャドームーンがエイにいだって言うんなら、ゴルゴムが壊滅したってことは」

「ああ、シャドームーンは俺が倒した」

「そんな……」

「……そして、ゴルゴムとの決戦でタツコちゃんは、命を落とした」
「ッ!？」

「情けないよなあ。奪われた家族を取り戻せず、守らなきゃいけない

大切な家族を守れず、クリスが言つてたとおりちゃんと守れなかったよ」

「そ、そんなことねえよッ！」

「クリス……」

「あたしは、あたしは助けてもらつた！ 子供の時も、さつきも、助けてくれた！ もう誰もあたしのことを気に掛けてくれる人はいないんだって思つてた！ でも、ヨーには来てくれた！ 助けてくれた！ あたしは嬉しかったんだ！ だから、だからよ、そんな悲しい顔すんなよ……」

失つたものは取り戻せない。自分を助けてくれた青年が沈んだ顔をしている。体を人外に改造され、異形の集団から奪われたものを取り返す為に戦い、異形の集団から人々を守るために戦い、そして打ち勝つた。しかし、彼は本来の目的、大切なものを守れなかった。きつと大きく傷付いた筈だ。

巨大な悪を倒しても彼の戦いは終わっていなかった。休む間もなくノイズという人類の天敵と戦い、そして今、自分を助けるために戦つた。

戦つて、戦つて、戦い続けてきたそんな青年の為に自分は何ができる？ 上手く言葉にできない。伝えることができない。

でも、だからこそ、

「~~~~~♪」

「クリス？」

その口から歌がこぼれたのは自然だったのかもしれない。

子供の頃に唄つた歌。人を励ます歌。そんな歌をクリスは唄つた。静寂の公園でクリスの歌が響き渡る。朝焼けに照らされながら唄う少女の姿に陽介は思わず見惚れた。銀髪が煌めき、透き通る歌声が自分を貫いていく。

しばらくして、歌が終わる。

「……あたし、なんで……」

唄い終わってから自分の行動に驚く。歌は嫌いだ。自分の歌はもう壊すことしかできない筈だとそう思っていた。たけど、今のは迷い

なく唄うことができてしまった。何故、どうしても困惑しているさなか

拍手。たったひとりの観客が拍手をしていた。

「やっぱり綺麗な歌だな。．．うん、そうだな。うじうじしたってどうしようもないしな、ありがとなクリス。励ましてくれて」

そこにあるのは笑顔。自分の歌を聴いて嘘偽りのない感想がとんでくる。そこで、クリスは思い出した。かつての光景を、父と母が音楽で人々を笑顔にしていた光景を。

（ああ、そうか）

音楽で平和を作るなんて叶う筈のない無謀な夢だと思ってた。だけど、父と母はそうは思ってたんだ。笑顔になってくれる人がいる。音楽で心を救う。いきなり世界を平和にできなくても1人1人を笑顔にできれば、いつかそれが平和に繋がると信じたのだ。

だから、諦めなかった。危険な場所に飛び込もうとも音楽で必ず平和を掴むと希望を捨てなかったのだ。

（あたしの歌でも誰かを救えるんだ）

目の前の青年の笑顔。子供の頃から変わらぬその笑顔に少女の心は暖かくなった。

雪音クリスは希望を持てた。

「よし！ やるぞー！」

「んお!? どうしたクリス？」

「やりたいことができた！ だけど、その前にケリをつけなきゃいけないことがある！」

「それは？」

「ああ！ それは」

クウくとクリスのお腹から可愛らしい音が鳴った。

「．．．」

「．．．．．」

「えっと、まずはゴハンかな？」

「ち、ちが!? あたしは、別に腹が減ってるわけじゃ」

ググウくと陽介の腹も鳴った。

「あく。俺も何だか腹が減ったし、とりあえずゴハンにしよぜ、な?」
「し、仕方ねえな! 腹が減ってはなんとやらだしな! うん!」
安心したからか緊張の糸がほつれ両者の腹が主張しだす。せっかく決意を固めたクリスだったが腹の音が恥ずかしかつたのか顔が若干朱く染まる。腹の音を誤魔化すように声を上げ、2人はその場から移動した。

☆

「ガツガツツ!」

「ああ、ほらクリス。慌てなくてもゴハンは逃げないから」

「へふにはわへへえほ」

「うん、しっかり飲み込んでから喋ろうな? 口周りにご飯粒ついてるし」

「~~~~ツ!!?」

「ああ! ちよ!?! 服の袖で拭わないの!」

「ほっほっほ。元気じゃのう」

場所は移り、陽介とクリスは喫茶店ストーンに訪れていた。周りを警戒し、陽介の後ろに隠れながら店内に入るクリスの姿を微笑ましそうに見つめながら。

店内にはおやつさんこと店長の石田さんがおり、事情を話せる範囲で説明、おやつさんは特に深く詮索することなくいつもように仏のような笑みを浮かべ陽介達を迎い入れてた。

カウンター席にクリスを座らせ陽介は奥の厨房に消える。ニコニコと笑う老人の生暖かい視線にむず痒い思いをしていると、おにぎりとお茶を運んで陽介が帰ってきた。おにぎりを2人で食べるがやけにがつつくクリスに陽介は驚くのがあった。

「すみませんおやつさん。急に来てキッチンまで貸してもらって」

「気にせんでよい。この店も物好きな常連くらいしかこんからな。たまの来店ぐらいがちようどええわい。それにしても、えらい別嬪な娘さんじゃの。あの子ら以外にそんな可愛らしい娘さんと知り合いだったとはのう」

「・・・別嬪・・・」

「まあ、この子は家族みたいな友人、って感じですかあだだ、どうして俺の脇腹を小突くんだクリス？」

「う、うっせえ！」

「ほっほっほっ、仲が良いようで何よりじゃ。さて、食器は儂の方で片付けよう。おぬしらはゆっくりしていくとよい」

空になった皿を持ちキッチンの方へ石田は向かい、陽介とクリス、2人の間に一瞬、間ができるが、さて、と陽介が口を開いた。

「これからどうする？ 俺としてはこのまま二課に向かおうと思うんだが」

「・・・わりいけど、まだあたしは二課には行けない。決着をつけなきゃいけない相手がいる」

「それって、例のフィーネってヤツかい？ 何者なんだ？」

「フィーネは・・・、フィーネのことはよく分からない。あたしが日本に帰ってきた時に会って、あたしの力が必要だって言ってくれた。バ

ルベルデから帰って来ても、パパとママはもういない。帰ってきたところであたしの帰る場所はもうなかった。だからフィーネの言葉に乗った。争いの火種を消す、そのためにあたしは戦った。・・・戦ったつもりでいた。けど結局、あたしはフィーネに見捨てられた」

「クリス・・・」

「でも、でもフィーネは言ってたんだ『痛みだけが人を繋げることができる』って！ あたしとフィーネの間に絆なんて確かなものはなかったと思う。役目を全うできなければお仕置きもされた。だけど、繋がってたんだ。糸みたいにか素朴てもひとりぼっちになったあたしはフィーネと繋がっていたんだ！ なのに・・・」

その繋がりは家族や友人と結ぶような絆ではないのかもしれない。だが、クリスにとっては違うのだ。家族を失って独りになったクリスには唯一の繋がりがだった。だから思うのだろうフィーネのことを憎みきれない。バルベルデで自分を虐げた『大人』とは違うと、だけど、この胸のもやもやを上手く表現できない。自分はフィーネをどう思っているのか、どうしたいのか。

「よし、そんじや行こうか。フィーネのところに」

「へ・・・？」

「クリスがフィーネに対して複雑な思いを持つてるのはわかった。なら会いに行こう。もしかしたら顔を会わせればなにかハッキリするんじゃないか？」

「でも」

「大丈夫だって、癖がありそうな人っぽいけど根っからの悪人ってわけじゃなさそうだし。それに俺もフィーネには一言お礼も言わなきゃならないしな」

「お礼って、何でだよ」

「だってさ、フィーネがクリスを保護？ してくれたから俺とクリスはこうしてまた会えたんだ。あんまり誉められたやり方じゃないと思うけど、それでも言いたい、クリスを助けてくれてありがとうってね」

「・・・ハア・・・、どんだけポジティブ思考なんだよあんたは」

「なはは。おやつさ〜ん！ おにぎりとお茶代、ここに置いときますね〜！」

「お〜」

「待てよ！ 何か行く気満々だけど、フィーネがどこにいるのかわかんのかよ」

「わかんない」

「おい！」

「だけど、クリスマスならわかるんじゃないか？ フィーネがいそうなところ」

「ぬ、ぐ・・・」

なにやらトントントン拍子で物事が進んでいく。そういえば、子供の頃からこんな感じだったなあと改めて思い出す。

「変わってねえんだな、ヨーには「ん？」

「あ〜もう！ わかったよ！ 案内するよ！ だけどな、そこにフィーネが居るかはわかんねえぞ！」

「おう、まずは行ってみようぜ！」

警戒心のないこちらを信じきった眩しい笑顔。雪音クリスマスという個人を信頼するその笑顔に一瞬戸惑うが呆けている場合ではない。

2人は店を出る。いつの間にか呼んでいたロードセクターに2人は乗り、フィーネがいますとおもわれる場所へ走りだした。

第二十話 合流のちに決戦

山の中の公道を一台のバイクが疾走する。ロードセクターと呼ばれるバイクに2人の人物が乗っていた。黒山陽介と雪音クリス。ロードセクターの主である陽介が運転しクリスは陽介の後ろに乗り、目的地、フィーネがいるとおもわれる拠点へ向かっていた。

少しとばすからしっかり掴まってね。と念を押され少し大袈裟じゃないかと思うクリスだったが、その考えはあつさり吹き飛んだ。恐らく法定速度ギリギリの速度で走るバイクの風圧に驚き陽介にしがみつく。しばらくして、このバイクのスピードに慣れてきた頃に自分がどういう状態なのかを理解した。

自分は今、陽介に抱きついてる。

今さらとも思うかもしれないが、雪音クリスはまだまだ思春期真っ盛りの女の子。あまり素直になれない女の子だ。

多少陽介には信を置いているが、年頃の女の子として男性に身体を密着させる行為には羞恥を覚えた。慌てて身体を離そうするが、ロードセクターから落ちると勘違いした陽介は離れようとするクリスを更に引き寄せた。

(ちよおッ!?)

自身の身体が彼の身体に更に密着する。むにゆう、とクリスの胸が彼の背中に押しつけられてしまう。顔が熱くなる。こっちの気も知らないで！ と、内心憤慨しながら陽介の顔を覗き見るが、等の彼は特に顔色を変える様子もなく運転に集中していた。

なんだかカチンときた。

自分で言うのも何だが、自分の身体は結構女らしく成長していると思う。身長は平均よりチョッビツと低いかもしれないが、その、胸はデカイと思う。昔、テレビか何かで女の胸は武器になるとかなんとか

言っていたような気がする。なのにその反応は何だ？　と黙ってしまっただ。

そういうえばと、あの喫茶店の店長が言っていたことを思い出す。『あの子ら以外にそんな可愛らしい娘さんと知り合いだったとはのう』

あの子らとは誰のことだろうか？　思い当たる節があるとすればガングニールと天羽々斬の装者、それと自分と友達になりたいと言ってくれた小日向未来という女の子くらいだ。

なんだろう、不意にあの子達と楽しそうに過ごしている青年の姿を妄想してしまった。自分で勝手に描いた妄想だがその光景を思い描いてなんだが無性に腹がたった。

「・・・フンッ！」

「とお!?　どうしたクリス？」

「なんでもねえよ！」

「??？」

腹がたつたので、クリスは陽介の腹に手を回し抱き締めた、ぎゅうーと力を込めて。そんなクリスの様子を不思議に思いながらも陽介はロードセクターを目的地に向け走らせた。

☆

「ここか・・・」

山の中を数十分走り目的地に辿り着く。目の前に見える豪邸とも屋敷ともとれる建物。パツと頭に浮かんだのはお金持ちの別荘だな、と呑気な感想を抱く。ここに件のフイーネがいる、もしくは何かしらの手がかりがあるのだろう。

「なあクリス、どうしたんだ？」

「なんでもねえよ・・・」

この場所についてからクリスの様子がおかしい。ロードセクターで移動中、途中からかなり強めに抱きついてきた。少しとばしすぎたかなあと思うが移動中クリスはおとなしかった。

しかしこの場所についてからはすぐロードセクターから降り、うづくまつて何やら、あゝあゝと唸っている。これは・・・、

「あ、酔ったかクリス!? すまん、やっぱりとばしすぎたな」

「ちげえよ! この鈍感バカツ!」

「あれ?」

全力の否定が返ってきた。銀髪を逆立てシャーツ!と唸る様は全力で威嚇する猫のようだ。陽介本人は何故怒鳴られたかわからず、クリスは己の行いを思いだし悶絶していた。

(なにをやってんだあたしは・・・ツ!?)

身体をくっ付けることに恥ずかしさがあつた筈なのに、謎の嫉妬心が沸き上がり羞恥心を何処かに投げ捨て陽介に身体を密接させた。自身の体温と彼の体温を感じ、ポカポカしてあつたけえなあゝと温もりを堪能、そして気がつけばフイーネの拠点に到着していた。

なにをしてるんだと思う。クリスが行ったのは身体を密着させて互いの(一方的に)温もりを堪能した。ただそれだけだった。帰ってきた羞恥心によって自分はなんだか恥ずかしい思いをしたというのに彼、陽介は特に変わった様子になかった。それがなんだかむかつい

た。

自分と彼の関係は少し奇妙だと思う。友人というには少し遠く、家族というには少し近いそんな曖昧な距離感を持つが大切な人であるのはかわりないが、

(・・・って、今はそんなこと考えてる場合かよ)

頭を振り自分の頬をパチンと軽くはたく。ここにきた目的を忘れてはいけない。

「よし、行くぞ！」

「・・・待った」

「ッ!? なんだよ!」

勢いよくフィーネの屋敷に乗り込もうとしたクリスだが陽介はそれを止めた。勢いを削がれ思わず怒鳴るが陽介の顔を見れば険しい表情で屋敷を睨みつけていた。そして陽介はこう言った。

「・・・血の匂いがする」

改造人間として強化された嗅覚がそれが確かなものだと言介に実感させた。

罨を警戒し、陽介とクリスは慎重に屋敷に踏みいる。フィーネは完全聖遺物ソロモンの杖を所持していることからノイズによる奇襲を頭に入れておかなければならない。また、フィーネが怪人をけしかけてきた以上怪人の襲撃にも注意が必要だ。

(おかしい・・・)

慎重に屋敷の奥へ進んでいくが、人がいる気配はなく、ノイズや怪人による襲撃の気配も感じない。あるのは屋敷の奥から漂う血の匂

いだけだ。しかし油断は禁物。周囲を警戒しながら屋敷の奥へと進んでいった。

しばらく進むと大広間のような場所にでる。部屋には檻やら拷問器具などがあり異様な雰囲気を漂わせていた。だが、異様なのは雰囲気だけではなかった。

部屋のあちこちに血を流し横たわる人がいた。1人ではない、同じ格好をした人間が数人倒れている。

「おい！ 何が・・・くっ・・・」

銃などを装備しておりどう見てもカタギの者ではないが今は置いておく。近くに倒れてる人に駆け寄るが触った瞬間に冷たさが伝わった。遠目から見ても明らか出血多量、もう死んでいることがわかった。

「何が、どうなってやがる」

クリスも困惑している。フィーネと決着をつけるべく乗り込んだかつてのアジトには見知らぬ人間の屍が散乱しているのだ。状況が掴めなかった。

「ッ!? クリス、危ない!」

「え?」

衝撃、その後に一瞬、ぶわっ! と風が吹き荒れた。何が起こったかクリスが状況を確認しようとするれば、見知らぬ黒服の男がかかと落としをしているような態勢でいて、それを腕を交差させて受け止めている陽介の姿が見えた。

「どういうつもりだ、蛇川」

「おやおや、音信不通で行方不明になっていた黒川さんじゃありませんか。あなたこそ何故こんなところにな?」

「通信機が壊されて連絡できなかつたんだよ。それより、クリスに何しようとした?」

「んふふ、彼女は要保護対象ですからね。しかし、彼女はイチイバルの適合者でもあります。ギアを纏われると面倒なんで、少々手荒ですがちょっと気絶してもらおうと思っただけですけど?」

「デメエ」

「冗談ですよ、冗談」

「随分と笑えない冗談だ、な！」

突然現れた黒服の男、陽介に蛇川と呼ばれた男が薄気味悪く笑う。陽介は受け止めた蛇川の足をはね除ける。一触即発な空気になり、感じの悪い奴だとクリスは警戒する。

「蛇川、独断専行が過ぎるぞ！」

「あは、すいません司令。ちよっと足が滑りました。では、調査に戻りますね〜」

大声をあげ、数人の黒服を着た人間達を引き連れ大男が現れる。その声を聞き蛇川は離れた。筋骨隆々の赤い髪をした男にクリスは更に警戒心を上げる。その男がズンズンと近寄ってきた。

「陽介……」

「ゲンさん……えつと……」

陽介と二課司令、風鳴弦十郎の間に重い空気が流れた。先に口を開いたのは陽介だった。

「すいません！通信機が壊れちゃって連絡が出来ませんでした。けど、クリスのことをほうつてはおけなくて……」

「ふむ」

頭を下げ弦十郎に謝罪する陽介。そんな陽介とクリスを交互に見つめ弦十郎はやれやれと困った様子になりながらも口を開いた。

「とりあえずお前や彼女が無事でよかった。だが、何があつた？説明してくれるか？」

「はい。ええと——」

陽介はこれまでの経緯を弦十郎に語った。

「なるほど、事情は概ね把握した。それでお前達もここに来たのか。だが、一度本部に戻るなり別の手段で連絡をとったりすることは考えなかったのか？」

「あ……すいません……」

「まあ、お前とクリス君が無事だったのは良かったが、次からは気を付けてくれ」

「はい。……それで、この状況はいい……」

「・・・全ては、クリス君や俺達の傍に居た彼女の仕業だ」

「それって例の内通者ですか？」

「ああ、そしてそれは恐らく——」

「おっ、風鳴司令。これ見てくださいよ」

蛇川の間延びした声に注目が集まる。蛇川の元へ集まるとそこにある死体に『I Love You SAYONARA』と書かれた紙が貼られていた。

「どういうことだ？」

「誰に向けてのメッセージだ？」

「筆跡でも調べますか？」

「待ってッ！ 蛇川ッ！」

「はい？」

弦十郎の制止の声を出す間合わず、蛇川は貼られている紙を取る。すると、陽介がいる部屋が爆発した。

陽介は咄嗟にクリスを抱き寄せ伏せる。部屋が崩壊する程の爆発、その衝撃と崩壊してくる瓦礫に備えるが、一向に何もこない。不思議に思い顔を上げると弦十郎が拳を突き上げている姿があった。

「無事だな、陽介」

「ええと、はい」

いや、無事ではあるが。

確かにこの部屋で爆発が起きた。にも関わらず弦十郎の姿を見れば彼の服装は汚れ一つなく綺麗だった。

「爆発の衝撃は発勁でかき消した」

ええ、と心の中で弦十郎の超人的な身体能力に舌を巻いた。拳を突き上げている姿から落ちてきた瓦礫を殴り碎いたのだろう。普通なら無理だが、それができてしまうのが風鳴弦十郎という漢なのだ。

「皆、無事か」

弦十郎のその言葉に彼が連れてきた黒服の男達も姿を見せる。彼等も黒服が多少汚れている程度で大きな怪我を負っている者はいなかった。

「っと、クリス、大丈夫か？」

自分の下に引き寄せたクリスの様子を確認する。そんな彼女はこれでもかと目を見開き、口をパクパクとさせ、リングのように顔が真っ赤に染まっており、

「ちよちよちよちよちよちよっせいッ!」

「かふ」

綺麗な掌低が陽介の顎を捉えた。陽介の下にいたクリスはそこから抜け出し少し距離を置く。ぜえ、はあ、と肩で荒く息をしながら真っ赤になった顔を押しさえた。

(どうしちゃったんだあたしは!? 何でこんなに顔がアツい!? 何でこんなにドキドキしてんだッ!?)

アツくなる顔、早鐘を打つ心臓、それが何を意味するのか雪音クリスという少女はまだ分かっていなかった。

あいてて、と顎を擦る陽介、呼吸を整えるクリス、そんな2人を風鳴弦十郎はどこか微笑ましく見つめていた。

「司令」

「む、どうした」

「蛇川さんが見当たりません」

黒服の1人が弦十郎に告げる。崩壊した屋敷の中で蛇川の姿だけが見当たらなかった。この場にいる全員が周りを見渡すが見つからない。瓦礫の下敷きになってしまったのかと心配する。

グニツ、とクリスは何かを踏んだ。下を見る。人を踏んでいた。

「すいませくん、足、どけてもらえませんかね」

「うわあああッ!」

驚きの声をあげながらその場から飛び退く。クリスに踏まれていた人物、蛇川悟はガラガラと自分の上に乗っかっていた瓦礫を退かし、ふう〜やれやれ〜と服の汚れをはたき落としながら立ち上がった。

「お、おいあんた、大丈夫なのかよ?」

「いえいえお気になさらずに、私もそれなり修羅場は潜ってきてるので大丈夫ですよ」

「そ、そうか」

「いや、それにしても、少し油断しちゃいましたね。しかし拠点を破棄するとはあちらさんも後がないんですかね？」

「・・・全員無事だな。一旦外に出るぞ」

弦十郎の言葉に従い陽介達は屋敷から出るのであった。

☆

「やっぱり、あたしはまだ・・・」

「そっか・・・あの、ゲンさん」

「まだ、一緒には来られないか？　なら陽介、しばらくクリス君と一緒にいてやれ」

「いいんですか？」

「彼女はお前と知古なんだろう？　ならお前と一緒にいた方がいいだろう。あと・・・、ホレ」

「おっと、あ、通信機」

「お前とクリス君の分だ。後で響君や翼に連絡をとってやれ、随分心配していたからな」

「はい。ありがとうございます。ほら、クリス」

「お、おう。・・・カ・ディングル」

「む？」

「カ・ディングル！　フィーネが言ってたんだ。それがなんなのかわかんねえけど、もう完成している、みたいことを・・・」

「カ・ディングル、か・・・。ありがとうございます。教えてくれて」

「別に、あたしは・・・」

「後手に回るのは終いだな。此方から打って出てやる。陽介、何かあれば連絡する。クリス君を頼むぞ」

「分かりました、ゲンさん」

弦十郎達は車に乗り込みその場から去っていった。陽介とクリスだけがその場に残った。

「さて、どうするクリス？ 一度ストーンに戻るか？」

「・・・いいけどよ、良かったのか？ その、二課に戻んなくて」

「大丈夫だよ。クリスを一人にしておけないしね」

「あたしは子供じゃねえぞ！」

「だったら一緒に、二課についてきてくれてもよかったんだけどな」

「うぐ・・・いいから、行くぞ！」

「はは、わかったよ」

2人はロードセクターに乗り、再びストーンに戻ることにした。

☆

おやおや、おかえりと笑顔で迎えてくれた喫茶店ストーンの店長、おやっさんに礼をしつつ陽介とクリスは店の奥の席に腰掛ける。クリスは出されたお茶を飲みフウ、と一息つく。

陽介は通信機を起動し連絡をとった。相手は、

『ヨウさんのおバカッ！』

「oh・・・」

通信の相手、立花響の元気な声が聞こえてきた。怒鳴り声が聞こえクリスはお茶を飲みながら一瞬ビクツ、と震えるが再びお茶を飲み始めた。

「ごめんね、響ちゃん連絡が遅れて」

『まったくですよ！ みんな心配してたんですからね！』

もう！ と通信機越しでも分かるくらい身体全部を使って、私怒ってますよと怒りを表現している響の姿が想像される。

『それで、今どこにいるんですか？』

「今はストーンでちよつと休憩してるよ」

『ストーンですね！ わかりました。学院が終わったら行きますからそこを動かないで下さいよ！』

「うん、わかったよ」

『あ、それと、クリスちゃんはどうなりました？ クリスちゃんを追いかけていったって話でしたけど』

「ああ、クリスなら今一緒にいるよ」

『一緒に？ ていうか、え、呼び捨て!! 2人はどどどどういう関係なんですか!! ああ、待ってくださいクリスちゃんが一緒にいるならクリスちゃんに変わってもらえませんか直接聞きたいので!』

「まあまあ落ち着いて、慌てなくてもストーンに来れば聞けるから」

「私は今聞きたいんです！ え？ あ、ちよ、未来ウー!!」

響の声が遠くなったと思えば、別の声が聞こえてきた。

『こんにちは、陽介さん』

「こんにちは、未来ちゃん」

どうやら小日向未来が通話を変ったようだ。遠くから、未来う返してよう、と響の声が聞こえてくる。

『響は私が落ち着かせておきますから、ストーンでまた会いましょうね。・・・あ、それと、おかえりなさい陽介さん』

「・・・うん、ただいま」

『フフツ。じゃあまた後で』

ええ!! 待って未来、きら――

響の声が途中で途切れ通信が切れた。

——ただいま、か……。いつぶりだろうそんな言葉を言うのは、今度は翼に連絡をとろうとした。するとジトーとした目つきでクリスがこちらをみているのに気付く。どうかした？ と聞いても、別にとはぐらかされた。通信機が鳴る。モニターに表示される発信者の名前は風鳴弦十郎だった。

「はい、陽介です」

『よし繋がったな。陽介、クリス君は一緒にいるな？』

「はい、いますよ。・・・何か動きが？」

『ああ、東京スカイタワー付近に大型のノイズが発生した。数は4、飛行型だ。お前達にも現場に向かってもらいたい』

「わかりました、すぐに行きます！ クリス！」

「チツ、しゃあねえな」

『響君や翼も現場に向かっている、頼んだぞ』

口では悪態をついているがクリスは席を立つ、準備はできているようだ。すぐにストーンから出て2人はロードセクターに跨がる。向かうは東京スカイタワー、そこに向かってロードセクターを走らせた。

「見えてきた」

「へっ、デカブツがふよふよしてやがる」

ロードセクターを走らせること数分、スカイタワーとノイズが視認できた。急ぐべくロードセクターのスピードを上げようとした時、道路が爆ぜた。

「くっ」

「うわッ!？」

ロードセクターを急停止、進行方向の道路が煙で覆われた。陽介の目には見えていた。黒い竜巻、渦巻くエネルギーが道路を爆発させたのを、そしてそんなことをしてくる相手が近くにいと、煙の向こうから人影が近づいてくる。右手に剣を左手に盾を持ち、魚の鱗のような鎧を着た人、怪人を、

「来やがったか」

怪人ビルゲニア。煙が晴れ、その姿が目に入る。ビルゲニアは怪しい笑みを浮かべて陽介を見つめるのであった。

第二十一話 VSビルゲニア

「1つ、聞かせてちょうだい」

「何だ？」

金髪の女が人の形をした異形に話しかけていた。異形、怪人は緑色の液体で満たされたカプセルのような入れ物に入れられている。人1人は余裕で入れる大きさのこのカプセルはポッドと呼ばれている。奇妙な絵面だ。だが今この場にいるのはこの2人だけ、何も気にする必要はなかった。

「あなた、何故私に従うの？」

「ほう」

「私は、あなた達怪人を自分の戦力にするためにあなた達を再生、いや複製した。採取した怪人達の細胞を培養したけど、ほぼ完全に複製できたのはクモ怪人だけだったわ。他の怪人の大多数は培養中に細胞が死滅してしまうような戦力を整えられなかった」

金髪の女、フィーネは続けて言う。

「クモ怪人にしても、外にだした途端に私に歯向かってきたわ。まあ、駒がちゃんと動いてくれないや困るから複製怪人には脳にコントロール装置を埋め込んでいるけど」

「ならあやつはどうだ。コウモリ怪人の」

「あれはまた別口よ。人間に怪人の細胞を注入したらどうなるか実験したのよ。いろいろと面倒のない人間を集めた結果、唯一成功した実験体があればただだけよ。まあ、あれも適合した途端暴れまわったけどね」

なるほどな、とビルゲニアは思う。

あのコウモリ怪人を見た時にビルゲニアは違和感を感じていた。人のようで人でない、しかし怪人のようで怪人でもない。半端に混じって安定していないそんな印象だった。

「それよりもあなたよ」

キツ、とファイネはポッドの中のビルゲニアを睨み付ける。

「どの怪人も反抗的でコントロール装置で操るしかなかった。だけどあなたは違ったわ。不完全な複製とはいええ、あなたは目覚めた時から私に従順だった。コントロール装置は使っていないのに。何故なの？」

ファイネにとっては当然の疑問だった。今までの傾向から怪人達を従わせるには脳に仕込んだコントロール装置を使うしかなかった。このビルゲニアも例外ではない。なのにこの怪人は、ある日突然目覚めた。また暴れるのかと思えば主君に使える騎士のようになしなかった。それが逆に不気味だった。何か裏があるのではないかと今まで泳がせておいたがそんな様子は見受けられなかった。

「フツ、そうたいした理由はない」

ポッドの中でビルゲニアが鼻を鳴らす。

「恩だ。私が貴様に従うのは単純に恩返しだよ」

本当か？ 疑念が深まる。しかし、ポッドの中の怪人はそれが当たり前かのように答える。

ファイネが調べたところ、このビルゲニアという怪人はかなりの野心家だと思っている。暗黒結社ゴルゴムがまだ健在だった頃、仮面ライダーBLACKと幾度となく激闘を繰り広げる一方、「三神官」と呼ばれる幹部の作戦を妨害していたとも調べている。

己の地位を確立しつつ、いずれは創世王になろうとした怪人、それがファイネが調べあげたビルゲニアという怪人だ。

「ふむ、まあ信用されんのも仕方ないだろう」

「ええそうね。あなた達怪人達に「恩返し」なんて概念があるなんて驚きだわ。で、何が狙いなのかしら？」

「そう睨むな。このポッドに入っただけならこの身体は一週間ともたない。貴様の存在そのものが私にとっての生命線だ。折角機会を得たというのに下手に反抗して操られては望みも果たせんからな」

「あら、そんなに仮面ライダーにご執心なのかしら」

「そうだと。それが私に残された最後の願いだ。だから感謝しているのだ。貴様が駒としてこの身体を用意しただけだとしても、

今、私はこうしてここにいる。故に、だ。存分に利用するがいい。貴様の邪魔をする者がいるなら全て斬り捨てよう。そのうえで私は、私の願いを果たしてみせよう！」

ほんの少し気圧された。この怪人には意地がある。なんとしてみ己の願いを叶えようとする意地が、自分にも叶えたい望みがある。何度も死に、何度も甦り、時間をかけて準備を進めてきた。この怪人にもあるのだ。叶えたい願い、目的が。

「フフツ、フハハハハツ！ いいわ。ならばやってみせなさい。仮面ライダーを倒してみせなさい！」

「ああ、もちろんだ」

（倒す。倒してみせる。そして、私は……）

☆

「クリス、先に行ってくれ」

「はあ!?! 何言ってるんだよ!?!」

クリスの反論を耳にしつつも陽介は今の状況を整理する。

スカイタワーは目前だという所でビルゲニアが道を塞ぐ様に現れた。スカイタワー上空にいる大型のノイズは空から落ちた黄色い閃光と地上から空へ走った青い閃光でその数を4体から2体に減らしていた。

——響ちゃんと翼ちゃんだ。

2人が戦っているのを確信する。しかし、残った大型のノイズは

その身体から通常固体のノイズを次々と投下していた。まるで空中母艦が要塞だ。凄まじい数のノイズが投下されていた。

「頼むクリス。俺の仲間を助けてほしい」

「あいつは、どうすんだよ」

「奴の相手は俺がする。ここで2人共足止めを食らうわけにはいかない」

「あたし達2人であいつを倒すのはどうなんだよ？」

「それもいいけど、わざわざ待ち伏せていたんだスカイタワーに何かあるんだきつと、だから頼むよ」

「ちえ、しゃあねえな。気いつけるよ？」

「ああ、クリスもね」

「おう。——Killiter Ichai val tron

若干渋った様子だがイチイバルを纏いクリスは跳ぶ。ビルゲニアの頭上を軽々と飛び越えてスカイタワーに向かっていった。

「茶番は終わったようだな」

「こっちの動きを待ってくれるなんてな。どういふつもりだよ」

「あの小娘が行ったところで結果変わらんだだけだ」

「どうかな。今のクリスならきつと響ちゃん達と手を取り合える」

「ほう、随分と信頼しているではないか」

「当たり前だ。もう仲間なんだからな」

「ふん、馴れ合いの間違いだろ。そんな様で俺に勝てるだけでも？」

「あの頃」の貴様はもつとギラついて闘争心に満ち溢れていたというのに」

「勝つさ」

「」

「お前がどんな理由で立ち塞がろうと、俺のやることに変わりはない。自由と平和」を守る為にお前を倒す！」

ロードセクターから降り、陽介は構える。

「変身ッ！」

変わる。人の身体から闘う為の姿へと変わっていく。

「仮面ライダー・BLACKツ!!」

黒い装甲が身を包み隙間から余剰エネルギーが蒸気として噴き出す。変わった。そのことが確認でき、ビルゲニアは自分の口角が上がっていることに気が付かなかった。

BLACKは拳を握り、ビルゲニアは剣と盾を構えた。一瞬、音が消える。そして、次の瞬間には地面が爆ぜた。

☆

拳が喰る。盾が響く。剣が振るわれ、手刀で反らす。互いに退かず、近距離での攻防は一進一退を極めた。

BLACKが殴り掛かれれば、ビルゲニアはそれを防ぐ。反撃の剣をビルゲニアが振るえば、BLACKはそれを時にスウエーして避け、時には手刀にキングストーンエネルギーを込めそれを受け流した。

「ダア！」

「セイツ！」

幾度かの攻防の末、先に仕掛けたのはBLACKだった。ライダーチョップ。右手を手刀の形にし、キングストーンエネルギーで強化。その威力は直径10センチメートルの鋼鉄を切り裂くほどである。

ビルゲニアは慌てずこれを迎撃。タイミング的に盾が間に合わないで剣で迎え撃つ。手刀と剣の鏝迫り合いだ。

互いに力を込め押し合う。押せば押し返され、押されれば押し返す。ここでBLACKは空いた左手でビルゲニアの右手首、剣を持っている手首を掴む。右手を持ち上げ体を潜り込ませ足を払う。

「ダアアリヤッ！」

背負い投げ。力の限り放り投げた。

しかしビルゲニア投げられるも、空中で体を捻り鮮やかに着地。お互いの距離が開くだけ

「キングストーンフラッシュュッ！」

閃光。同時に光が押し潰してくるような衝撃が盾を構えたビルゲニアに襲いかかった。

「ぬう、用途を変えてきたか」

自分が知ってるキングストーンフラッシュュは目眩ましか、相手の術を破る光だ。しかし、聞いた話では一度死んで、甦った後の仮面ライダーBLACKのこの技は破壊光線にもなるモノだと聞いている。

「だが、この程度！」

閃光を振り払うように盾を振り回す。光と衝撃がかき消され、

「ライダーキックッ！」

必殺の蹴りを放つBLACKの姿が見えた。

「ッ！ チィッ！」

盾を構える。稲妻のごとき一撃がビルゲニアの盾に突き刺さる。僅かな均衡の後、勝ったのはBLACK。盾ごとビルゲニアを蹴り飛ばした。

BLACKは着地、ビルゲニアは地面を転がる。追撃の一撃を放つ為にバイタルチャージ、地面を転がっていたビルゲニアは突然地面から跳ねる。空中で身体を回転させながら剣にエネルギーを込めた。速かったのはビルゲニアだ。

「ビルセイバーダークストームッ！」

着地と同時に剣に込められたエネルギーを放つ。秒速200メートルの旋風がBLACKに迫る。直撃。チャージ中で無防備な

BLACKは旋風に呑まれた。だが、

「うおおおッ！」

風に身を任せ、BLACKの身体が高速回転する。そのまま回転しながら空へ昇る。

「なんだとッ!？」

「もらうぜ！ この風を！」

赤熱化した右足を伸ばしドリルのように回転しながら落下する。

「大旋風ライダーキックッ!!」

激突。咄嗟に構えた盾で受け止めるもガガガッ！ と掘り進むような掘削音が響きわたる。

「ぬうううううッ!!」

「オオオラアアアアアッ!!」

弾け跳ぶ。ぶつかり合った蹴りと盾はその中心で爆発が起きたような衝撃を生み出し、BLACKとビルゲニアを吹き飛ばした。

BLACKは上手く着地できず地面を転がり、ビルゲニアは無人の車に激突。その衝撃をもってか車は爆発、炎上しビルゲニアは炎に包まれた。

呼吸を整えながら炎上している車を睨み付ける。先ほどの一撃は虚をついたつもりだったが、しっかり盾で受け止められてしまった。吹き飛び、炎に包まれたビルゲニアだが、あれで倒せたとは微塵も思わなかった。

炎上する車を注意深く観察していると、不意に地面が揺れた。足がぐらつくほどの大きな震動。地震かと思ったがその答えはすぐに分かることになった。

「何だ・あれは・」

塔。そう見える巨大な建造物が地面の下から生えるように出現した。かなり離れた場所だが塔らしきものが不気味な雰囲気を感じているようにも感じた。

（あれが、カ・ディングル？ 何で地面から？ …… いやまて、あの

方角は、あれはどこから現れた!?)

塔の出現に驚くが、それよりも塔がどこから出現したのか気に

なった。あの塔が出現した方角にはリディアン音楽院と二課本部のある方角だ。嫌な予感がした。直ぐに向かおうとしたが、突然凄まじい熱風に襲われそれは叶わなかった。

「ぐう!?!」

全身を焼かれながら地面を転がる。熱風が襲ってきた方角を見る。炎上していた車からは火がなくなっていた。雨が降ったわけでもないのに何故火が消えた？ それはビルゲニアが自分ビルセイバーダークストームの技で炎を巻き込んだからだ。現に剣を突きだしながら焼け焦げた車から出てくるビルゲニアの姿が見えた。

「どうやら準備は整ったようだ」

「つてことは、あれが、カ・ディングルかよ。あんな塔を建ててどうする気だ」

「あれは塔ではない。砲身だ」

「砲身？ あれが砲身だとして、あんなバカでつかい大砲で何を射つんだよ」

「月だ」

「は?」

「今宵、月は穿たれ、新たな支配者が君臨する。あれはその為のモノだ」

「月を、だと？ 何でそんなことを!?!」

「それがフィーネの願いを叶える為に必要なことだからだ。呪詛からの解放やら、破壊した月の破片による地上への被害など、まあいろいろあるが、あやつの本懐にとっては些細なことだ」

理解が追い付かなかった。現れた塔はカ・ディングルだった。しかし、あれは塔ではなく砲身だと言う。しかも月を破壊するというのだ。

普通ならばそんな突拍子のないことは不可能だと思うだろう。だが、眼前の怪人は自信満々だ。ハツタリ、ではないのだろう。本気だ。本気で月を破壊する気なのだ。

だが、まだわからないことが多い。あのカ・ディングルが月を破壊するというにも、放つ弾や稼働するのに必要なエネルギーはどうし

てるのか。電気とかでいけるのか？ いやしかし、あんな巨大な砲台を動かすのに電気で足りるのか？ そんなもの超常的なものでもなければ――

「ッ！ まさかッ!？」

思考していて気付いてしまう。カ・ディングルが現れた場所、そこは何処だ？ そしてそこには何がある？

「ハアッ!」

思考を遮るようにビルゲニアが襲いかかる。

「ふん、流石に勘づくか」

「使う気か、聖遺物、デュランダルを!」

「そうだ。あの不朽不滅の輝きは無限のエネルギーに等しい。そのエネルギーを利用した荷電粒子砲で月を破壊するのだ! そして、そんなことが出来そうな技術者に心当たりがあるだろうか?」

「了子さんかよ」

「ハハハハハッ! その、通りよお!」

「だとしても、何か理由がある筈だ。了さんがそんな」

「甘い奴よ貴様は、あの女は貴様が思っている以上に数奇な運命を歩んできたのだ。貴様の言葉で止まるものか! もう誰も、あの女を止めることはできぬのだ!!」

「ぐうあッ!？」

ビルゲニアの猛襲がBLACKを捉える。次々と振るわれる斬撃を何とか紙一重で避けていたが、遂に逃れられなくなった。逆袈裟斬り、左脇腹から右肩にかけて線が走り火花が散る。吹き飛び、地面を転がった。

――早く、カ・ディングルへ向かわなければ。それに確かめなきや、真相を了さんに。

思考が乱れる。集中が途切れる。BLACK自身は気付いていないが、明らかに動揺してしまっていた。突然のことで戸惑ってしまったのだろう。

「がっ」

だが、タイミングが悪い。その動揺を、その隙を見逃すビルゲニ

アではなかった。

B L A C Kは感じる。腹部に違和感を。自身の腹にビルゲニアの剣が深く突き刺さっていた。立ち上がったその瞬間に刺されたのだ。反射に近い反応で剣を引き抜こうとするがもう遅い。

「ビルセイバー——」

剣が回る。ビルゲニアは己が引き出せる力を愛剣に注ぎ込む。

「——ネオダークストーム——」

回転速度が上がる。回転するビルセイバーは凄まじい風を起し極小の台風が生まれる。身体の内側を剣先がかき乱す。とてつもない激痛がB L A C Kの脳髓を駆け巡った。

「クラッシュユツ!!」

「——ツ!!?」

そしてビルセイバーの柄をビルゲニアは殴る。おもいつきり、渾身の力を込めて、その衝撃をもってビルセイバーはB L A C Kごと吹き飛んでいった。

「ハアツ
ハアツ」

渾身の技を放ち終え、拳を突き出したままビルゲニアは荒くなった呼吸を整えていた。右腕が痺れる。やはりこの技はこの肉体には掛かる負荷が大きすぎるようだ。以前、使用した際は反動で右腕が崩れたが、今は「まだ」大丈夫なようだ。

ビルセイバーネオダークストームクラッシュ。そう名付けたこの技は、ビルセイバーに自身の魔力など込められるエネルギーを込め、それを弾丸のように相手に撃ち込む技だ。とにかくエネルギーを

込めるのでその過程でビルセイバーは何故か高速回転する。それは意図したことではないが、結果的に極小の台風となったビルセイバーを殴り飛ばすことで想定よりも高い破壊力を生み出すことができた。現に自分の目の前には文字通り台風が通り過ぎたような惨状になっている。コンクリートを抉り、木々を薙ぎ倒し、車が横転していた。

さて、どこまで吹き飛んだのやら。

見える範囲には仮面ライダーBLACKの姿は確認できない。だが、手応えはあった。確実に直撃した。吹き飛んでいくその様をこの目で見ていた。

右手を開き念じる。戻れ、と

何かが空で煌めき、ビルゲニアの元へ向かってきた。それを手にする。ビルセイバーが戻ってきた。

「フッフ」

笑みが零れた。だって仕方がないだろう。今この手にあるビルセイバーを見れば笑みが零れるのも仕方がないのだ。

刀身が赤黒く染まっている。まるでそう塗装されたかのように赤黒く染まっているのだ。それは血。誰の？ もちろん仮面ライダーBLACKのだ。確信だった。

「フハハハハハハハハッ！ やったッ！ やったぞ！ オレは遂に『勝利』したのだッ！ ハハハハハハハハハハハハッ!!」

高らかに笑いあげる。ビルゲニアの勝利の雄叫びが辺りに響くのだった。

.....

☆

あ、あ、まずったな、ちくし
く、そ、腹に、あな、あいて
カ・デイン、とめ、ねえ、と
ま、ずい、いしきが
光が、のび、て
ウ、タ

ビルゲニアの技によって仮面ライダーBLACKは倒れた。

力なく地面に仰向けで大の字で倒れている。その腹部には拳2
つ分の穴がポツカリ空いていた。そこにある筈の内臓器官はなく止
めどなく血が溢れ、血の池が出来上がっている。大きな赤い瞳も徐々
にその光が失われていった。

消えゆく意識のなかで、巨大な光の柱が天に昇っていくのが見え

た。

そして、ウタが最後に聴こえた。

それは、とある少女がウタった最後のウタ。命を懸けた世界に響く叫び。微かにだが、それはBLACKの耳に届いた。

しかしそれだけだ。既に彼に意識はなく、命の輝きは失われてしまった。

だが、彼の腰部にある王の石は静かに輝きだした。

□ □ □

第二十二話 そのころの二課地下

小日向未来は現状を整理しようと必死だった。

現在、彼女はリディアンの地下にあるとあるシエルターの一室にいた。この部屋には同級生で仲の良い3人の友達、板場弓美、安藤創世、寺島詩織がいた。彼女達が避難していたこのシエルターに入り込む形で未来は彼女達と再会した。

他には、二課司令、風鳴弦十郎、その二課のオペレーター、藤堯朔也と友里あおいが、あと他の場所の様子を確認しに部屋を離れている緒川慎次もいる。

チラリと未来は弦十郎の方へ視線を向ける。視線の先は彼の腹部、包帯が巻かれ血が滲んでいた。

何故、こんなことになってしまったのだろう。小日向未来は先ほどまでの出来事を振り返った。

それは突然だった。

なんの前触れもなくノイズが現れ、リディアンを襲撃した。パニックに陥る生徒達、彼女達の避難誘導を自衛隊の人と一緒に手伝い、他に逃げ遅れた人がいないか探している時に私もノイズに襲われてしまった。

間一髪というところで緒川さんに助けてもらい何とか二課行きのエレベーターに乗り込みノイズから逃げる事ができた。

だけど、エレベーターの天井を突き破り金色の鎧を纏った女の人が見え緒川さんに襲いかかった。2人の会話から信じられないこと

に一連の騒動の黒幕は、目の前の女の人、櫻井了子さんだった。

混乱してしまうが、私も、私に出来ることをしようと思った。どうにか了子さんを止めようとはしたけどなんの力も持たない私では何も出来ず、プロの緒川さんも追い詰められてしまう。

そんな私達のピンチに現れたのは二課司令の風鳴弦十郎さんだった。これまた天井を突き破って現れた弦十郎さんは了子さんを止める為に拳を握った。そこからは圧倒された。

弦十郎さんはその驚異的な身体能力で了子さんを追い詰める。天井を握り潰して足場にしたり、床を足で砕いたり、砕いた床の破片を蹴り飛ばしたりと、とてつもない光景を見せられた。この場にとあるクラスメイトがいれば「アニメじゃあるまいし」とツツコミを入れているだろう。それほどまでに弦十郎さんは凄まじい人なんだと実感しました。

ネフシユタン？ という超常の力を纏った了子さんを翻弄し、その岩山のような拳を了子さんに叩き込む。勝負あったと思った次の瞬間、弦十郎さんが了子さんの鞭に貫かれていた。

何がおこったかわからないまま事態は進行していった。お腹から血を流し倒れる弦十郎さん。それを踏みつけて弦十郎さんから端末を奪う了子さん。

「・・・殺しはしない。そんな救済をお前達に与えるものか」
吐き捨てるように言うのと了子さんは背をむけた。

銃声。私達の後ろから聞こえた突然の発砲音。了子さんの背中に銃弾が命中した。

「やくれやれ、やっとノイズから逃げきれたかと思えば、これはまたえらい状況ですね」

この場の緊張感を崩すような気だるげな声と共にその者は現れ

た。

緒川と同じ黒服に身を包み、胡散臭い笑みを浮かべながら歩みよってくる細目の男が、

「貴様ツ・・・」

「蛇川さん!？」

「はいはい。みなさん無事・・・というわけではなさそうですね」
緒川が男の名を呼ぶ。未来はほぼ初対面だが緒川の様子から見て味方なのだと思った。

「ん、司令がやられてるなんて驚きですが、仕方ありません。
もう一仕事するのでしょうか」

「ふん、貴様に何ができ——」

銃声。ファイネの口の中に弾丸が放り込まれた。

「ツ!! そんなものお！」

「ほいっと」

「な・・・、グツ!？」

喋りかけた途中で問答無用で弾丸を撃ち込まれる。思わぬ衝撃でのけ反るが、ネフシュタンの鎧を纏ったファイネには通じなかった。しかしファイネが体勢を戻すと蛇川は閃光グレネードを投げる。その眩しさに視界を失う。

視界を失った一瞬、蛇川はファイネをソバットで蹴り飛ばした。首を狙った一撃。ファイネは壁際に叩きつけられた。しかしファイネにダメージはない。蹴りを首に直撃しながらも弦十郎ほどの威力はなかった。

「貴様程度が私を止められると——」

「これ、なぐんだ？」

蛇川はぽくん、ぽくんと手のひらで何かお手玉していた。それはファイネが弦十郎から奪った端末だった。

「ネフシュタンの力で無理矢理扉を破壊しないのは、まだその力を制御できていないのか、あるいは破壊する為の力は、扉の先にあるものを傷つけてしまう恐れがあるからか、ですかね」

チツ、と内心ファイネは舌打ちする。癪だがこの男の言うとおり

だった。扉を先にあるもの、完全聖遺物デュランダルを万が一傷つけ、何らかの不備がおこってしまえば、ここまで進めてきた計画が台無しになってしまう。

この扉を破壊するのはネフシユタンの力を使えば可能だが、便宜上セキリユテイの関係で頑丈な作りをしている為、無理矢理破壊するのはためらう。

そのため櫻井了子か、二課司令風鳴弦十郎の端末でのみ扉のロックを解除する仕組みになっているのだ。自身の端末は緒川の銃撃で破壊された為、今蛇川が持っている弦十郎の端末がどうしても必要なのだ。

「さてさて、緒川さん、小日向さん、今のうちに司令を連れてここから離れてください。いくら司令でも止血させなきやまずいでしょ？」

「蛇川さんは？」

「彼女、どうやらこれ端末が必要なようですからね。私が足止めしときますよ」

「危険です。避難するなら全員で」

「ん、それを彼女が許しますかね」

言葉の終わり際にネフシユタンの鞭が蛇川に迫る。ヒラリ、と身を捻り結晶が連なったような鞭を避けた。

「ほら、議論している暇はないですよ」

「……………わかりました。お気をつけて。……………未来さん、すいません。手を貸してください」

「は、はい」

いろいろと勝手に事態が進行しプチパニックに陥っていた未来だが、緒川の声にハッ！ となり2人で弦十郎を担ぐ。銃撃と鞭が振るわれる音を聞きながらその場から離れていった。

「やれやれ、行ってくれましたか」

「貴様、どういふつもりだ」

「はい？」

「ここで私と事を構えても貴様に得はあるまい。今さら正義に目覚めた訳でもないだろう、多重スパイの貴様が」

「んふふ、そうですね。まあ確かに、『正義』なんて大層なものを私は持ち合わせてないですよ。しかし、仕事仲間を見捨てるつもりもありません」

「フツ、仲間か、どの口が言うのか」

「ええそうですね。あなたと米国政府のパイプを繋いだり、広木大臣の移動ルートをうっかり漏らしたり、暇人を勧誘したりと、みなさんに知られてしまったら私、嫌われてしまうかもしれませんね」
自分が行った行為を悪びれる様子もなくケラケラと笑いながら蛇川は語る。

「・・・さっさとその端末を此方に渡せ。そうしたら見逃してやる。貴様に構っている時間はないのだ」

ここで時間を無駄にすることはフィーネには耐えられなかった。何よりこの男とこれ以上会話するのは嫌悪感が増す一方だった。

「えー、そんなこと言わないでくださいよ。私はもう少しあなたと遊びたいんですよ」

しかし蛇川は、そんなフィーネの内情を知ってか知らずかからかうように言葉を続けた。

ため息をこぼしフィーネは鞭を振るう。蛇川はまだ何か言いたそうだったが、そんなことはしらんとばかりにフィーネは蛇川をさっさと排除して端末を取り返すつもりだった。

「おやおや、せつかちですね」

「な!?!」

だが蛇川はフィーネの目の前にまで来ていた。2人の距離は3〜4メートル離れていた距離だったが、フィーネが振るったネフシユタンの鞭を蛇川は鞭の側面を這うように移動した。

常人離れた動き。先ほどの弦十郎のような理不尽な動きに驚きを隠せない。いや、それにしてもあまりにも人間離れた動きだ。これではまるで――

「あら、こんな時に考え事ですか」

口内に銃口を振り込まれる。抵抗は間に合わず、引き金が引かれる。3発、撃たれた。

衝撃はあった。だが、痛みはない。ネフシユタンと融合したフィーネの体はその内部も超常的な防御力を発揮していた。ニヤリと笑い、鞭を振るう。

「あらら、やっぱりダメですか」

ひよい、と鞭を躲し蛇川は軽口を叩く。弾切れになったのか手にしている銃をポイツと投げ捨てた。

「無駄なことは止めておけ。どうあがいても貴様に勝ち目などないぞ」

「まあまあ、そう焦らず。もう少し付き合ってくださいよ」

フン、と軽く鼻をならし鞭を振るう。今度はスピードもパワーも上げて蛇川に襲いかかる。これならば仕留められる。奴もそれなりに身体能力に自信があるようだが、風鳴弦十郎ほどではあるまい。この一撃で奴の体は貫かれる――

蛇川の姿が消えた。鞭が虚空を突く。

「んふふ♪」

背後から声。ふりむ、脇腹から痛みと衝撃が走った。

「ぐ、が!?!」

なんだ!?! このパワーはツ!?!。

脇腹を蹴られ壁に叩きつけられる。嫌らしく笑う男を忌々しく睨みつける。

「おやおやおやどうしました? そんなに怖い顔をして、なにか

おかしいことでも？ クフフフフ！」

「貴様、何者だ！」

「何者？ 貴女も知ってるじゃありませんか。私の名前は蛇川悟。二課所属のエージェントですよ。まあ、知ってのとおり多重スパイでもあるんですけどね、ウフフ！」

腹が立つ。仕留める筈の攻撃は当たらず、風鳴弦十郎の拳に匹敵するのではないかと思う蹴りの一撃。そして何よりもあの笑い声が無性に腹が立つ。

「・・・いいだろう。付き合つてやろう貴様の遊びに、代償はその命がなあ!!」

「アハハッ！ ではでは、少しの間ですが楽しんでいきましょうか！」

ゼエゼエと少しばかり荒くなった息をフィーネは整える。フィーネは握りしめた端末を目にして少し安堵する。続いて廊下にある煤の山を見て深呼吸をした。

「最初からこうすればよかったのだ」

馬鹿な事に付き合つたと軽い自己嫌悪に陥る。だが、頭を振り直ぐ様次の行動に移るのだった。

蛇川悟は死んだ。完全聖遺物ソロモンの杖によって呼び出されたノイズによつて煤と成り果てた。

フィーネが繰り出す攻撃を蛇川は余裕を持って回避していた。鞭を振るえど当たる気配はなく、逆に距離を詰められ蹴りを入れられる始末。しかし、蛇川の攻撃は明らかに手加減されていた。

蹴りを頭、胴体などに受けてもさほどダメージはなく、此方をおちよくるだけのヤル気のない攻撃。それがまたフィーネの怒りを昂らせる。勢いを増すフィーネの攻撃、縦横無尽に振るわれるネフシユタンの鞭だが、肝心の蛇川にはカスリもせず、床や壁を砕くだけだった。

薄気味悪い笑い声も相まってフィーネの怒りが頂点に達しようとした時に、フィーネは思い出した。自分が人間に対する絶対抹殺兵器を司る完全聖遺物を所有していることに。

ソロモンの杖を取り出し、ノイズを召還。あれま、こいつは不味い、と顔が強張る蛇川を見れたのは優越だった。どれだけ超人的な身体能力を持つていようと蛇川も所詮は人、ノイズに対抗できる手段など持ち合わせてはいなかった。

襲いかかるノイズから必死に逃れようとする蛇川の姿は実に不様だった。動きが緩慢になった蛇川の右手首をネフシユタンの鞭で切断。右手に持っていた端末を奪い返す。

右手首を斬られ、苦痛の悲鳴をあげる暇もなく蛇川はノイズに押し潰され、煤へと変わった。その現物、蛇川だったものが目の前にある。

「あつけないものだ。ここに来なければ少しは息長らえたものを」

そう呟きフィーネはデュランダルが保管されている部屋へ向かう。もう彼女を止められる者はいなかった。

避難した一室の生きている電源を利用し外の状況をモニターで見える。荒い画質の映像を食い入るように小日向未来は覗き込む。

目に映るのは崩れたりディアン学院の映像。響と過ごした大切な日常がもう見る影もなくなっていた。その中で一際目立つ巨大な「塔」。そして、黄金の鎧を纏った了子さん。

彼女があそこにいるということはあの場に残ったあの人はどうなったのだろうか。嫌な想像が膨らむが今は無事を祈るしかない。

彼女、了子さんに相對するかのように3人の少女が現れ、戦いが始まった。響と翼さん、それにあの子はクリスだ。みんな了子さんを止めるために戦ってる。だけど、

「……いない……」

いない。あの場に、こういう場面に駆けつけて来てもおかしくないとおある青年がいない。何故？

(陽介さん……)

両手を握りしめ祈る。今の彼女にはそれしかできない。彼女達の、彼の無事を祈る。モニターに映る激化する戦闘を見ながら小日向未来は祈った。

第二十三話 嵐の拳

始まりが何時だったかはもう覚えていない。

封印されながらも思念体を飛ばし、外の世界を観察しながらオレは奇妙な女を見つけた。

その女は祈っていた。有象無象が無駄が増えていくなかでその女は誰かに向かつて祈っていた。

何を祈っていたかは知らん。だがその女の念は、なんというか、迷いがなかった。とても強い念を込め祈っていた。ここにはいない誰かに、遙か彼方遠い空を見つめながら……。そんな祈り続ける女をオレは見続けていた。

しばらくして女が死んだ。何故死んだかはオレもよく知らない。ニンゲン共の事情など知ったことではないからな。だが、あの女を観察できなくなったのは少し残念だな。

しばらく時が経つと強い念を感じた。この感じ覚えがある。念を飛ばす者を見つける。姿はまるで別人だが、オレにはわかった。この女は、以前見つけた女と同じ念を込め祈っていると。オレはまた祈り続ける女を見ていた。

またしばらく時が経つ。女は死んだ。今度は寿命だった。いつたいあの女は何を祈っていたのだろうか。思念体の状態では見るだけで話すことなどできないからな、何とも歯痒い。結局、あの女が何を祈っていたかは分からずじまいだった。

……何故オレは歯痒く感じたのだ？

再び時が経つ。これで何度目は分からぬがどうやらオレが見つけたあの女は「転生」を繰り返しているらしいことがわかった。

定期的に感じる強い念はやはり別人ではなくあの女のものであった。何度も、何度も何度もあの女は転生を繰り返していた。死んで、

生きて、死んで、生きて、いったい何があんな女を掻き立てるのか。それが知りたくなった。

不思議なものだ、ある種の狂気ともいえるが、あんな女は相も変わらず転生を繰り返している。あんな女は何かを為そうとしている。それが何かはハッキリしないがあんな女は着実にその準備を進めている。

興味が湧いた。転生を繰り返してでも為し遂げたいことがあるあんな女に興味を湧いた。

だがオレに何ができる？ あんな女の為に思念体のオレができることは……。

……傲慢な理由で封印されたとはいえオレはまだ生きている。ならばチャンスはある筈だ。

王になる。

創世王になれば不可能などない筈だ。

オレが王になり、あんな女を手助けしてやろう。そうすれば見れる筈だ。あんな女が目指すその先が……。

☆

「何がおきた？」

夜空を、欠けた月を、ビルゲニアは見た。宿敵を討ち果たし、タミング良く発射されたカ・ディングルの荷電粒子砲を祝砲として見上げてみれば不可解な光景を目の当たりにした。

月を破壊するほどの威力があるというカ・デインギルの光が月と地上の丁度中間ぐらいの位置で何かに押し止められた。

とはいえ、押し止めたのもほんの僅かな時間。あつという間にカ・デインギルの光が阻んでいたモノを呑み込み月へとその光を伸ばしていった。

だが月は破壊できていなかった。直撃せず月の一部しか破壊できていない。押し止めた何かのせいで僅かながらに軌道を逸らされ、威力が減衰したのだ。おそらくシンフォギア装者の内の1人がやったのだろう。

「フツ、無駄なことを」

そう無駄なのだ。カ・デインギルの砲撃を逸らしたことは称賛されるべきことなのだろう。だがそれを行った装者は選択を誤った。カ・デインギルの動力源は不朽不滅の聖剣デュランダル。その不滅の輝きは無限のエネルギーとなり、幾らでも砲撃を撃つことができる。もつとも、連射はできず一発ごとにエネルギーをチャージする時間が必要なのだが。

つまり発射されるエネルギーよりも砲身の方を何とかすればよかったのだ。砲身を破壊すれば発射される筈だったエネルギーは行き場を失いカ・デインギルの内部で爆発するだろうに。

さて、とビルゲニアはこれから自分が行うべきことを考える。

カ・デインギルは2発目の発射体勢に入るだろう。あの場にはファイネ、そしてシンフォギア装者が集まっているだろう。一発目に邪魔がはいった以上装者共は全力で抵抗しているのだ。ならば、ファイネと合流し邪魔な装者共を一掃するのが妥当だろう。

「ならば急がねば、な」

ふと視線先にあるものが映る。一台のオンロード型のバイク、ロードセクターだ。

かつてゴルゴムがとある博士に作らせたスーパーバイク。ゴルゴムに献上される筈だったが紆余曲折あって仮面ライダーBLACK Kの手に渡ることになったバイクだ。

このバイクには仮面ライダー共々苦戦させられた。だが今はそ

の仮面ライダーはここにはいない。

「フッフ、戦利品としては丁度よいか」

ロードセクターに歩みを進める。主を失ったのだ、なら自分が新たな主となってやろうとロードセクターに手を伸ばす。

ザツ

「ッ!?!」

音が聞こえた。砂利を蹴る音。ロードセクターに伸ばした手をビルセイバーに掛け振り返る。

「……………」

暗闇だ。目の前に広がるのは暗闇。今はもうすっかり日が落ちて夜だ。仮面ライダーとの戦闘で道路は砕け街灯なども倒れ辺りは暗くてよく見えない。だが、

ザツ……………、ザツ……………。

いる。

何かがこちらに向かって来ている。

何が？ と疑問を浮かべながらも今この状況で向かってくる者など1人しか思い浮かばない。

だがあり得るのか？ オレの攻撃は間違いなく奴を捉えた。ビルセイバーの刀身が奴の血で塗装されるほどの出血を、負傷を奴はしている。それなのに向かつてこれなのか？……………。

断続的に聞こえてくる足音。やがて音が大きくなってくる。そして、暗闇の中から「赤い光」が見えてきた。

「馬鹿な……………」

赤い光は奴の目。ふらつきながらも、一步一步踏み締めるかのようには歩いてくる。その姿を見間違えう筈がない。

「ハアーツ……ハアーツ……」

「仮面ライダー、BLACKツ！」

「どうした、ビルゲニア。そんなに驚いた顔してよお〜」

「……手応えはあった。貴様は確実に致命傷を負った筈だ。なのに何故貴様はここに居るツ!？」

「へへっ、さあな」

「シラを切るつもりか」

「どうかな? ……強いていうなら歌が聞こえたんだ。なら、寝てるわけにはいかねえからな」

「歌、だと!？」

馬鹿な! と理解が及ばぬ現状にビルゲニアは困惑する。歌で甦ったとBLACKは語るが歌など聞こえなかった。

いや、まさかシンフォギア装者の歌がBLACKにだけ聞こえたというのか。しかし、そうだとっても装者の歌に他者を回復させるような効果があるとは聞いてない。

だが、そんな不可思議な現象を起こしかねないモノをビルゲニアは目にしていた。

仮面ライダー BLACKの腰部で輝く紅い宝石、

(キングストーンか!? まさかキングストーンが歌の影響を受けたのかツ!?)

創世王になるのに必要な特別な石。手にしたものに銀河を創造することすら可能な力を与えるという王の石。その片割れを持つが故に王になる資格を持つ奴にそのような恩恵を与えたのか。

キングストーンを持たぬオレでは奴に勝てぬというのか!?

……
……否。

否否否否否否否否否否否否否否否否否否否否否否否
否否否アツ!

断じて否だツ!

キングストーンがあろうがなかろうが関係ない。仮面ライダーBLACKが何度も甦ろうというなら、何度でも斬り捨てるまでだ。

奴を見る。

肩で息をして足取りもおぼつかない。フラフラではないか。焦る必要はない。今度は首を斬る。そして、キングストーンを破壊してやる！

嵐のように荒れ狂った感情を抑え込みビルゲニアは剣を構える。対する仮面ライダーBLACKは荒い呼吸を続けながら、ゆっくりにじりよってくる。

傍目から見れば圧倒的にビルゲニアが優勢だ。片や落ち着き、片や満身創痍。このままぶつかれば倒れるのは仮面ライダーBLACKの方だろう。

しかしビルゲニアは慌てず構えを崩さず、にじり寄ってくるBLACKを睨みつけ待ち構えた。

(油断するな。奴のしぶときは散々思い知っている。何をしてくるか……)

警戒。ゆらりゆらりと幽鬼のような歩みの仮面ライダーBLACKに最大の警戒をとる。

そして、

仮面ライダーBLACKは足を止めた。

2人の距離の間は実に10メートルほど、BLACKは変わらず肩で息をしているが、

(……くるか)

ビルゲニアは警戒を強める。静寂が2人の周囲を包み聞こえるのはBLACKの荒い呼吸のみ。

10秒か1分かはたまた1時間か、時間の流れを上手く感じとれない。

「ハアア……ハアア………スウー」

「ッ!？」

「うおおおッ！」

大きく息を吸い、何かを呟き、咆哮を上げBLACKは走り出した。

ビルゲニアは落胆した。

何だそれは？ その様は？

ここまで這い上がってきた貴様の最期の力がそんな子供が痲癩をおこしたような姿なのかとがっかりした。

右の拳を振り上げながら不恰好に走るその姿は戦士のソレではない。ただ闇雲に、破れかぶれの苦し紛れに見えた。

最早奴は限界なのだ。いかにあの致命傷を治そうともそこまでが限界だったのだ。必殺のライダーパンチやライダーキックもできず、バイタルチャージによる強化もない。だが奴は逃げなかった。痛みで足を引きずりながらここに来た。ならば終わらせてやろう。この宿敵の命を今度こそ斬り捨てるのだ。

BLACKが拳を振るう。フォームはむちやくちやだ。この拳を自慢の盾、ビルテクターで弾き、返す刀で首を斬る。それで終わるのだ。

盾を構える。拳がぶつかる。

爆ぜた。

「——ッ!？」

地面を抉りながらその場から後ずさられる。

(な、にが!? この腕の痺れは——ッ!?)

盾を構えていた腕に走る痺れの原因を思考する間もなくBLACKが追撃してきた。今度は左の拳を振るっていた。下から上へのアッパーだ。

「く・・・、グッ!？」

また爆ぜた。足が地面から離れその場から浮き上がってしまった。だが今度は見えた。奴の拳がビルテクターに当たった瞬間に爆発した。恐ろしい威力だ。ビルテクターにかかる衝撃は凄まじかった。例えるなら、子供が乗ってる三輪車がぶつかってきたと思ったらその威力はダンプカー並みの威力だったというべきか。

しかしその威力も代償があったようだ。BLACKの両腕はボロボロだ。比喻でも何でもなく文字通り奴の拳が爆発したのだ。奴の腕を覆っている黒い装甲は爆ぜ、腕の筋組織が丸見えで夥しい量の血を撒き散らしている。

一か八かの賭けだったのだろう。思わずビルテクターが破壊されるのではないかと思うほどの威力だった、よほどの力を込めたようだが、自分の腕の方がもたなかったようだ。これでもう奴は腕を使えない。

だというのに、奴は何故は、拳を握れる？

「グッ、アアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

痛みを堪えるかのような叫びを上げながらBLACKは拳を握る。今度は右の拳を振り下ろした。

振るった拳は真っ直ぐにビルゲニアに向かっていく。しかしそのまま行けば間にある盾に阻まれるだろう。その盾が見えてないのか、自分の状態が把握できていないのか。BLACKのボロボロの拳はそれでも向かっていく。

(なんだとッ!?)

ビルゲニアは信じられないものを見た。体感している時間がゆっくりと遅くなっていくなか、向かってくるBLACKの拳が元に戻っていた。

再生、というにはあまりにも早すぎて、ビルゲニアの目には一瞬にも満たない時間で元の状態に戻ったようにしか見えなかった。

再び黒い装甲に覆われたBLACKの拳はビルテクターに激突し、血と装甲を撒き散らしながら爆発する。

だがBLACKは止まらない。

右、左、右、左、と一撃一撃、腕を破壊し、再生しながら拳を打ち続ける。

最初のスピードはそんなに速いものではなかった。しかし、最初の一撃を受けてしまったことでビルゲニアは盾を持つ腕を中心に全身に痺れがまわり動きが一瞬止まる。BLACKの拳を避ける隙も反撃の隙もなくなってしまったのだ。

殴る。

殴る殴る殴る。

BLACKの動きが、

殴る殴る殴る殴る殴る殴るッ！。

間に盾を押し込めばこの暴嵐の拳撃は抑えられる。

焦るな。

「オオオオオオオオオオオオッ！」

焦るな。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオッ!!」

焦る、な。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ、オ」

(ツッ! ここだッ!)

実際、ビルゲニアの考えは正しかった。

止まらないBLACKの攻勢を止める手段はそれしかなかった。
BLACK自身もビルゲニアをぶっ飛ばすまで止まるつもりはな
かった。しかし無視していた肉体の負荷は本人が気付かぬところ露
呈してしまった。

一瞬、ほんの一瞬だ。ほんの一瞬の呼吸、僅かながら鈍くなった
動き、その瞬間がビルゲニアに勝機をもたらした。

——その視界に崩れていくカ・ディングルを映さなければ。

「な」

それはあり得てはならぬ光景。1人の女が長年積み重ねてきた
悲願の塔。天に届きそうなその塔の先端部分が破壊され砕け散って
いた。

何があつたッ!? と思考がぶれる。

思考がぶれた。

それが決定的な隙になった。

「ダァァァァァァァァァァッ!!」

「しま」

嵐の勢いが増す。

しまった、という暇もなかった。最大の好機を逃したビルゲニア
に待っているのはBLACKの猛攻。そして、その時は遂に訪れた。

ピシッ、と何かが輝割れる音。それはビルテクターに輝が入った

音。追加の拳。ビルテクターが爆散する。

己を守っていた盾が破壊された。広がる視界、そこに見えたのは拳。視界を埋め尽くす赤黒い拳。

ビルゲニアは拳の暴嵐に呑み込まれるのであった。

第二十四話 さらば剣聖

「ウオオオオオオオオオオオオツ！」

顔、肩、胸、腹、仮面ライダーBLACKはビルゲニアの上半身にありつたけの力を込めて殴る。ひたすらに殴る。殴る。

「ウウウウウ、ダアツ!!」

思いつきり踏み込み、最後の一撃をビルゲニアの顔面に叩き込む。踏み込んだ地面は陥没した。腕を振り切ると、ビルゲニアは声を出す間もなく吹き飛び、避難し無人となっている建物へ突っ込んでいった。

「ハア・・・、ハアツ・・・、う!? ぐ、がああ!？」

両腕から走る激痛が脳内で暴れまわる。叫びたい衝動は奥歯を噛みしめ無理矢理押し殺す。両腕はもう動かない。形だけなら再生しているが、腕を壊しながら殴り、瞬く間に再生させながら殴り、とあれだけ無茶な使い方をして元の形に戻っているのが不思議なのだ。

これもキンググストーンの力なのか、傷1つ残らずBLACKの両腕は再生されていた。しかしその両腕はだらくんと垂れておりピクリとも動かすことができない。肩から先の感覚がなくなっていった。

「ぶっつけ本番だったが、なんとかなるもんだな」

そもそも、何故BLACKはこのような手段をとったのか。

BLACKはビルゲニアに勝つ為には何をすればいいか考えた。ビルゲニアが産み出した新たな必殺技の対処? それもあるが、一番の決め手はビルゲニアの持つ盾、ビルテクターをどうにかすることだった。

今までの戦いを振り返った時、あの盾こそがビルゲニアの生命線

だと思った。あの盾には何度も攻撃を防がれている。あの盾をビルゲニアの手から離す、あるいは破壊する、いずれかの選択があった。

仮に盾をビルゲニアの手から離すことができたとする。そこで安心していいのか。いや、ダメだろう。以前ビルゲニアが自分の剣、ビルセイバーを念力のようなもので呼び寄せていたのを見たことがある。ならば盾の方も念力で呼び戻す可能性がある。

ならば残る選択肢は盾を破壊するしかない。しかし、あのビルテクターが尋常ではない堅さであることは身をもって知っている。ライダーパンチもライダーキックも通用しなかった、ならどうする？

盾を壊すまでライダーパンチやキックを撃つしかないと思ったがそんな連続で技を放つ隙をビルゲニアが簡単に与えてくれる訳がない。

じゃあ、どうすれば、といい考えが浮かばない。しかしうだろうだと考えてる暇もない。ならばとBLACKは思考を単純にした、そして1つの結論に至った。

ぶっ 壊すまでぶん殴る。

細かいことは後にすると思をかなくなり捨て、取りあえずぶん殴ることにした。

1発でダメなら2発、2発でダメなら3発、3発でダメならと、とにかくぶん殴ることだけに集中した。

とはいえ普通に殴つていては時間がかかる、又は破壊することができないかも知れない。腕にありったけ、いや限界以上のキングストーンエネルギーを込めるのだ。そこでBLACKはビルゲニアに突撃する前にこう呟いた。

ハイ・パワー・ストライプス、と。

通常、仮面ライダーBLACKが扱う技の1つにパワー・ストライプスというものがある。これはベルトからではなく、首周り・手首・足首にある赤と黄のラインから蓄積されたキングストーンエネルギーを放出するものだ。ストライプから全身に行き渡らせ、身体能力や必殺技の威力の上昇、また敵の拘束を解く際に使われることがあった。

言うなればハイ・パワー・ストライプスはパワー・ストライプスの強

化技。と、BLACK本人は思っていたが実際はそうではなく暴走と言ったほうが正しいかもしれない。

ベルトのキングストーンのエネルギーを過剰に供給し続けそのエネルギーを腕に集中させた。無理矢理だが確かにパワーは溜まる。バイタルチャージよりも予備動作などがなく、血液が体内を巡回するようにエネルギーを腕に送る。だが過剰すぎるエネルギーを蓄えられた腕はそのパワーに耐えきれずビルテクターに接触すると腕の内側からエネルギーが爆発した。

これでは過^{オーバー}負^{ロード}荷出力だ。肉体に掛かる負荷の方が大きすぎて腕の方が先に壊れてしまう。

ならとつとと治せッ！

無茶な思考を受け取ったのかキングストーンは更にエネルギーを送る。殴るためのエネルギーと腕を治すエネルギー、莫大なエネルギーは肉体の負担を無視し「殴る」という行為を行うために働き続けた。

その結果、殴る、壊れる、治すという3工程の無限ループが完成する。止まらず、動き続けるこのループは加速しBLACKの拳は荒れ狂う嵐と化した。

その甲斐があり、外的要因もあり、BLACKはビルゲニアの盾を打ち砕きその拳を叩き込んだ。その代償も大きかったが・・・

「クソ、ビルゲニアめ」

腕にキングストーンエネルギーが送られ、それが内側から回復していることがなんとなく理解しながらBLACKは悪態を吐く。

拳は確かにビルゲニアを捉えた。だが直撃はしなかった。その理由はぶっ飛ばしたビルゲニアが此方に向かって歩いてくる姿が見えたからだ。

拳のあとがくつきりとビルゲニアの魚類のような鱗の鎧にびつしりついている。腹部から駆け上がり、胸部、肩、腕が潰されたように見える。真っ白い顔面も青あざを作り腫れ上がっていた。

だが、それでもビルゲニアは悠然と立つ。右手の愛^{ビルセイバー}剣を握り締めBLACKを睨み付けた。

BLACKの拳の跡はビルゲニアの体半分にしがついていなかった。BLACKから見て右側、つまりビルゲニアの左半身を潰しただけに終わってしまった。

ほとんど反射に近い反応だった。拳が直撃する刹那、ビルゲニアの体を動かしたのは戦士としての直感か、はたまた生存本能が働いた結果か、いずれにせよビルゲニアは拳が当たる直前に僅かに身をよじった。

直撃は避けられた。だが左半身は犠牲になった。

(恐ろしい威力だった。一発一発がライダーパンチ以上だとわ、だがオレは生きている。まだ！ 戦える！)

(こっちはもう腕が使えねえ、キングストーンがエネルギーを超越さねえ。腕の回復に集中してやがるのか？ だがまだだ！ まだ終わってねえ！)

互いに言葉は交わさず視線だけが交差する。両者の乱れた呼吸だけが聞こえる。

残された武器は互いに1つ、BLACKは足、ビルゲニアは剣。

そして互いに理解した、次の一撃で決着がつくと。

ビルゲニアは腰を落とし剣を構える。その構えはBLACKのライダーキックを破ったあの技だ。BLACKはその構えに微動だにせず自身の呼吸を整えることに集中する。

ビルゲニアが力を流しビルセイバーを回転させる。発射体勢は整った。BLACKは深呼吸を繰り返す。そして、先に動いたのはBLACKだった。

後ろへ大きく跳躍する。後ろ宙返りだ。逃げる為の跳躍ではない。着地点には2人の戦闘の余波で折れ曲がった街灯があった。それを足場する。竹のようにしななった街灯の反動を利用し高く飛び上がった。不快な金属音と共に街灯は完全に折れた。

「来おいッ！」

「デエイヤアアアアアアッ!!」

「ビルセイバーネオダークストームッ!!」

BLACKは急降下し脚を突き出す。ビルゲニアは向かってく

るBLACKを迎え撃つ。

脚と剣が激突する。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

互いの意地と想いがこもった一撃が炸裂する。風が吹き荒れ、火花が散り、互いの一撃が拮抗する。

（拮抗した時点でオレの勝ちよオ！）

以前の戦いと同じ状況。ライダーキックとビルセイバーがぶつかり拮抗した状況でビルゲニアはもうひと押し力を加えライダーキックを撃ち破った。

今回も同じだ。勢いよく右手を引いてビルセイバーの柄を――

「アアアアアアアアアッ！」

「な!？」

右手を引いた瞬間をBLACKは見逃さなかった。いや、それを見ていたと言っている。ビルゲニアがビルセイバーの柄を殴る為に右手を引いたその瞬間、BLACKは高速回転するビルセイバーを自らの左足に深々と突き刺せた。

足裏から表へ剣が貫通。足から血が飛び散る。だが、ビルセイバーの回転は止まった。

BLACKは更に、足に突き刺さったビルセイバーの剣腹に右足の足刀を叩き込む、ビルセイバーは甲高い金属音を辺りに響かせ真つ二つに折れた。刀身の先端から中腹にかけてはBLACKの足に残り、それより下の部分は地面を転がっていった。

「バカなッ！」

ビルゲニアが右手を引いた瞬間に起こった出来事だった。高速回転する剣を片足で無理矢理止め、あまつさえその剣を叩き折られた。ビルゲニアの中でナニかが砕けていく音が聞こえる。

だが、BLACKはまだ止まらない。

ビルセイバーを折った勢いのままに空中で回転。そのまま廻し蹴りを繰り返す。

「ッ!? ぬうおおおおおおおッ!!」

ビルゲニアも一歩踏み出し引いた右手を握り締め突き出した。

先に届いたのはBLACKの方だった。

ビルゲニアの横っ面に廻し蹴りが決まる。ビルゲニアは錐揉み回転して倒れ、BLACKは頭から地面に落ちたのだった。

☆

「・・・む・・・ぐ・・・」

体に走った痛みの信号によりビルゲニアは意識を取り戻した。まだ動く右目を開ければ、視界に広がるのは朝焼けの空。自分が仰向けに倒れていることがわかった。

「・・・」

何てことはないただの空、ビルゲニアは何故か空を眺めているだけなのに心穏やかな気持ちになっていた。

ただ空を眺める。こうして空を眺めるのは何時ぶりだろうか、そんなことを思っていると、足音が聞こえてきた、しかも近づいてくる。何とか視線をその方向に向けると、1人の男がこちらを見下ろしていた。

「・・・フン、どうやら貴様の勝ちらしいな、黒山陽介」

ふうー、と一息吐く、そこにいたのは変身が解けているニンゲン、黒山陽介がいた。

「ビルゲニア、お前・・・」

「何だ？ トドメを刺すならさっさとするがいい。もうオレは動けんのだからな。それともこんな姿のオレはトドメを刺す気にはなれんか」

ビルゲニアは仰向けに倒れているが五体満足という状態ではなかった。

残っているのは上半身のみ、そこにある筈の下半身はなく、下半身に相当する部位には白い砂が溜まっていた。そして、ビルゲニアの残った体はパキ、パキ、と少しずつ崩れ落ちていた。

そんな自分の姿を哀れむか、黒山陽介、そう思っているならその喉笛を噛み千切ってやると憤慨しそうになるがそんな気にはならなかった。

その黒山陽介の顔はこちらを哀れむようなモノではなかった。

「……1つ、聞きたいことがある」

「……何だ」

「お前、何の為に戦ったんだ」

「……フフフ、フハハハハハハハハッ!! いきなりどうした！ 数多の怪人を屠ってきたキサマが敵の戦う理由など気にするとは、軟弱になったな仮面ライダーBLACKツ！」

「気になったんだ、しょうがねえだろう」

「フン、以前にも言った筈だ。キサマとの決着つける——」

「それだけじゃねえだろ」

「……」

「俺が知ってるビルゲニアって怪人は目的の為なら卑劣な手段をとることも厭わないヤツだった。けどお前はそんな手段はとらず真正面から勝負を挑んできた」

「軟弱になったキサマに策を労するまでもなかっただけだ」

「……お前の剣からは以前あった邪念のようなものを感じなかった。鋭くて、重くて、立ち合ってみて『ヤバイ』って肌を感じられるものだった」

「その剣はキサマにへし折られたがな」

「だけど、お前は強かった」

「お前の剣には『想い』が乗っていた。以前あつた邪念とは違うなにか純粹な想いがな。想いを背負ったやつつてのは強いんだよ。だから気になったんだ、お前がそんな『想い』を背負つて戦う訳だよ」

「………ハアツ！」

「うわっ!？」

突然の衝撃が黒山陽介を襲つた。ビルゲニアが急に手をかざすとそこから見えない力、念動力のようなもので吹き飛ばされた。

「トドメを刺す気がないならとつとと失せろ。気分が悪くなる」

「つつつ。ヤロウ、何だよいきなり」

「こんなところでペラペラと喋つてる暇があるのか？ 随分と余裕だなキサマは」

「ッ！ そうだ、行かなきゃ」

陽介は立ち上がりそそくさとロードセクターに跨がる。エンジンを入れ、走りだす直前、陽介は口を開いた。

「ビルゲニア、……あばよ」

「……ああ、さらばだ」

交わすのは言葉のみ。互いの顔を見ることはなかつた。

そして、陽介はロードセクターを走らせる。向かう先は空までそびえ立つ塔、カ・ディングルだ。

「フン、結局トドメを刺さずにいったか、甘い奴よ」
ロードセクターが地を駆ける音を聴きながらオレは再び空を見る。いや、顔が動かさなくなつて空を見上げることしか出来なくなつた。

体がボロボロと崩れていくのがわかる。不完全な体だということによくもつたほうだ。それにしても、

「フフ、フハハハハハハハハハッ!!」

体はボロボロだというのに笑いにが込み上げてきた。自分でも驚いている、オレは負けたというのに何故か不思議と気分が高揚していた。

「しかしあそこまで愚直に拳を振るうとはな、バカとは思っていたが、あそこまで己を省みないとはいな」

オレがが知っている黒山陽介こと仮面ライダーBLACKはもう少し冷静な男だったはずだが、今のあの男はどこか壊れている。

それがなにで、いつからかは知らん。知るつもりもないし知る時間もない。それにそんなことは些細なことだ。

今のオレは、そう、満たされたのだ。

戦士としてこれ程満たされたことはかつてあつただろうか。見定めた宿敵と全力で戦う。何者にも邪魔されずオレは全力で戦えた。オレの人生は次期創世王を育てるための当て馬で終わる人生ではなかったのだ。どの道終わるとしてもこの終わりはオレが望んだことだ。悔いはない。

このまま仮面ライダーBLACKとの戦いの記憶を反芻しながら消えていくのだろうか。

ああ、満たされた。

満たされているはずだ。

それなのに・・・、
戦士でないオレが心残りがあると叫んでいる。

「・・・すまん、フィーネ」

呟いたその名は、美しい金髪を持つ彫刻のように美しい女の名。

——お前の剣には想いが乗っていた——

なにをバカなことと思った。

剣に乗せるのは敵を斬るという意志だけで充分だ。それ以外は
余計な邪念だ。余分なもの乗せればそれだけ剣は鈍る。

だというのに奴は今のオレは強いと、暗にそう言っているよう
だった。

・・・、
・・・、

ああ、そうだ。

あの女の為に戦ったのは事実だ。だがそれは、何度も転生を繰り返してでも己の野望を果たさんとするあの女に興味があったからだ。

それだけだ。

それだけのはずだ。

・・・いや、違うな。

最初はそうだったかも知れないが、いつからかあの氷のように冷たく美しい女が、花咲くように笑う姿が見たいと思った。

だが、オレではそんなことは出来ぬだろう。戦うことしか知らん
オレではあの女を笑顔にする方法などない。それに、あの女の中には
もう誰かが居座っている。オレの入る余地など最初からない。

ならばせめて、あの女の望みを叶える手伝いをしてやろうと思っ
た。オレでは無理だが、あの女が望みを果たせば笑顔が見れるはず
だ、たとえそれがオレに向いていなくても。

・・・ああ、そうか。

こんなにも単純なことか。

「オレは、あの女の笑顔が——」

風が吹いた。

人肌を撫でるような優しい風だ。

風は運ぶ、劍聖と呼ばれた怪人だったものを。

無人となった街中を風が吹く。そこにあつたヒトの形をした白い砂が次々と風に運ばれていく。

何も残らない。そこにはもう何も無い。

ただ、風が吹く。戦士として戦いぬいたモノと1人の男が抱いた淡い思いと共に何処かへと飛んでいく。

風が、吹いたのだった。

第二十五話 飛蝗は跳ぶ

全身が痛みを訴える。もう休めと神経が叫ぶ。しかし止まれない、止まってる暇はない。

早く、早く、早く！

ロードセクターをドンドン加速させ黒山陽介はカ・ディングルの根元を目指した。

嫌な予感が増していく。

カ・ディングルに近づくということは二課本部があるリディアン音学院に近づくということだ。

カ・ディングルとの距離が縮まるほど崩壊した建物が、瓦礫が、煤の山が増えていく。そして、同時に人の気配がどんどん消えていくのを感じた。

「こちら黒山だ、誰か返事をしてくれ。弦さん、響ちゃん！ 翼ちゃん！ クリス！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

配布された通信機を使うも、帰ってくるのは無機質なノイズのみ。電波が悪いのか、それとも通信が出来る状況でないのか。

最悪の状況が頭に浮かんでしまう。そんなはずはないと思うながらも周りの惨状が希望の芽を摘むんでいく。

走る。不安を吹き飛ばすように。ロードセクターを走らせる。すると、走り続けた先に人影が見えた。

2人いた。

1人は地面に横たわっている。リディアンの制服を着ている女の子だ。

もう1人は倒れている女の子を見下ろしている。金の髪と黄金

の鎧を纏っていた、その姿は明らかに異質な人物だった。

その人物が結晶が連なったような鞭を振り下ろそうとしている。アクセル。ロードセクターが唸りを上げる。

「何ッ!?!」

2人の間に割って入る。鎧の女はその場飛び退き少し距離をとったようだ。

「ッ!?! 響ちゃん!」

「ヨウ、さん」

倒れている女の子は陽介がよく知る人物だった。

「響ちゃん、何があったんだ。他の皆は無事なのか!?!」

「あ、あ、ヨウさん。クリスちゃんが、翼さんが、私何にも出来ないくて……」

立花響は酷い状態だった。今の彼女からはいつもの元気がなくその瞳は絶望に染まっていた。かつての自分を思い起こすが今はそんなことを思い出している場合ではない。

彼女が伝えようとしていることが、自分が予想してしまった嫌な状況だとわかってしまう。それを行ったのは、

殺気を感じた。

響を抱き抱えその場から急いで飛ぶ。着地もままならず響を抱き抱えながら地面に倒れる。轟音が聞こえ、振り向けば先ほどまでの場所がつぶれた饅頭のように陥没していた。

「随分と手荒い挨拶ですね了子さん。イメチェンにしては少々派手過ぎな気がしますけど」

「櫻井了子という女の意識は既にこの世にない。私はフィーネだよ、仮面ライダーBLACK」

マジかよ。と当たってほしくなかった疑惑に内心ショックを受ける。

「なあ了子さん、もうやめにしないか。カ・デインギルはこの子達がぶつ壊したんだろ。もう月を破壊するなんてできないはずだ」

「だから止まれと? バカを言うな。確かにカ・デインギルは破壊されたが、私のこの想いは止まらない。この胸の内をあの“御方”

に打ち明けるまで私は何度でも立ち上がる。何者にも邪魔はさせない！」

強い。途方もない意志の強さを感じた。彼女は生半可な気持ちでこんなことをしてかしたわけではないのがわかる。その胸の内にある純粋な想いを叶える為に行動したのだ。

「だからって、こんなやり方しかなかったのかよ」

「積み上げた年月が違う。俗物共には理解できまい。月の破壊はバラルの呪詛を解くと同時に重力崩壊を引き起こす惑星規模の天変地異は極大だ。世界は荒れるだろうが必要な犠牲だ。だが、私という新霊長が愚民共を纏め上げ、統一言語を取り戻す。そうすれば、きつとあの御方は再び現れてくれる」

「ふざけるな！ 呪詛だが統一だが知らんが、月の破壊で被害が出るってわかってあんたは何も感じないのか!？」

「蟻が何匹死のうが私には関係ないことだ」

「了子さん、あんたはッ！」

「私はフィーネだ！」

止めなくてはならない。己の行いが間違っていないと突き進むこの人を止めなくてはいつたいたいどれほどの涙が流れるのか。

「響ちゃん、立てるかい？」

「・・・」

「響ちゃんッ！」

「え、あ・・・」

駄目だ。完全に闘志が折れている。今の彼女は闘える状態ではない。

フィーネが振る鞭を辛うじて避けながら響を瓦礫の影に隠す。

「ここにいるんだ」

「ま、待って」

返事は聞かずフィーネの前に飛び出す。

「覚悟はできたようだな」

「ああ、あんたを止める」

「出来るかな、キサマに」

「止める。これ以上あんたの好きにはさせない！———
変・・・身ッ!!」

既に体は限界を越えている。表面上は傷は消えているが内部はボロボロだ。しかし、それでもやらねばならない。倒すためではなく、止めるために戦うのだ。

「仮面ライダー・・・BLACKッ!!」

「———ククク、クハハハハハハハハハハハハッ!」

体が変わり、フィーネと相対すると思いきや、フィーネが突然大声で笑いだした。それは、こちらを侮蔑するような笑いだった。

「ハハハハハハ! その姿が仮面ライダー? そんな醜い姿のどこがヒーローなのだ」

「何を言って・・・ッ!?!」

フィーネの言葉で自分の体を見て驚愕した。体は確かに変わっている。人の姿ではない。だがそれは仮面ライダーBLACKというにはあまりにも欠け離れた姿だった。

視界に写る腕には自分を覆う黒い装甲、リプラスフォームが展開しておらず薄緑色の皮膚のみが現れている。

腕だけではない、腹、足もリプラスフォームが展開しておらず全体が薄緑色の皮膚に変化している。

そして、ロードセクターのミラーに写った自分の顔を見た。

「これは・・・ッ!?!」

その姿は仮面ライダーBLACKではない。まさしくバツタ。バツタ人間とも言うべき姿に黒山陽介は変わっていた。

「ククク、どうやらビルゲニアとの戦闘は思った以上に影響が出ているようだな。そんな姿ではまさに怪人だな、アハハハハハ!」

思わずキングストーンがある腰部をまさぐってみる。
ある。

キングストーンは確かに自分の中にあると感じる。だがこれは
どういうことだ。何故、変身できない。

思い当たる節があるとすればフィーネが言っていたようにビル
ゲニアとの戦闘だろう。

BLACK自身に自覚はないが、ビルゲニアとの戦いは熾烈を極めた。BLACKは今ある力を、これから生きる未来の力を振り絞って戦った。今、BLACKは自分の中にあるキングストーンは休眠しているかのような感覚を覚えた。

「化けの皮が剥がれたとはこういうことだな。お前は既に人間ではない。いや、その姿こそがお前の真の姿だ。ゴルゴムに体を改造されたお前はその姿から人間に、仮面ライダーに変身していたのだ。お前は、人の、ヒーローの仮面を被った“怪物”だ！」

「くッ!？」

ファイネが乱暴に鞭を振るう。生きた大蛇のような軌道を描きながら猛烈な勢いで陽介に襲いかかる。

何とか回避するもファイネの攻撃は止まらない。地を跳ね、空中で軌道を変え、四方八方から鞭が襲いかかる。

「今のお前を人前に見せたらどんな反応をするかな。きっと、掌を返し、石でも投げつけるだろうな。『この怪物が!』と恐れるだろうな。所詮は“仮面”を被っただけ、本性を見れば人間は襲いかかってくるだろうよ！」

「そんなことー!」

「英雄というものは市民が望んだものだ。都合よく望まれ、役目を終えれば用済みとなる。人類にとっては都合のいい使い捨ての駒だ。脅威から守ってもらうのも、厄災の元凶に仕立てるのも、願い、乞われれば簡単に人柱になる。全く厄介で哀れだな英雄というのは!」

（軌道は見える、身体中が痛てえがまだ動ける、鞭は避けられる。）
「お前も哀れなものだな。そんな醜い姿になってまで戦っても称賛など得られまい。あるのは謂れのない非難や罵詈雑言だということに」

（一撃でも食らうのは駄目だ。こんな状態じゃ、一発で致命傷だ。後は・・・）

「人間は見た目で判断する。お前がどれだけ人を助けようが、その助けた人間にお前は裏切られる。誰もお前を望んではないのだ」

（とにかく動け、動け、動け、とべ、飛べ、跳べ!）

「だが、そんなお前でもまだ利用価値はある。大人しく頭を垂れ、私にキングストーンを差し出すがいい。その石は実に魅力的だ。いち科学者としておおいに興味がある。それだけがお前という無価値な生物に残った唯一の——」

「ごちゃごちゃうるせえッ！」

「かはッ!？」

風が走る。

縦横無尽に降りかかる鞭をギリギリで避け、陽介は跳んだ。

回避も防御も間に合わない、反応できない速度でフィーネの顔を蹴り抜いた。

「好き勝手言いやがって、あんたそんなに上から目線だったか」

「・・・事実、私は全ての存在の頂点に立つ。お前こそまだ抗うか、意味などないぞ」

「それがどうした。俺の姿が化け物だとか、英雄がどうかかなんだ言ってるけど、そんなことは大したことじゃないんだよ。俺は、俺が護りたいものの為に戦ってきたんだ。周りがなにを言おうが、自分を誤魔化して見て見ぬふりなんてしたら、俺は自分が許せない」

「だから護ると？ 傲慢だな」

「傲慢で結構。目の前で人が死ぬを黙って見てられるか。どんな姿だろうと俺は俺だ！ だから戦う。あんたがやろうとしていることは見過ごせないからな」

「やってみるがいい、無駄な足掻きを！」

「うおおおおッ！」

ネフシュタンの鞭が鋭く襲いかかる。バツタ人間と化しているも陽介は止まらない。止まるわけにはいかない。

全身が軋む、どこかの筋が切れる音がする、だけど止まらない。陽介は跳ぶ。

地を跳ねる、瓦礫を蹴る、跳ぶ。

「ダァー！ ハァー！ セー！」

フィーネが振るうネフシュタンの鞭を潜り抜け、的確に、確実に蹴りを加えていく。

リプラスフォームが展開されてないことで今の陽介の防御力は0に等しい、一撃でも攻撃を受ければ終わりだ。

だが、怪我の功名と言うべきか、今の陽介は仮面ライダーBLACKへの完全な変身ができず、バツタ人間という中途半端な状態へと変身している。

バツタ、そう飛蝗なのだ。

バツタと思い陽介が思い浮かんだことはとにかく「跳ぶ」ことだった。

跳んで跳んで、跳びまくる。それがこの状態で出来る唯一のことであり、最大の武器だった。リプラスフォームという身を護る鎧のような皮膚はないが、「鎧」がないことでBLACKを上回るほどのスピードを手に入れたのだった。

ネフシユタンの鞭の怒涛の攻撃を避け、とにかく跳ぶ。

跳んで、蹴る。跳んで、蹴る。跳んで跳んで、蹴る。跳んで跳んで跳ぶ。

「うおうりやあああああッ!!」

「ちい、鬱陶しい!」

まるで光に群がる虫のようだとフィーネは感じた。忙しなく跳ね回り、ちよつかいをかけるこの怪物をどう対処するか。

いや、深く考える必要はないと思考を切る。此方は堅牢な防御力と無限の再生力を持つ完全聖遺物と融合した上位存在。片や、完全な変身ができず怪物と化したヒトもどき。

アレは此方の攻撃を避け、自分の攻撃を当てているつもりだろうが、無駄な行為だ。

痛くも痒くもないのだ。あるのは鬱陶しいという感情のみ。

想定していた仮面ライダーBLACKのパワーには及ばず、シンフォギア装者の戦闘力にも及ばない。生身で輝を入れたあの埒外の漢の拳にも及ばない。

放っておいても勝手に自滅する、まさに無駄な足掻きだった。

「ハアツ・・・ハアツ・・・、ゲホッ!　ゴホッ!・・・、ハアツ・・・ハアツ・・・」

血反吐を吐きながら跳ね回る姿はもはや見苦しい。無限に跳ね回る体力はなくスピードも落ちていく。迫る鞭を回避することか叶わなくなっていく、時折どうにか蹴飛ばして直撃を避けているのがやっとだった。

——だというのに、

「うぐうああああアアアアA a a a ツ！」

(何故、奴は止まらないッ!?)

獣のような雄叫び、命を燃やし尽くすような叫び、その見苦しくもがむしやらかな姿にフィーネは僅かに臆してしまった。

その瞬間を待っていたかのように陽介は加速する。

繰り出させる加速の乗った蹴り。相手を穿つような一撃。それを防げたのはほぼ反射に近い反応のおかげだった。臆したことで体が守りに入りで鞭を引き寄せ蹴りを受け止めることができた。

鋭利な鞭に陽介の足裏が沈み血が噴く。まだ足は一本ある。追撃の蹴りを繰り出そうとするが迎撃の鞭の方が速いので断念。鋭利な鞭を無理矢理足場に押し、一端飛び退く。

陽介は空中で一瞬力を溜め、そこから真下に垂直に落下。着地をするには勢いが強すぎるが、狙いは着地ではない。地面を穿つ。衝撃が震動となって辺りを揺らすのがフィーネにダメージはない。

何を、と呟く前にフィーネは陽介の狙いに気づく。地面の一部が盛り上がっていた。落下の威力で、テコの原理で地面を盛り上げたのだ。

「うらあッ！」

5メートルはあろう盛り上がった地面を陽介はサッカーボールのように蹴り飛ばす。

「そんなもの！」

常人ならともかく、完全聖遺物と融合した私にこんな地面の塊でどうにかできると思っているのか。やはり無駄な足掻きだとフィーネは嘲笑う。鞭の一撃で地面の塊は呆気なく碎け散る。

——陽介の狙い通りに。

跳ぶ。無数に碎けた地面を足場にして跳ぶ。碎けた破片を壁に

してファイネの視界から隠れ背後に回り込む。

「む、ヤツはどこに・・・ッ!？」

言い終わると同時に背後に気配を感じたファイネだがもう遅い。

「ジャアアッ!」

「ゴッ!？」

ファイネの首に蹴りを叩き込んだ。容赦のない攻撃だ。下手をすれば危険な状態に陥れてしまうかもしれないが、それだけ陽介に余裕がなかったとも言える。

ともかく、この一撃で決着が――

「――フッフ」

「な、に」

ファイネは首に受けた陽介の足を掴んだ。その表情に痛みを感じている様子はなかった。

「痒い痒い。やはり無駄だったな、もうお前には私を止める力などない!」

掴んだ足を離さずファイネは陽介を地面に叩きつける。片手で、成人男性の体格をしている陽介を棒のように振り回し叩きつける。

1、2、3、と連続で何度も叩きつけ、10を越えてから力の限り投げ棄てた。

水切りする石のように地面を転がり、瓦礫の山に激突してその勢いは止まる。

「ゲホッ、ゴホッ、・・・ゴフッ」

咳き込み、灰の中の空気が体内の血と共に吐き出される。指を1本動かそうとする度に全身に苦痛が走る。

もう駄目だ。身体はとつくに限界を越えている、バツタ人間として全力を奮つてもファイネにダメージを与えることすらできない。

――なのに、なぜ。

「・・・まだ、立つか」

「・・・フー・・・フー・・・」

全身の至るところから血を流しながらも陽介は立ち上がる。言葉を発する余裕はないが、荒い呼吸を繰り返しながらもフィーネを睨み付ける。その瞳からはまだ闘志が消えていない。

「・・・いい加減キサマの相手は飽きた。これで終わりにしてやろう」

鋭く迫る2振りの鞭、それが迫ったと思ったら急に軌道を変えた。あらゆる方向へ向かっていく鞭の先を見れば、

「なッ!」

「証明してやろう。キサマは何も護れんとなあッ!」

鞭が向かう先、瓦礫の影から顔を覗かせる響がいた。

「え?」

呆けた声を上げ、迫る鞭を見つめることしかできない響。もう彼女に戦う力も気力も残ってない。陽介に動くなと言われたものの、戦い続ける陽介を目から離せなかった。

だがこの場から逃げもせず、隠れもせず戦いの様子を見ているという行為は最悪の状況を生んだ。

この鞭に貫かれれば自分は簡単に死んでしまうだろう。逃れられない死、それでもいいかもしれないと思ってしまう。だって、もう護るものも、帰る場所も失くなっていくのだ。ひだまりすら感じない。

既に絶望が響の心を染めている。響は生きるのを諦めかけている。そんな彼女の人生に幕が引くように鞭が迫った。

——しかし、鞭が響に届くことはなかった。

赤い液体が響の顔面にかかり頬を伝う。

「ヨウ、さん・・・」

「が・・・ゴホツ・・・」
右肩と左脇腹、鋭利な鞭は陽介の身体を易々と貫いていた。

第二十六話 立ち上がる者達

「ぐ、ぐぐ・・・」

身体を貫く鞭がズブリ、ズブリと自分の後ろにある護るべきものに迫ろうとしている。そうはさせないと鞭を掴む。鋭利な鞭は掴んだ手を切り裂くが気にして居る場合ではない、強く握ったおかげか鞭の進行は止まった。

「響ちゃん、大、丈夫かい？」

「ヨウさん、なんで・・・」

「全く、ダメじゃないか出てきちゃ。早く、離れるんだ」

まるで何でもないように喋る陽介だが、今の状態は芳しくない。右肩と左脇腹を鞭で貫かれながらも倒れずにいるが、そこから血が流れ出ている。

助けなきや。

そう心に浮かぶ響だが、一步も踏み出せない。一步も下がれない。胸の中のナニかが欠け、ただ見ていることしかできなかった。

そうしていると陽介の身体から蒸気が吹き上がる。皮膚の隙間から漏れでるかのように吹き出す蒸気は一瞬、陽介を包み込む。そして、蒸気が晴れるとそこにはバツタ人間ではなく、人の姿になった陽介が現れた。

「クツソ、こんな時に」

「哀れ、無様、滑稽だな」

侮蔑の視線を向けながら陽介を嘲笑うフィーネ。陽介は睨み返す。

「そのようなゴミを見捨てておけば、万が一にも私に一矢報いるチャンスがあったかもしれない。愚かな事だ、お前は、自己満足

の果てに何も護れず死んでいくのだッ！」

トドメを刺そうとフィーネが鞭を振るおうとするが、鞭は動かなかった。

「なんだ？ 何故、びくともせんツ!?」

「ま、もる」

「なんだと?」

「俺は、護るんだ」

ありえない。それは誰の目からも明らかだった。

黒山陽介はボロボロだ。人の姿になつて、全身から血を流し、足下には血だまりができ、今にも倒れそうだ。

——だが、彼は倒れない。

荒い呼吸を繰り返しながらも、歯を食い縛って根を生やしたようにしつかり立つ。

「ダメ、ダメだよヨウさん。死んじゃうよ!」

懇願するかのように響が叫ぶ。目の前の青年が力尽きてしまう。出血多量で死んでしまう。

もういい、逃げて、逃げてくれと願う。これ以上誰かが傷付くのを見ていられない、目を伏してしまふ。

「大丈夫」

優しい声。

「大丈夫だよ、響ちゃん。俺が護るから」

「ッ! でも・・・ッ!」

見上げて陽介の顔を見る。彼は笑っていた。ボロボロで苦しい筈なのに穏やかに笑っていた。

「俺がやるんだ、俺がやらなきゃいけないんだ。俺は、仮面ライダーだから」

「・・・ヨウさん・・・」

「フン、だからどうした。この状況を覆せると? お前を助けるものはいない。ズタボロのキサマにいったい何ができる!」

「・・・そいつは、どうかな?」

「何?」

☆

息も絶え絶えになりながらも陽介はフィーネを吹き飛ばした方向を見つめる。身体を貫いていた鞭もフィーネに引つ張られるように飛んでいった為、右肩と左脇腹に穴ができ更に血が溢れ出した。

フラリ、と身体がふらついた。意識が遠くなる。

慌てて踏ん張り、何とか意識を保つ。視界がぼんやりしているがまだ終わってはいない。

強い気配が消えていないのだ。

「まさか、な」

視界の向こうから歩いてくるフィーネはピンピンしていた。

「偶然か？ お前が “そこ” に至る可能性があるというのか？

……いや、そんなはずはない。完全でないお前にそんな可能性などありえない！ それが成せたのはキングストーンのせいだ！ そうでなければ——」

「……？ なに、言ってるんだ？」

どこか動揺した様子のフィーネだが、彼女が言っている言葉の意味を理解する暇はなかった。

「殺す。キサマはここで確実に殺す」

「がっ」

鞭が振るわれた。今までとは違う明確な殺意、鞭の先端から放た

れた球場のエネルギーが陽介を襲う。避けられない、違う、身体が動かなかった。もはや避ける体力はない。

エネルギーが爆発し、その衝撃をもろに受け陽介は吹き飛ぶ。受け身などとれず無造作に地面を転がった。痛みはなかった。

「ま、だ・・・」

寝てる暇などないと、意地で身体を動かす。まだ、生き残っている人達がいる。その人達を護るためにも立ち上がらなければならぬ。そうでなければ自分に生きていく価値などないと言いつくせ。

立つ。だが、膝に力が入らなかった。姿勢が崩れる。

「倒れるわけには――」

ほふり、と何かが陽介を支えた。温かい。何だとおもい視線を下げれば、

「ふぎぎ」

立花響が黒山陽介を支えていた。見た目は細みだが脱力した成人男性の体重を支えるのは大人ではない少女には厳しい。

「響、ちゃん」

「ヨウさん、ごめんなさい」

謝罪。いったい何に対しての謝罪だろうか。

「私が守りたかった皆は、まだ生きている。こんな私を支えてくれている。私が戦うのは、そう言うことだったんです」

陽介の肩を担ぎながら響は豪語する。まだ戦えると、その瞳には炎が宿っていた。

「だから、頑張れる。まだ、歌える。私はまだ、立ち上がれる。まだ、一緒に戦えますー!」

「まだ戦えると言うのか。仲間を手折り、心を砕いたはず。お前が身に纏うその力は、何だと言うのだ?」

「シンフォギアアアアアアアアアアアアッ!!」

光が、響と陽介を包んだ。

☆

「……………ん……………ヨウさん！」

「ん」

微睡んだ意識が覚醒する。一瞬気を失っていたのか。いかんと
思いつつ重い目蓋をこじ開ける。

「……………綺麗だ」

「ふえ!?!」

「なッ!?!」

「ちよ!?! なに言ってるんだこんな時に!」

どうやら口を滑らせたらしい。だが正直な感想なのだから許して
ほしい。それだけ今の彼女達の姿は幻想的に思えた。

響と復活した翼とクリスが纏うギアの形状が変化していた。彼
女達の無事にほつ、としつつその姿に目を奪われてしまっている。

それぞれのパーソナルカラーを残しつつ全体的に白く輝いてい
て翼が生えている。不思議な形態だ。

「みんな、その姿は？」

「何ですかねこれ？ ていうか私、空飛んでる!? なんかも生えてる!？」

「これはエクストライブ。シンフォギアの限定解除モードです」

「ようはパワーアップだ。それよりもあんたの方だ！ まったく、そんなボロボロになって、また無茶したんだろ」

「いや、あはは」

「まったく、ほんとしようがねえやつだなあんたは。・・・ほら、肩貸してやるよ」

「・・・クリスちゃん。なんかヨウさんと距離近くない？」

「はあ？ 肩貸してんだから近くなるだろ」

「そうじゃなくて！ なんか私達よりなんか心の距離感？ が近いような気がするし、あとなんか対応がやわらかいし」

「・・・気のせいだろ。そんなことお前には関係ないし、いいからこの人はあたしに任せてお前は離れろよ。それとも、その空っぽの頭の中を銃弾で埋めねえとわかんねえか？」

「空っぽなんてヒドイ！ ちよつとはあるよ！」

「・・・容量は少ねえのかよ」

陽介を挟み何やら言い合いを始める響とクリス。しかし、いがみ合うような空気ではなくクリスが茶化すように響に話しかけていた。

どうやら、スカイタワー付近で別れてから何とか仲良くなれたようだ。その様子を微笑ましく見守っていたいが、先程からクリスは響から陽介を引き剥がそうと力を込めている。

エクストライブってシンフォギアのパワーアップ形態だよね。そんな状態のこの子達に引っ張られたら痛だだだだだだだッ!？」

「んっんッ！」

陽介が危うく裂けるチーズになりそうなところを見かねた翼の咳払いで2人の少女は一旦動きを止める。

「ふっふっん」

「・・・」

結局、陽介は響に担がれたままだが響の顔は何故かこれ以上ない

ほど勝ち誇った顔をしていた。クリスは響の眉間を撃ち抜こうかと一瞬思案した。

「各々いろいろ言いたいことがあると思うが、まずは、この状況を打開してからにしよう」

「はいー!」

「ちっ、わーたっよ」

4人の視線が地上にいる1人の人物に集中する。

「ふん、限定解除ができたぐらいすっかりその気か。その程度でこの私を止められるとでも? それにその役立たずを抱えたまま闘おうというのか、甘いぞ小娘共が!」

ファイネがソロモンの杖を起動させる。ノイズの召喚。しかし、その数は尋常ではない。辺り一帯を埋め尽くすほどのノイズをファイネは召喚した。

圧倒的戦力数の差。常人なら絶望しているところだろう。だが、少女達に恐れはなかった。

「はっ! 今のあたし達をいまさらノイズで止められるか!」

「立花は黒山さんを頼む。殲滅するぞ!」

「うおおらあああッ!」

蒼と紅が飛翔する。斬撃が、銃弾が飛びノイズを一蹴していく。彼女達も桁違いな戦闘力を発揮していた。

「ふっ! はっ! だありゃあああッ!」

飛行型のノイズが陽介を抱えた響に襲いかかるが、響は慌てることなくこれに対処する。向かってくるノイズを避けては殴り、蹴りと確実に屠っていた。

鎧袖一触。あれほどまでいた大量のノイズはあっという間に全滅した。

ファイネは再びノイズを呼び出す。幾ら呼び出しても今の彼女達の前には通用しないということがわかったはずだが、

「ふんッ!」

ファイネは手にしたソロモンの杖で自分を貫いた。陽介達が驚いている間にノイズがファイネに群がる。自決? いや違う。

ファイネがノイズを取り込んでいるのだ。

大量のノイズが混ざり合い巨大なナニかが出来上がる。肥大しきったその姿は赤い龍にも見えるが、そう表現するにはあまりにもおぞましいモノだった。

閃光。龍が放った一条の光は街を焼き払った。

「逆さ鱗に触れたのだ。相応の覚悟はできておろうな」

龍の中からファイネが姿を見せる。その手には完全聖遺物デユランダルがあつた。ネフシユタンの鎧を軸に、ソロモンの杖、ノイズと融合。さらにはデユランダルを手にしたファイネは正しく自身を完全な生物と豪語するだけの自信があつた。

「さて、お前達の抛り所も奪ってやらねばな」

そういつてファイネは指を鳴らす。すると、どこからともなく異形の者達が沸いて出た。

「あれは!？」

「蜘蛛の怪人!? どっから沸いてきたんだこいつら!？」

「それに数が多いよ!？」

「ゆうに100匹。使い捨ての消耗品だが、地下の鼠どもを駆逐するには充分だろう」

クモ怪人達は一斉にある方向に向かって進軍し始める。それは二課本部へ繋がるゲート。あの数のクモ怪人が地下へ雪崩れ込んでしまったら、地下は地獄と化してしまう。

「そんなこと——」

「私を無視できる状況か?」

「くっそおおお!」

クモ怪人を止めようと装者達が動くが、そうはさせまいとファイネが妨害する。装者達もファイネに反撃するが与えたダメージはファイネの所持しているネフシユタンの鎧が一瞬に修復する。

不味い、と装者達は焦る。このままでは護るべき人達に危険に晒されてしまう。せつかくもう一度立ち上がる力をくれたのに、みんなを護れないの？

「響ちゃん。俺を、投げろ」

そんな時、陽介が口を開いた。

「な、何言ってるんですかヨウさん!? そんなことできませんよ！」

「了子さんを止められるのは君たちだけだ。なら怪人を止めるのは俺の、仮面ライダーの役目だろ?」

「だからって、ボロボロのヨウさんに任せるとしてそんなこと——」

視線を陽介に向けると響は驚愕した。傷だらけで血だらけだった陽介の身体はいつの間にか綺麗になっていた。

「戦う力を分けて貰ったのは君たちだけじゃない。あの光に包まれて、俺も元通りだ。だから任せてくれ」

「でも……、ううん、わかりました」

「ありがとう」

「その代わり! これが終わったらおにぎりください! 私だけじゃなくみんなの分も、そしておにぎりパーティーしましょう!」

「ははっ、みんなか、そりゃいっぱい握んなきゃな」

「はい! 私、いっぱい食べます! 食べたいです! ……だから、気をつけてください」

「うん、わかったよ」

「何を、ごちゃごちゃしている!」

フィーネの攻撃を避け、響はおもいつき振りかぶる。そして、
「どおおおりやあああッ!!」

響は渾身の力で陽介を投げた。

「うおおおおおおッ!」

着地点にいたクモ怪人の1体を踏み潰しどうにかゲートの前にたどり着く。目の前にはクモ怪人達が敵意の声をあげながらたった1人の門番に襲いかかる。

「こっから先は通さねえ、絶対に。——変……身ッ!」

陽介に群がったクモ怪人達だが爆発がおきたような衝撃が起こり吹き飛ばす。

煙が発生するが、それは発生させた本人の手で振り払われるとそ

の姿を現す。

黒いボディに真っ赤な目。

人類の自由と平和を護るその戦士の名は、

「仮面ライダー……BLACKツ!!」

「ギ、ギギ」

本能が恐怖した。相手はたった1人、数では圧倒的にこちらが勝っているというのにクモ怪人達は足を止めた。

逃げろ、と本能が叫ぶ。

仮面ライダーBLACKから感じる気迫にクモ怪人達は言い様のない恐怖を覚えた。

だが、相手は1人。そう1人なのだ。

1対1では敵わなくてもこの数で押し潰せばいいのだ。

「G、GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!」

沸き上がってくる恐怖を押し殺すように叫び、クモ怪人達は突撃する。

その時、BLACKが護っているゲートのシャッターが吹き飛んだ。

「ツ!?!」

「おおおりゃあああああッ!」

ゲートの中から1人の男が飛びだし巨岩を思わせる腕を奮いクモ怪人の一匹を殴り、何体かのクモ怪人を巻き込みながら吹き飛ばした。

「げ、弦さん!?!」

「応! 陽介、加勢させて貰うぞ!」

ニカッ! と、笑いながら二課司令、風鳴弦十郎が現れた。

「司令、あまり無理はなさらずに!」

「緒川さんも!?!」

瓦礫が積もった高台から二課エージェントの緒川慎次がクモ怪人達に向かってハンドガンを発砲。命中するが通常の銃弾ではクモ怪人達にダメージを与えることができなかった。

突撃しようとするクモ怪人達だが妙な現象が起きた。身体か動

かない。まるで地面に縫い付けられたように身体が動かなかった。

影縫い。緒川が扱う本家本元の緒川流忍術である。

そして、無防備になった相手を見逃すほどのこの2人は甘くなかった。

「せえええいッ！」

「ライダーチョップッ！」

弦十郎の拳が腹を穿ち、仮面ライダーBLACKは手刀で両断した。2人は背中合わせになる。

「さすがつすね、弦さん」

「相手がノイズでないなら引っ込んでる必要はないからな。このまま蹴散らすぞ」

「司令！ 痛み止めを射ったとはいえ重傷なんですからあまり無茶は」

「緒川は援護を頼む」

「・・・ああ、もうわかりました」

どこか生き生きとした様子の弦十郎に緒川はため息を吐きながらも納得する。

3人が見渡すとうじやうじやとクモ怪人達が群がっていた。

「さて、もうひと踏ん張りつてとこですけど、弦さん大丈夫なんですか？ 怪我してるみたいですけど」

「そういうお前は本調子ではないだろ？ 動きのキレが悪い。あれだけの無茶をしてまだ戦うというのだから、身体はとつくに限界のはずだろ」

「・・・黙って寝てるわけにはいかないでしょ。せめて、あの娘達が帰る場所は護んなきゃ」

「なら、この話題は終わりだ。・・・今、俺達がやれることをやるぞ陽介」

「はいッ！」

2人の男は駆け出した。

敵はあまりにも多い。だが彼らに退く理由はない。護るべきものの為に全力を尽くす。

誰に言われるでもない。それが自分達の為すべきことだから。

第二十七話 不朽不滅

なんだこの光景は、と偶々、戦場の後方にいたクモ怪人の1体は思う。

自分達は怪人だ。人間を超越した身体能力をもった特別な存在だ。例え仮面ライダーが相手でも100という数の差で押し潰せる、そのはずだった。

「ダアッ！」

「オラアッ！」

だが、この現状はなんだ？

たった2人の敵に同胞が次々と薙ぎ倒されていた。

仮面ライダーはまだわかる。奴も此方と同じ改造人間、その強さは本物だ。

だが、その仮面ライダーと背中合わせて戦っているあの人間はなんだ？ シンフォギアのような特殊な力を持つわけでもなく、仮面ライダーのように改造された人間でもない只の人間がどうして怪人を殴り飛ばせる？ どうして恐怖しない？ いったい何なんだあの間は!?

怪人としての自負が崩れていくその1匹のクモ怪人は自分が理解したくない感情に吞まれその場で棒立ちになっていた。

「オオオラアアアアッ！」

処理しきれない感情で立ち尽くしていた1匹のクモ怪人は殴り飛ばされてきた同胞に押し潰されるのであった。

状況は劣勢と言わざる負えないと、緒川慎次は心のなかで愚痴る。

3対100。たった3人でこれだけの怪人を相手取ることには普通に考えれば英雄の所業だろう。

しかし、仮面ライダーBLACKと二課司令、風鳴弦十郎。この2人の戦闘能力がいかに高くても自分も含め万全な状態ではない。自分はフイーネとの遭遇戦でのダメージは抜けておらず、司令にいたっては腹部に穴があいている。BLACKの彼も動きに精細が欠いている。

それでも、押し込まれないのは意地の強さと言うべきか。

「お二人共、一旦下がって!」

緒川の言葉に反応し仮面ライダーBLACKと弦十郎はその場飛び退く。

2人を取り囲もうとしたクモ怪人達の中心に手榴弾が投げ込まれ爆発。撃破にはいたらないがダメージは与えたはず。

「どのくらいやった?」

「10までは数えてましたけど、そっから数えてないですね」

「大技は放てんか?」

「あと1、2発撃てるかどうかってとこですね」

「むう、やはりこのままでは」

ジリ貧、その言葉が脳裏をよぎる。

「だけど、こいつらちよつと変なんですよ」

「変、とは?」

「なんつーか、今まで戦ってきた怪人達より、〃脆い〃んですよ。」

1体1体が今の俺でも割りと簡単に倒せるくらい」

「ふむ・・・」

「ですが、脆いといっても相手は怪人。そして、この数を捌くのは……」

多少減ったとはいえまだまだクモ怪人の数は多い。1対1の状況なら今のBLACKと弦十郎でも敗北はないだろう。だが、それを百回近く続けるとなると2人の体力がもたないのだ。

とはいえ、愚痴ってる余裕はない。怪人達は待つてはくれない。何か状況を好転させる手はないものか……。

「あ、弦さん、緒川さん、ちよつといいつすか？」

ピイン、とBLACKは一手思い付いた。

「よし、やってみるか」

「現状はそれしか手はなさそうですね」

「なら、ちよつちよつとやりますか！」

BLACKの提案に若干惑いつつもそれしか手はないとおもい準備に取りかかる。やらないという選択肢はない。やらなければ此方がやられるのは時間の問題だからだ。

「先ずは俺からだ。——爆震ッ！」

前に出た弦十郎は今出せる全力の震脚を放った。腹に穴が空いているのに彼の震脚は地面を抉り、真っ直ぐに掘り進んだ。それに巻き込まれるクモ怪人もいるが大多数は地面の揺れによって身動きが止まっていた。

「次は俺だ。——キングストーンフラッシュッ！」

「ッ!? ギャアアアアアアアアッ!?」

揺れが収まる間もなくBLACKのベルトから強烈な閃光が放たれた。

広範囲に広がる閃光は全てのクモ怪人の視力を一時的だが奪う。だが、BLACKに近い位置にいたクモ怪人は強烈な閃光によってその身を焼かれていた。

「よし、いくぞ陽介! ずうおおおりやあああッ!!」

足場を奪い、視力を奪い、BLACK達は最後の一手を放つ。

比較的BLACK達から離れた位置にいたクモ怪人の1匹は比較的早く他のクモ怪人よりも視力が回復する。

何をしてくるのかと回復した視力で見たものは宙に浮く巨大な瓦礫だった。10メートル以上ありそうな瓦礫はリディアン校舎の一部だ。それを弦十郎は投げた。

「でええええりやあああッ!!」

さらにそれをBLACKはサッカーボールのように蹴り飛ばした。密集したクモ怪人達に向かって瓦礫が落ちる。巨大な質量による圧殺、必殺技を撃つ余力がない彼らに残された最後の手段だ。

潰される。そう悟ったクモ怪人達は我先にと落下点から逃れようとする。しかし、密集してしまつた怪人達は思うように動けず、互いに行動の邪魔をしてしまっていた。

だが、それでも生き残ろうと必死な者達もいる。邪魔な同胞を押し退ける者、糸を離れた場所に吐き、戻す反動を利用して離脱する者。安全圏に逃れたと判断した一部のクモ怪人達は落ちてくる瓦礫に眼をやった。

「爆ッ!」

落ちる瓦礫が爆散した。巨大な1つの塊がバラバラに砕け散る。

緒川の言葉で瓦礫が爆散したのは、予め瓦礫に緒川特性の爆薬を仕込んでいたからである。

弦十郎の投擲にBLACKの蹴りを加え、瓦礫は爆撃機から放たれる爆弾のようなものになっていた。しかしそれが爆散したことで瓦礫の散弾が出来上がった。

巨大な1つの弾丸は無数の弾丸へ。瓦礫は戦場に降り注いだ。

「ギヤアアアアアアッ!」

その結果がどうなったかはクモ怪人達はその身をもって知ることとなる。質量による圧死はなくなった。だが、ある者は顔を、ある者は腹を、腕、足、無数の瓦礫の弾丸によって身体の一部を失い、または全身を撃ち抜かれた。

いずれにせよ、数多のクモ怪人は地に沈むのであった。

☆

土煙が舞う。BLACK達3人は肩で息をしながら戦場を見つめる。確かな手応え。土煙で視界は悪いが敵の気配は感じなくなっていた。

「ぐっ!？」

「司令!？」

緊張がゆるんだのか弦十郎は腹を抑え膝をつく。腹に巻いている包帯からは血が滲む。痛み止めの効果も切れたのだろう。そんな弦十郎に駆け寄る2人。

「弦き——」

「まだだー!」

怒声をあげる弦十郎だったが少し遅かった。土煙の向こうから白い何か伸びてくる。それらはBLACKの身体に巻きついた。

「黒山さん!」

「クソ、しまった」

BLACKに巻きついたのは糸、それも1本や2本ではない。無数の糸がBLACKを雁字搦めにした。

土煙が晴れると糸を出した者達、クモ怪人達が一斉に糸を吐き出していた。

どのクモ怪人も満身創痍、片腕がなかったり、片足がなかったりしたが怪しく光る赤い目からは殺意を漲らせていた。

100匹ほどいたクモ怪人だが、今はもう20匹ほどしか残っていない。だが限界に近いBLACK達を仕留めるには十分な数だった。

「キングストーンフラッシュ!! パワーストライプスツ!」

糸がどんどんBLACKを縛りあげようとするなかその拘束を解こうとBLACKはもがく。しかし、いくら叫ぼうがベルトから放たれるはずの閃光も、身体に巡らされているラインから発せられるエネルギーも出なかった。

自分はまだ仮面ライダーBLACKのまま。変身は解けてはいない。だが変身を維持するので精一杯でそれ以上のパワーが発揮できなかった。

「う、うおおおおおおおッ!」

足掻く。視界を塞がれ、喉を絞められ、身体が縛られようとも必死に足掻く。だが、糸をほどけない。

生き残ったクモ怪人達も必死だ、全員が仮面ライダーBLACKに向かつて糸を吐き出した。1番の危険性は仮面ライダーだ。そのことが本能に刻まれていた彼らの行動は決死だ。

吐き出された糸は幾重にも重なり仮面ライダーBLACKを完全に拘束する。繭と言う名の監獄だ。外の景色が見えず、白一色しか見えないBLACKにとっては周りがどうなっているか把握できない。

好機。そう判断したクモ怪人達は一斉に飛びかかった。

(まだまだ！ まだ終わってたまるか。約束したんだ、こんなところで終わってたまるかッ！)

☆

「なんだ?」

フィーネは違和感を感じていた。

今、自分は「ネフシユタンの鎧」と「ソロモンの杖」、そしてノイズと完全融合し黙示録に登場する赤き竜がごとき姿になり、さらには完全聖遺物である「デュランダル」をその手にしている。

3つの完全聖遺物を手中に納めているフィーネにとって自分の目の前で息巻く小娘達など物の数ではなかった。

いかに自身が生み出した玩具を奇跡の領域にもっていこうと、たかが10数年しか生きていない小娘共に、積もりに積もった自分の想いが負けることなどあるはずがなかった。

だが、それでも違和感は消えなかった。むしろ大きくなっていく。

デュランダル。この完全聖遺物の様子がおかしいのだ。熱い、熱いのだ。この剣が放つ無限の輝きから得られるエネルギーがどんどん大きくなっていく。それこそ現在進行形で、

「ええい、どうしたとゆうのだデュランダル!」

抑えきれない。暴れ馬のようにフィーネの手の中で輝くデュランダルはその熱量でフィーネの手を焼き斬った。

「ぐああッ!? なんだとッ!」

フィーネの手から離れたデュランダルはまるで意思を持つかのように独りでに浮遊する。そして、掴もうとするフィーネを振り切り、ある場所へ向かうのだった。

☆

光が走った。

身動きがとれなくなった仮面ライダーBLACKと、そのBLACKにトドメを刺そうとしたクモ怪人達の間には舞い降りた。

完全聖遺物デュランダル。デュランダル自体が放つ光がクモ怪人達を吹き飛ばし、BLACKを拘束していた糸を焼き払った。

眩すぎる光は見る者の視界を焼き尽くす。至近距離にいるBLACKにもその影響がでるかと思われたが、

「あつたけえ。これは？」

BLACKに向けられた光は違った。光を浴びたBLACKは不思議な感覚に包まれた。途轍もなく大きなモノに抱き締められるような包容感、しかし苦しくはない。温かい光がBLACKを癒していく。

『不屈なる者よ』

声が出た。頭のなかに直接響く声。だけど声色が安定しない、男の声なのだろうが、子供のように甲高い声とも聞こえるし、重く響く老年の男ようにも聞こえる。

「デュランダルが、喋った？」

『王の資格を持つ者よ、汝、力を欲するか』

此方の思考などお構い無しにデュランダル？ が頭の中に問いかけてくる。

「力、か……。ああ、お前の力を貸してほしいデュランダル！」

『汝、我が力で数多の敵を討ち滅ぼす者か？』

「違う。護るためだ。俺はみんなを護りたい。その為にも力を貸してくれデュランダルッ！」

『discord』

短い問答。デュランダル of 質問の意図はわからなかったが、最後の返事はどこか嬉しそうな声色のような気がした。

B L A C K の手に吸い込まれるようにデュランダルが収まる。掴んだ瞬間、全身に力が漲った。

デュランダルの輝きの影響か、キングストーンも強烈に輝く。あれ程ロボロだった身体が羽のように軽い。

「うおおおおおおおッ!!」

咆哮と共にデュランダルを掲げる。刀身はさらに輝き光の刃が形成され雲を突き抜けるほどの高さに達した。

黄金に輝くデュランダルの危険性を感じ取ったのか、クモ怪人達は形振り構わず B L A C K に攻撃する。糸を吐いて動きを止めようとするもの、爪で直接攻撃しようとするもの。

あれは駄目だ。振るわせてはいけない。そう本能が警告するが、既に遅かった。

「うおおおおおりやあああああッ!!」

一閃。

その場で一回転するようにデュランダルを振り回す。正しいフォームでもなんでも無い無我夢中で力任せに振り抜いた動きだ。

だが、その光の軌跡に入ったモノは全て両断された。

輝く刀身が消える。残っていた全てのクモ怪人は断末魔をあげる間もなく斬られ、切り口から一瞬で燃え上がり消滅していった。

「バ、バカな」

デュランダルの刃は全てを斬り裂いた。その光の軌跡にいた瓦礫も怪人も紙切れのように易々と斬って捨てた。

「あり得ん、こんなことが!?!」

しかし、エクストライブに至り、空を飛んでいたシンフォギア装者達、危機を感知し咄嗟にその場に伏せた風鳴弦十郎と緒川慎次には被害はなかった。

「あああああああああッ!?!」

だが、光の軌跡に入っていたモノの末路は変わらない。2つの完全聖遺物とノイズと融合し、巨大な竜のような姿になったフィーネも

同じ末路を辿ることになる。

例外はない。本来なら、デュランダルとネフシユタンの2つの完全聖遺物による対消滅が起こる筈だったが、デュランダルにはキングストーンのパワーを上乗せされたことにより、デュランダルには規格外の力が集まり対消滅はおこらなかった。

「クソ、クソッ！ どうしたネフシユタン!? 何故再生しないッ!?!」

再生はしている。だがそれ以上の速さで焼き尽くされている、再生が追い付かないのだ。

巨大な竜はその根元が完全に両断され倒れていく。その光景はさながら大木が斬り倒されるようなものだった。

第二十八話 決着、そして

「おのれ、おのれええええッ！」

恨み節を吐きながら、自身の下半身を輪切りにしているフィーネの様子を雪音クリスは空から眺めていた。

どういうわけかフィーネの手からデュランダルが離れ、それが仮面ライダーBLACKの手に渡り、彼がデュランダルを振り回し、地下へ雪崩れ込もうとしたクモ怪人達と巨大な竜へと変貌したフィーネを斬り払った。

クモ怪人達は残らず消滅。フィーネも斬られた部分から身体が消滅が始まっており、それを阻止しようと自身の下半身をネフシユタンの鞭で斬り捨てているが、斬っても斬っても身体の消滅が止まることはなかった。

「クリスちゃん・・・」

「・・・ったく。アイツめ、せっかくあたし様がこれから大活躍するって時に、全部一人でやっちゃまいやがって、もて余すじゃねえか」
ガングニールの装者、立花響が少し心配した様子で声をかけてくるが、おどけて聞き流し、件の人物に目をやる。

当の本人はデュランダルを掴んだまま大の字で地面に倒れている。どうにか無事な様子に自然と頬が弛む。

「・・・嬉しそうだな、雪音」

「あん？ 何がだよ？」

「いや、お前がそんな風に笑うとはなと、思ってたな」

「・・・気のせいだろ」

ぷいっと思わず顔を反らす。にやけ顔をこれ見せたくなかった。

「んで、どうするよこっから」

「・・・了さんは」

「あの状態ではおそらく長くはもたないだろう」

3人は眼下で消滅に抗うフィーネを見つめる。デュランダルを

奪い、完全聖遺物同士の対消滅を狙ったとはいえ、3人それぞれ彼女に思うところはあった。

困惑、疑惑、怒り、憎しみ、そして……、いずれにせよこれが別れになることを3人は理解した。

そんな想いに耽っていると、

ゴゴゴゴゴツ！

「何の、音？」

かすかにだが、何かが崩れるような音を3人は耳にした。同時に自分達は影に覆われた。だがそれはあり得ないことだった。

自分達は今、空に浮いている。そんな自分達に影を落とすなんて自分達より高い所に何かあるか、影を落とせるほどの高い建物ぐらいだろう。

「おい、ちよつと待て」

だがここには存在する。

「……まさか」

1人の女の野望の結晶。月を破壊する為に造られた塔にも見える巨大な荷電粒子砲。

「「カ・ディングルが、倒れてるッ!?!」」

圧巻する光景、一瞬だがその事実には身体が硬直した。

「うええええッ!?! 何でッ!?!」

「……まさか」

「おい、何かわかったのかよ」

「……デュランダルだ、デュランダルが斬り裂いてしまったんだ……」

「マジかよ……」

翼の言うとおりであった。仮面ライダーBLACKがデューランダルを振るう前、デューランダルにキングストーンエネルギーを掛け合わせ、雲を突き抜けるほどの巨大な光の剣を精製した。

埒外なエネルギーをもった完全聖遺物の前には、防御など無意味で、横風に振るわれたデューランダルの光の軌跡にいたモノは例外なく斬り捨てられた。

例外はない。

BLACKはただ護る為に全力を尽くしただけだったのだ。だがそれは、思わぬ展開を招いてしまった。

「クソ、とりあえずあの人達回収して、とつととずらかるぞ！」
クリスは倒れてるBLACK達を連れてこの場から離れようとする。

しかし、カ・ディングルが倒れることが何を意味するのか、そのことを一瞬速く判断できた響はカ・ディングルに突撃した。

「立花!？」

「おいバカ! なにしてんだ!？」

「カ・ディングルを戻すんです!」

「はあ? 何でそんなこと?」

「倒れたら地下にいるみんなが!」

「ッ!？」

カ・ディングルほどの巨大な建造物が倒れば被害は大きなものとなる。リディアン学院校内の地盤の強度がどれほど脆くなっているかもわからない。

もし、このまま倒れば、地下に避難した人々にも影響が出るかも知れない。それこそ最悪の結末を予想してしまうほどに。

クリスも翼もカ・ディングルに向かう。破壊するという選択肢もあるが、この場で破壊してカ・ディングルの破片による二次災害もあり得る。

不幸中の幸いと言うべきか、まだ、カ・ディングルは倒れかけの状態だ。3人のエクストライブの出力なら元の状態に押し戻すことができるだろう。

だが、それを許さぬ者がいた。

爆発。カ・ディングルの根元で爆発が起きた。

「ぐっ、ううううううううッ!」

「爆発ッ!? 何でッ!」

「しまった、これではカ・ディングルがッ!」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ!!」

緊迫した状況が悪化した。下手人が自ら高らかに笑う。

「実に、実に業腹だが、認めてやろう。今回は“譲ってやる。だが、後の憂いは今ここで押し潰してくれようッ!”

カ・ディングルの倒壊を決定付けたのはフィーネだった。彼女はネフシユタンのパワーを解放し、球状のエネルギー体を精製、それをカ・ディングルにぶつけたのだ。

「あんにやろおッ!」

「構うな、雪音ッ!」

クリスはフィーネに銃口を向けるが翼の静止の声に堪える。フィーネに構っている暇などなく、今はカ・ディングルをどうにかするのが最優先だった。

3人の装者はカ・ディングルを支えようとする。しかし、その見た目どおりの巨大な質量は容赦なく3人を押し潰そうとしている。

「こうなったら・・・」

3人は視線を交わした。それだけで、何をしようとしたかわかった。

絶唱。

エクストライブモードの今の状態に絶唱の力を加える。それしかない、3人は覚悟を決める。

「——G a t r a n d i s——」

「3人共、そのままだッ!!」

「ッ!?!」

今まさに絶唱を唱えようとしたその時、彼女達を静止する声が響いた。

声のする方に視線を向ければ、立ち上がった仮面ライダーBLACKの姿が見えた。

「ヨウさんッ!」

「そのままって、この状態も長くは持たねえぞ」

「まかせろ」

BLACKは手にしたデュランダルをベルトにかざす。

「頼む、もう少しだけ力を貸してくれ」

キングストーンの光をデュランダルに浴びせる。光を受けたデュランダルは再び輝きだした。

「何をする気か知らんが、させると思つかッ!」

フィーネも黙ってその様子を見ていない。ネフシユタンの鞭を振るいBLACKに攻撃を仕掛ける。

「何いッ!?!」

だが、振るわれたネフシユタンの鞭はBLACKに届かなかつた。光を放つデュランダルの前にBLACKに触れることなく弾かれたのだ。

デュランダルとネフシユタン、この2つの完全聖遺物のパワーバランスは完全に崩れた。拮抗していた筈の2つの完全聖遺物だが、キングストーンに加護を得たデュランダルは完全にネフシユタンを上回ってしまった。

そして、デュランダルはその形を変えていく。刃は短くなり、持ち手、柄が長くなる。その形はまるで、

「槍……だとッ!?!」

デュランダルは剣から槍へとその姿を変貌させた。しかし、その輝きは衰えることはなく、むしろ、より輝きを強くしていった。

BLACKは槍投げをするような構えをとる。

「ッ!? ……ハ、ハハハッ! そうか、デュランダルをぶつけ、カ・ディングルを消滅させるつもりか。だが! そんな爆弾染みたエネルギーを纏ったデュランダルをぶつければ、近くにいるあの小娘共もまとめて消滅するぞッ!! アハハハッ! 地下の凡愚共を護る為に切り捨てるかッ! 確かに、大数を救うために少数を切り捨てるのは——」

「黙ってな」

「な……」

「切り捨てる? バカいうなよ、どっちも護るに決まってるんだろ。タイミングがずれるからあの娘達には抑えてもらってるんだ」

「だがッ! そのデュランダルは謂わば破裂寸前の風船。デュランダルに、キングストーンのエネルギーまで掛け合わせたそんなものをぶつければその瞬間に消滅が始まるぞッ!」

「なら、ここでない場所で消滅させればいい。誰もいない場所で」
「そんな場所——」

ファイネはそこでBLACKの意図に気づく。BLACKの視線はカ・ディングルに向いてるがカ・ディングルを見てはいない。視線はカ・ディングルのその先、

「空……いや、宇宙かッ!？」

「そういうことだ」

いかん、とファイネは焦る。可能か不可能かの話ではもうない。この男はやる。確実にやると確信した。

鞭を放つ。それが無駄な抵抗だとわかってても。

「やらせん、やらせはせんぞ! 今さらキサマなんぞに、キサマなんぞにいいいいッ!」

乱雑に、がむしゃらに鞭を振るがその全てが届かない。デュランダルが放つ輝きがネフシユタンを完全に弾いていた。

「悪いな、了子さん。——往け、デュランダルッ!!」

地面が陥没するほど踏み込みBLACKはデュランダルを投擲した。

一条の光が昇る。

デュランダルがカ・デインギルに触れると猛烈な勢いで上昇した。

デュランダルの光がカ・デインギル全体を包み込みながら上昇する。

雲を越え、どんどん、どんどん上昇する。

やがて、地球の重力を振り切り、虚空へと飛び立つ。それでも、止まらない。まだ、進んでいく。

BLACKは地上から小さくなっていく輝きを見つめた。

(すまねえ、デュランダル。こんな使い捨てるような使い方しちまって……)

(気にするな、王よ)

せっかく力を貸してくれた聖剣に不甲斐ない想いを寄せていると、その聖剣から問題ないと返答が返ってきた。

(我が身はヒトの営みを護るためのモノ。最期にそれを護れるならば後悔はない)

(……ありがとう)

BLACKは最後にお礼を伝える。返答はなかった。だけど、一際大きく輝く星が見えた。

デュランダルは突き進んだ。カ・デインギルを連れて、そしてそのまま欠けた月の破片に衝突し、臨海に達していたエネルギーが爆発した。

デュランダル、カ・デインギルそして、欠けた月は跡形もなく消滅したのだった。

そして、仮面ライダーBLACKは意識を手放した。

☆

「ん……」

暖かい感触に気がつき、手放した意識が戻ってくる。自分が今、目を瞑っていることがわかり、ゆっくりと目を開ける。

「あ」

「未来ちゃん……?」

「き、気がついたんですね。よかったです」

黒山陽介が目を開けるとそこには小日向未来がいた。彼女はこちらが目を開けたことに安堵している様子だった。

「む、ぐ」

「あ、ダメです、動いちゃ」

自分が横になっていることに気がつき、体を起こそうとするがピクリとも動かない。意識ははっきりしだすが体が動かず視線だけが彷徨う。

視界に入る空は夕暮れ、カ・ディンギルの姿はもうない。月も欠けてはいるがそこにある。自分の体は包帯が巻かれ手当をされた形跡があった。そして……、

「……重くない?」

「いいから大人しくして下さい」

小日向未来に膝枕をされていた。

「いや、しかし」

「しかしもかかしもありません。私、見てたんですからね。あんなボロボロになるまで戦って、終わったら倒れちゃうんですもん。今は安静に下さい」

体が動かせないこの状況では大人しく未来の言うことをきいておくしかない。そして、未来の言葉で“終わった”と聞き、自分も緊張の糸が緩んでいった。

しかし、頭上の未来はこちらをじっと見ていた。そして、その表情は少し暗く、沈んでいる。

「・・・どうしたの、未来ちゃん？」

「・・・えくと、ほら、何かありませんか？ 言わなきゃいけないことありませんか？」

「あゝ・・・」

思えば、未来と会うのはクリスを追いかけて以来だ。きつと心配させてしまったのだろう。

だから、言わなければならない。“待ってる”と言ってくれたこの少女のために、

「ただいま」

「はい、おかえりなさい」

そう言つて、未来ははにかんだ。

先ほどまでの沈んだ表情から一転して、太陽の光を浴びて元気になった花のようにさわやかに笑うのだった。

☆

他のみんなは？

陽介の疑問に答えるべく未来は陽介の体を優しく起こす。ほ
うっておけば無理矢理自分で動こうとするからだ。もつとも、今の陽
介は、指の1本たりとも動かせない状態だが、

リディアン学院の敷地内は瓦礫で散乱している。

何とか周囲を見渡せば見知った人達がいた。風鳴弦十郎を始め
とした二課の面々、クリスに翼、シンフォギア装者達もどうやら無事
のようだ。

そして、響とフィーネ。その2人が向かい合っているのが見え
た。

反射的に体が動きそうとなるが、その必要はなかった。周囲の空
気、何より向かい合う2人の中には険呑な空気は流れていなかっ
た。

何を話しているかは聞こえないが、穏やかな空気が伝わってく
る。

ああ、終わったんだ。

改めて安堵する。その証拠に響がフィーネに向かって手を伸ば
していた。

握手だ。フィーネも少し戸惑った様子だが、その手を取ろうと手
を出した。

その瞬間だった。

「え？」

誰かの口からそんな呆けた声が漏れた。

「いやいや、お疲れ様ですみなさん。お陰で、此方の用事も簡単に
済ますことができそうです」

この場にそぐわない緊張感のない声。人とは思えない邪悪な笑
みを浮かべながらその人物、蛇川悟はフィーネの胸を貫いていた。

第二十九話 1つのおわり

「がはっ、ゴホッ!？」

口から血を吐き出しながら、フィーネは急いで自身の状態を確認した。

デュランダルに斬られ、消滅まで猶予のない体。そんな体にトドメと言わんばかりに胸を貫かれた。

見下ろした視線は自身を貫いた腕と、その手の中で鼓動を打つ自身の心臓が写った。

「ぎ、さま、何故、生きて」

ギロリと、背後にいる、自身を貫いた蛇川悟を睨み付ける。

あり得ないと、フィーネは思った。この男は自分と対峙し、そして、目の前でノイズに押し潰され炭化したのをこの目で見届けたのだ。

だから、あり得ない。この男が生きているなど、ならば何故、この男に自分は貫かれているのか。

「私も一応エージェントの端くれですし？ ほら、死体工作というやつですよ。あの時は、たまたま近くにいた親切な人に身代わりになってもらっただけなので”いや、助かりましたよ”

ヘラヘラとおどけて語るが、用は、別人を盾にした、ということなのだとフィーネは理解した。

場所や時間的に近場にいた避難民か避難を誘導した自衛隊員、又は二課職員。何れにせよ、この男はなんの躊躇もなく誰かを犠牲にしたのだ。

「あ、あ、了子さん？ 蛇川さん？ 何で？」

「おや、立花さん。あなたもよく頑張りましたね。ところでどう

です？——人殺しに関与した気分は？」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

残った力を振り絞り、フィーネはネフシュタンの鞭を振るう。これ以上この男の声を聞きたくなかった。

蛇川の首を狙い、唸りをあげるネフシュタン。

「おっと、危ない」

しかし、フィーネの最期の一撃は虚しく空を斬るだけだった。

ヒラリとフィーネの攻撃を避け、蛇川は距離を取る。その手のあるフィーネの心臓をポーン、ポーンとお手玉しながら、その表情を邪悪に歪めていた。

「なにしやがんだテメエエエエエエエエエエツ!!」

「おや」

激昂した咆哮を上げたのはクリスだった。

自身が今、どういう状態かを鑑みず、周りの静止の呼びかけも耳に入らず、クリスは攻撃体勢に入った。

雪音クリスにとってフィーネという人物は一言では形容できない人物だ。家族に似た愛情もあれば、道具の用に切り捨てられた悲しみもある。クリスの中では複雑な感情が渦巻いていた。

なんにせよ「思い入れ」があることは明らかだった。

だから、許せなかった。

一瞬で振りきれた感情を力に変える。ガトリング弾、小型ミサイル、大型ミサイル。1人の人間を葬るには充分過ぎる程の弾幕が放たれた。

至近距離にいた響は倒れたフィーネを抱き寄せ咄嗟に離れる。

「やれやれ、よ、ほー！」

1発でも当たれば致命傷は免れない。いや、最悪、死んでもおかしくない。そんなエクストライブモードのシンフォギアの攻撃を蛇川は難なく捌いた。

瓦礫を蹴飛ばし、ミサイルの軌道を変え、ミサイル同士を誘爆させ、大きめの瓦礫を踏み込んで、テコの原理で起き上がらせ、即席の壁でガトリング弾を防ぐ。

「全く、危ないですね。ケガでもしたらどうするんですか?」

「はあああああッ!」

矢継ぎ早に攻め立てたのは翼だった。翼も最初は戸惑ったが、クリスの攻撃を防いだ蛇川を見て、彼が普通の人間ではないことがわかった。

故に、警戒レベルを引き上げる。それこそ、生身でシンフォギアを相手取れる自分の叔父と同レベルの強さと仮定して攻め立てる。

「おっほほ、危ないですね、翼さん。防人のあなたが生身の人間に刃物を振るうんですか!?!」

「くっ、よく言う」

高速で繰り出される斬撃だが、蛇川はそれを、ゆらゆら、ひらひらと避ける。

埒があかないと判断し、翼は一旦飛び上がる。アームドギアを一段に構え、ギアの形状も巨大な大剣に変える。

ここまでする必要があるのかと問われれば、そうせざるおえないと答えるしかない。

普通の人間ならば、包丁やナイフといった小さな刃物でも、十分に殺傷できてしまう。

だが、この時翼は、もはや本能的に選択していた。

このサイズでなければ斬れないと、

大質量に加え、落下速度を加えた大剣が蛇川に振り下ろされた。衝撃で砂塵が舞い上がる。手応えはない。避けられたと思いい

つの間にか乱れていた呼吸を整えながらアームドギアを持ち上げようとしたが、それは叶わなかった。

「なんと」

「いや〜危ない。危うく真つ二つになるとこでしたよ。ギリギリでしたね〜」

「この・・・ッ!?!」

おちよくなるように言いながらも、蛇川は翼の攻撃を躲した。それどころか、アームドギアを踏みつけ、次の行動を防いでいた。

「ああ、そういうえば翼さん。1つお聞きしたいことがありますして

ね」

「ぐっ、なにを」

「いえね、そんなたいしたことではないですよ。あのですね、——
—彼、仮面ライダーをいや、黒山陽介を刺した時はどんな気分でした
?」

「.....はっ」

翼の中で時が止まる。

蛇川はまだ何か言っているようだが、翼の耳には届いてない。

翼の脳内ではあの時の光景が甦ってくる。

あの時の状況は自身でも記憶が曖昧だ。立花響が天羽奏のガン
グニールを受け継いだことを受け止めきれなくて、立花響が黒山陽介
と親しげにしているのがなんだか癪に障って、

気づいたら、何処かわからない暗闇の中を漂っていて、しばらく
したら、何だか暖かい光が差し込んで、それに手を伸ばしていた。

すると、意識が戻り目を開けると目の前には安心したような顔を
浮かべる陽介。それに少し驚くも、手に生暖かい感触を感じた、それ
が、アームドギアから伝わった彼の血だということに気が付き、全身
から血の気が引いたことを覚えている。

何故、今あの時のことをこの男が聞いてくるのか。顔を見れば、
ニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべるこの男が何を言いたいのか。

「あくそうでした。翼さんあの時のことを覚えてないんです
ね。いや〜申し訳ない、それはそうですもんね、なにせ、そうなるよ
うにしたのは私でしたもんね」

翼の中で何かが切れた。

「キサマ、私に何をしたあああああああッ!!」

翼はアームドギアから手を離し、蛇川へ接近する。自身のギアの
下半身、脛辺りの部分を剣に変え、首を刈り取るような足刀を繰り出
す。

「ふふふ、イイ殺気です。本当はもう少し付き合いたいんですが

——遊びはこの辺しときますか」

「ガアッ!」

瞬間、翼はとんでもない威圧感に襲われた。

目の前の敵から吹き出したソレは、まるで、山のような巨大なナニかを彷彿させ翼は一瞬それに飲まれた。

瞬きの間だったが、翼の動きは鈍り、攻撃は躲され、逆にカウンターの蹴りを食らうことになった。

ゴムボールのように蹴飛ばされた翼は、そのままクリスマで巻き込み、遙か後方へ吹き飛ばされてしまった。

「んっふっふっ」

「蛇川あッ！」

「おや、司令。お元気そうで」

「能書きはいい、お前、自分が何をしているのか分かっているのかッ！ 何故こんなことをッ!?!」

緒川に肩で支えられ、痛む傷を抑えながらも二課司令、風鳴弦十郎の怒号が飛ぶ。彼は聞かなければならなかった。

職員の間でも蛇川悟という人物は胡散臭い印象はあれど、共に数年間、二課で働いてきた間柄だった。口はいい方ではないが、仕事はこなすし、人間関係も悪いとも聞かなかつた。

ならば何故こんなことを？ 二課地下で不覚をとった自分達を逃すために、単身フィーネに立ち向かったことも弦十郎は聞いている。

少なくとも同じ職場で、時には命の危険がある仕事を共にこなす仲間だと二課の面々は思っていた。

「・・・私、ずっと欲しかった物があつたんですよ」

「・・・何を」

「私1人ではどう足掻いても何もできない。だから近くで見てることにしたんです。付かず離れず、じつくり、ゆっくりと、幸い、時間だけは腐るほどあったのでね、ですが、皆さんの頑張りでたった数年ですみました。本当にありがとうございます！」

イタズラが成功した子供のように笑いながら、蛇川は手にしているフィーネの心臓を抉った。

ぐちゅぐちゅと、嫌な肉の感触を周りに聞かせながら、手を引き

抜き、その手に掴んだモノを見せびらかす。

「それは、まさかッ!？」

「ええ、——ネフシユタンの鎧。私、これが欲しかったんですよ」

薄く光る宝石の欠片のようなモノを手にし、それを幸悦とした表情で蛇川は見つめる。

「何のために? と、仰いましたね。『必要だから』。申し訳ないですが、今はこれ以上言えませんがね」

蛇川は続けて心臓を抉る。噴き出す血を気にも止めず、抉って、抉って、抉る。そして、『数個』のネフシユタンの鎧の欠片を手に入れると、無惨な状態となったフィーネの心臓を投げ捨て、懐から指輪を容れるような小箱を取り出し、その中にネフシユタンの鎧の欠片を大事に仕舞った。

「できれば、もっと状態の良いモノがよかったですけど、贅沢は言えませんね。消滅するよりははずっといいでしょう。では、皆さん、私はこれで」

「待てよ」

「おや・・・」

用事は済んだどばかりにさっさとこの場を去ろうとする蛇川。そんな彼に待ったをかけたのは陽介だった。

未来が止める声を押し退け、動けない体で無理矢理立つ。立つことはできたが、とつくに限界を超えている体は悲鳴をあげ、包帯の上から血を噴き出していた。

だが、それでも立ち上がらないわけにはいかない。

闘志を、気合を、根性を燃え上がらせ蛇川を睨み付ける。

蛇川の真意はわからない。だが、勝手に満足してこの場を去ろうとすることを許すわけにはいかないのだ。

「まあ、そんな慌てなくても大丈夫ですよ。近い将来、私達はまた会うことになりますから」

「何だど?」

「これだけの騒ぎになりましたからね。しばらく世界は煩くなる

でしようが、まあ、それが落ち着く頃にはまた会えるでしょう」

「それを、黙って待つてるとでも？」

「はいはい、だから慌てないでくださいよ。こちらもいろいろ仕込みたいことがあるんで、それに、あなたにはとても素敵なサプライズを用意してますので♪」

「・・・何？」

「ええ、ええ！ きつと喜んで貰えますよ！ なんせ・・・、おっと、いけない。口が滑るところでした。それでは、皆さん、さようならくっ！」

「ッ!？」

蛇川は懐に手を入れ、何か投げた。黒い球状のような物体。それが光るように爆発した。

閃光。一瞬だけ辺りを覆った光が全員の視界を一瞬奪う。光が晴れると、もう蛇川の姿は影も形もなくなっていた。

「・・・逃げられたか・・・」

「蛇川、お前はいつたい・・・」

「陽介さん！ 動いたらダメって言ったのにもう！」

「・・・」

「？ 陽介さ——」

ふらり、と陽介の体が力なく倒れていく。

体に力が入らなく、意識が再び遠退いていく。

『あなたにはとても素敵なサプライズを用意してますので♪』

そんな嫌な予感がする言葉を思い出しながら、黒山陽介は再び意識を手放した。

後に、ルナアタック事件と呼ばれる騒動から一週間が経過した。

とある場所のある部屋に4人の人物が集まっていた、と、仰々しくいつてみたが、使用しているのはまだ使える二課の施設なのだが、

そこに集まったのは風鳴弦十郎と緒川慎次、二課オペレーターの藤堯朔也と友里あおいだ。彼らは1つのテーブルを囲み、少し神妙な面持ちでいた。

「では、これまでのことをまとめよう」

二課司令である弦十郎の言葉で場の雰囲気引き締まる。とはいえ、これから行われるのは状況確認なのだが。

「国内外問わずの問い合わせなどの『後処理』も少し落ち着きませんでしたからね。まあ、今後どんないちゃもん吹っ掛けられるかわかりませんが……」

「ちよつと止めてよ。しばらくは電話のコール音は聞きたくないんだから」

ポロリと口から漏れた言葉がオペレーター2人の心的疲労であるが伝わり、対応してくれたことに感謝しながら、ごほん、と弦十郎は1つ咳払いをした。

「蛇川についてだが……」

その名を出したことで場の雰囲気ピリつく。疑問、彼について

思うことはこの場の皆が同じ気持ちであった。

「良い人、ってわけではなかったらですけど、まさか、あんなことする人だったなんて・・・」

「そうね、仕事はできるし、軽薄や所はあったけどそれなりに長い付き合いだったからね」

「だが奴は俺達の元から離れた。ネフシユタンの鎧の欠片を手に入れ、行方を眩ました」

「状況が状況だったため追跡は困難。彼が今何処にいるかは詳細は不明です」

「・・・聖遺物を狙ったってことは、やっぱり他国のスパイだったとか？」

「でも彼、風鳴司令が着任する前から所属している所謂古株の人でしょ？ そんな人が何で、あのタイミングで行動に出たのかしら？」

（・・・兄貴にも当たってみるか、もしかしたら『鎌倉』とも繋がりがあつたかもしれないな）

何故、蛇川悟はネフシユタンの鎧を狙っていたのか。狙うにしても何故、フィーネから奪い取る形になったのか。もっと前の段階、聖遺物が覚醒する前でも狙えたのではないか。

それに、あの戦闘力も異常だった。ノイズや超常的なモノに対して対抗できるシンフォギア、その限定解除のエクストライブモードの装者2人を手玉にとっていた。それだけでも充分にあり得ない事態だった。

疑問が増え、頭がさらに混乱する。結局の所、本人に聞くしか真相は掴めなかった。

「ふうー・・・、すまんみんな。まとめると言いつつ余計に混乱させてしまったようだな」

「い、いえそんな、あ、そうだ、ちよつと一息いれましょう。私、何か飲み物持つてきますね！」

「あ、じゃあおれもちよつと」

場の空気が良くないことがわかり、友里と藤堯の2人は一旦部屋

を離れる。

「・・・気を遣わせてしまったようだな」

「司令も休まれては？」

「そもいかん。結局俺は何もしていない。止められず、救えず、見逃すだけ、事態を収拾したのはあいつと、彼女達だ。だからこそ、今できることはしておかなくてはならん」

「司令・・・」

「・・・あいつはまだ目覚めんか？」

「・・・はい、彼はまだ眠ったままです」

「そうか・・・」

☆

生き残った二課施設のとある部屋。

他の部屋より少し大きな部屋、病院の個室の部屋には医療施設よく使われるようなベットが部屋の中心にあり、そこに1人の人物が眠っていた。

そのベットを囲むように3人の少女達が背もたれがない椅子に座り眠っている人物を見つめていた。

1人は心配そうに、1人は不満げに、1人は目覚めを待つように同じように目を伏せていた。

3人の少女、シンフォギア装者である立花響、風鳴翼、雪大人クリスは、穏やかに眠り続ける人物、黒山陽介を三者三様に見つめていた。

「……………ヨウさん、起きませんね」

「……………ああ、そうだな」

「……………」

沈黙した空気で響が言葉を発するが帰ってくるのは淡白な返事。

しかしそれは決して辛辣な態度をとりたくてとっているわけではないのだ。

戦いはひとまず終わった。起きる筈だった未曾有の災害は事前を防がれ、一連の事件の黒幕は倒された。

しかし、彼女達の中ではモヤモヤしたモノが残った。

黒幕、フィーネを実質的に殺害し、彼女と融合していた聖遺物、ネフシユタンの鎧を奪い、その行方を眩ました蛇川悟。その存在が彼女達の心に影を落としていた。

響には枷を、翼には心の自由を、クリスには激情の行き場を、

心に残る不安は彼女達の中で柱になってる彼が目覚めない現状に拍車をかけていた。

憧れ、友好、親愛、想う気持ちは微妙に異なれど彼を想う気持ちは同じだった。

早く目覚めてほしい。早く言葉を交わしたい。そんな願いを抱え彼女達は彼の目覚めを待つ。

だが、慌てないでほしい。此度はかの戦士も消耗したのだ。大きな戦いだった。復活したかの宿敵との死闘。限界越えた肉体の行使。

戦士にだって休息は必要だ。だから、もう少しだけ待ってくれ。目が覚めればまた次の戦いが待っているのだから、

だから今は休もう。ゆっくり休んで次に備えるのだ。

そう、次の戦いだ。

仮面のせんしに戦いの終わりはない。所詮今は一時の休息だ。

“王”の玉座が空では示しが見つからない。

この星の行く末はある程度決まっている。

彼に資格があっても素質はない。

彼はどんな選択をするんだろうね？

資格と力があるだけの仮面のせんしは……。

してろと弦十郎からお叱りを受け、二課オペレーターの友里あおいや、藤堯朔也からの好意で暇潰し用の小説や携帯ゲームなどを借りるが、それでも溢れるバイタリティーが止められなかった。

「みんなも、少し心配しすぎだとおもうんだけどなあ」

呑気なことを呟いていると、部屋の自動ドアが開いた。来訪者だ。

「おーす。大人しくしてるかー・・・って」

「やあ、クリス」

「大人しく寝てられねえのかアンタは！」

「おう!」

やって来た雪音クリスは、思わず持ち込んだ缶ジュースを陽介の腹に投げ込んだ。

無理もない。安静にしている筈の者がベットの所で三点倒立しながら出迎えるのだ。頭が痛くなる光景だ。

(つたく、こつちの気も知らないで・・・)

腹に受けた缶ジュースを確認し、何事もなかったように振る舞う青年にクリスは呆れ半分、安心半分の気持ちだった。

本人は何ともないとやっているが、彼が倒れて意識を取り戻すまでは此方は気が気じゃなかった。

常人ならとつくに死亡してもおかしくない出血量に肉体的なダメージの大きさ、彼が倒れた時クリスは失った両親と彼の姿が被ってしまった。

また失くしてしまうのかと、やっと帰ってこれた居場所が失くなってしまふのかと心中穏やかではなかった。

が、件の彼は熟睡して目覚めた様な反応で起きた。心配は杞憂に終わったが、此方の心労も労ってほしいものだど内心愚痴る。だが、無事であることには本当に安心した。

それはそれとして、

ツカヅカと歩き、ベットの左側に移動しそこにある椅子に腰かける。

「ん」

ぼんぼん、とベツトを叩く。

「えっと」

「んー」

更に強くぼんぼんとベツトを叩いた。横になれと暗に伝える。

陽介も渋々といった様子でベツトに戻った。

「よいしょ」

「えっと、クリス？」

「いいからそのまま」

「あ、はい」

ベツトに戻った陽介は上半身は起こした状態だ。足は伸ばして投げ出している。その陽介の太ももにクリスはコテンと頭を乗せた。

これが、ここ最近のクリスの日課だ。

陽介が目覚めてからは誰もいない時はこうして甘えるのだ。まるで気難しい猫のように体を刷り寄せる。

陽介も心配かけちゃったからなあ、とクリスの行動を特に咎めはしない。陽介にとっては歳の離れた妹が甘えてくるような感覚だった。陽介にとっては歳の離れた妹が甘えてくるような感覚だった。

眼前のクリスを見るが、彼女は顔を陽介とは合わせずにいるためどんな顔をしているのから分からない。

(・・・ふへへ)

その本人はだらしなく顔を緩ませていた。

もうこれ以上ないほどに蕩けた顔。クリスにとって誰にも邪魔されず大切な家族のような者と共に過ごすこの時間は何よりも心が休まる瞬間だった。

しかし、そんな時間も何時までも続かない。

「失礼します」

凜とした声で入室してきたのは風鳴翼だった。

「いらっしやい、翼ちゃん」

「はい、・・・やはり雪音が一番乗りか」

「ん？」

「いえ、何でもありません」

そう言つて翼は、ベットの右側に移動しそこにある椅子に座る。因みにクリスは、翼が入室する直前に身を翻し椅子の上で体育座りをし何事もなかったように興味無さげな顔でいた。

翼はガサゴソと持ち込んだビニール袋からリンゴを一つ取り出し果物ナイフを手にする。

陽介とクリスの視線が翼に集中し、場の空気が引き締まる。

「すう——、ハアツ！」

ズババツ！

「・・・よし」

「よし、じゃねえよ！」

「む、どうした雪音」

「どうしたでもねえよ！ 何でリンゴ捌くのに毎回そんな大掛かりなんだよ！」

「だが、この方が确实だぞ？ ちまちま剥くより斬った方が私は性に合っているしな」

翼の行動に思わずクリスはツツコミを入れる。

翼は手に持ったリンゴを空中へ投げ出し、気合一閃、果物ナイフを振るう。リンゴはその形を保ったままいつの間にか取り出した小皿の上にキャッチさせると、パカツと綺麗に六等分に分けられた。

翼はその出来映えに満足気だが、曲芸みたいな行動をとる姿はクリスにとっては心臓に悪かった。

とはいえ、翼がこんな派手にリンゴを切り分けるようになったには理由がある。

もちろん最初は普通にリンゴを剥こうとした。しかし、いざトライしてみれば、出来上がったのは身が剥ききった芯しか残ってないリンゴが出来上がった。

勿論、翼は大真面目にリンゴを剥いていた。危なっかしい手つきだったが「剥く」作業は出来ていた。

だが、何度やっても出来上がるのは芯しか残らないリンゴだった。落ち込む翼にクリスが一言。

「アンタなら斬った方が早いんじゃないかねえか？」

冗談混じりの言葉だったが、翼には全身に電流が走るほどの天啓だった。

剥いて形を作るのではなく斬って形を作る。目指す結果が同じなら過程は問題ではなかった。

そこからの翼の行動は早かった。水を得た魚のようにリングを手当たり次第に斬り分けた。年相応にはしゃぐ翼の姿に陽介はしばらくリングだけで腹がいっぱいになったのだった。クリスはその様子に呆れた。

「ヨウさくん、こんにちはく……って、もうみんないる!？」

元気な声と共にやって来たのは響だった。

「ちえく、また私が最後かあ〜」

そう愚痴りながらも響は自分の定位置、陽介から見て正面の位置に移動する。陽介を取り囲むように響、翼、クリスが椅子に座った。

「ヨウさん、体調はどうですか？」

「もうすっかり大丈夫だよ。むしろ良すぎて暇なんだよね」

「コイツ、ベットの所で三点倒立してやがったんだぜ」

「ふうくん」

「……何だよ、そのニヤケ面は」

「それを知ってるってことは、クリスちゃんまた一番に来たんだね〜」

「……それが何だよ」

「いや〜、クリスちゃん。ヨウさんのことそんなに」

「うおおあああああッ!？」

「げぼおッ!？」

「ははは、2人はすっかり仲良さだな」

「そうですね」

響が何か言おうとした瞬間、クリスは椅子から飛んで響を押し倒した。

女の子らしからぬ悲鳴をあげてしまうが、弾丸のようにクリスが飛び込んだのでしょうがない。もたれこむ2人の姿に、犬と猫がじや

れあつてる姿を幻視しながらそう思う。

互いに事情があり、敵対していた彼女達だが、今はこうして気を許しあっている。

クリスは否定するだろうが照れ隠しなのであまり気にするものではない。なんだかんだ言いつつも近い年齢の子と話せること自体は嬉しいはずだから。

「余計なこと言うのはこの口かこらー!」

「ひっはらないへ〜」

「黒山さん、リンゴのおかわりはどうですか?」

「ああ、うん、じゃあ、もらおかな」

今はただ、この平和な時間を黒山陽介は噛みしめるのだった。